味がその中に含まれてゐはしないか、彼を嘲笑の中へ陥し入れるつもりではなからうかといふ自分の疑惑を、すぐにミーチャに打ち明けておいた方がはるかに好都合だつたらう。しかし、ミーチャは、『そんなつまらないこと』に引きとめられてゐる餘裕がなかつた。彼は足を早めて、大股に歩いて行つた。やがて、無水村（スホイ・バンショーロク）へやつと行き着いたとき、一露里や一露里半くらゐではなく、少くとも三露里くらゐは歩いて來てゐるのに氣がついた。このことは彼に相當に忌々しかつたが、それでも我慢をしてしまつた。

二人は小屋へ入つて行つた。長老と馴染みの森の番人は小屋の片方に暮らしてゐて、廊下を隔てた向う側の、きれいな方にはゴルストキンが寄寓してゐた。二人はこのきれいな小屋へ入つて行つて、蠟燭に火をつけた。小屋は煖爐ですつかり熱くなつてゐた。松材のテーブルには火の消えたサモワルや、コップを載せたお盆や、空になつたラム酒の壜や、飲みさしの火酒（ウォトカ）の角壜や、食べ殘りの小麥の麵麭などが載つてゐた。泊り客自身はベンチの上にながながと寢そべつて、枕の代りに上衣をたたんで頭の下に置き、重々しい鼾をかいてゐた。ミーチャはどうしたものかと迷つてしまつた。『どうせ起こさなければならない。おれの用事はとても大事なことなんだ。おれはあんなに急いでやつて來たのだし、それに今日ぢゆうに歸らなければならないんだ。』とミーチャはいらいらし出した。ところが、長老や番人は自分の意見をいはずに、默々として立つてゐる。ミーチャは傍へ近づいて、自ら起こさうとした。精一ぱい起こしてみた。しかも、レガーヴイは眼をさまさうともしない。

『醉つぱらつてるんだな』とミーチャは一人できめた、『しかし、おれはどうしたらいいんだらう！

ああ、どうしたらいいんだらう！』彼は我慢がならなくなつて、手や足をもつて引つぱつてみたり、頭をゆすぶつてみたり、彼を抱き起こしてベンチに坐らしてみたりした。かなりに長いこと骨を折つてみたが、結局は醉つ拂ひが譯の分からないことを言ひ出したり、曖昧ではあるが力づよい調子でしやべり出したりしただけのことであつた。

「駄目ですよ、あなた、もう少しお待ちなさるがいいでせう、」たうとう長老が口を切つた。「何しろ、當り前ぢやないらしいですからね。」

「一日ぢゆう飲んでゐましたよ、」と森の番人が調子を合はせた。

「とんでもない！」とミーチャが叫んだ、「どれほどこちらが必要に迫られてゐるか、どんなに絶望してゐるか、あんた達に分かつて貰へたらなあ！」

「駄目ですよ、朝までお待ちなさる方がいいでせう。」長老は繰り返した。

「朝まで？　冗談ぢやない。　とてもかなはん！」

彼は絶望のあまり、また醉ひどれに飛びかかつて、起こしかけたが、そんなことをしたところで、結局は骨折損なことが分かつたので、すぐに手を引いてしまつた。長老は默々としてゐる。眠さうな森の番人は暗い顏をしてゐる。

「浮世といふものは、何といふ怖ろしい悲劇を、人間の身のうへに降らせるものだらう！」ミーチャはもうすつかり絶望してしまつて、かういつた。汗が顏から流れる。長老は好機逸すべからずとばかりに、たとひ、この男を起こすことができたにしても、まだ醉ひが覺めてゐないだらうから、やつぱり相

談はできないだらうといひ、『おまけに、あなたの御用は非常に大事なのですから、明日の朝までお待ちになつた方が確かでせうよ』と實に尤もなことを言つた。ミーチャは兩手をひろげて、同意した。

「爺さん、おれは蠟燭をつけて、ここで待つてることにするよ、そして、潮時をつかまへることにしよう、——眼をさましたら、直ぐに始めるんだ……蠟燭代は拂ふよ、』と彼は番人に向かつていつた、「泊り賃も出さう。ドミトリイ・カラマゾフを疎かにしないでくれよ。ところで爺さん、お前さんと一緒にどこにゐたらいいかな、お前さんはどこへ寢るんだい?」

「いや、私はもう家へ歸ります、この牝馬に乘つて家へ歸りますよ、」と彼は森の番人を指しながらいつた。「さあ、これで御免かうむります。あなたの御成功を祈りますよ。」

話はその通り決まりがついた。長老は番人の馬に乘つて出て行つた。彼はやつとその場を外すことができたので、內心喜んではゐたが、それでも何だか心配さうに、首を振りながら、明日このことを恩人のフョードルに知らせる必要がないものだらうかと思案してゐた。

『でないと、運の惡い場合だから、このことが耳に入つたら、きつと腹を立てて、これから先き、目をかけていただけないかも知れん。』

番人は身體を掻きながら、無言のまま自分の部屋へ歸つて行つた。ミーチャは自分の言葉通りに『潮時をつかまへる』ために、ベンチに腰を下ろした。深い、怖ろしい憂愁が、重苦しい霧のやうに彼の心を閉ぢこめた。深い、怖ろしい憂愁! 彼はじつと考へ込んでゐたが、何一つ、しつかりと考へることができなかつた。蠟燭の火は燃え、こほろぎが鳴き出し、煖爐を焚きすぎた部屋はたまらないほど息苦

しくなつて來た。不意に彼の眼に庭が浮かんで來た。庭の向うに小徑が見える。父の家のドアがこつそり開いて、グルーシェンカがその中へ駈け込んで行くではないか、……彼はベンチから跳び上がつた。

「悲劇だ!」と彼は齒を鳴らしながら言つた。機械的に眠つてゐる男に近づいて、じつとその顏を覗きこんだ。それは痩せこけた中年の百姓で、顏は思ひきつて細長く、亞麻色の髮の毛は渦を卷き、頤髯は長く、ほつそりと、赤みがかつてゐた更紗襯衣に黑いチョッキを着けてゐたが、そのポケットからは銀時計の鎖が覗いてゐた。ミーチャはひどく憎々しさうに、その顏を覗きこんでゐたが、わけても、その縮れ髮が何とはなしに、憎らしくてたまらなかつた。

しかし、何よりも忌々しいのは、自分ミーチャがあれほど大きな事件を打ちすてて、あまつさへ、あれほどの犧牲を拂つて、猶豫することのできない用件を抱きながら、散々に疲れはてゐるのに、このやくざ者は自分の全運命をになひ、まるで他の遊星から落ちて來たかのやうに、天下泰平に、鼾をかいてゐるといふことであつた。

『おお、何といふ運命の皮肉であらう!』とミーチャは叫んだかと思ふと、すつかり我を忘れて、又もや醉つ拂ひの百姓を起こしにかかつた。彼は一種の荒々しさをもつてその男を呼び起こしたり、引つぱつたり、突ついたり、つひには撲つて見たりした。しかし、五分間ばかり骨折つて見たが、何の效き目もなかつたので、據りどころのない絕望に陷り、ベンチに引き返して、腰を下ろした。

「こんなことは馬鹿げてる、馬鹿げてる!」とミーチャは叫んだ、「何といふ淺ましいことだらう!」不意に、何とはなしに彼は言ひ足すのであつた。頭は怖ろしく痛み出した。『もうあきらめてしまはう

か、歸つてしまはうか?』といふ考へが胸にちらついた、『いや、とにかく明日の朝まで待たう。かうなれば意地にでも踏み止まつてゐよう。でたければ、あんなことのあつた後で、のこのこやつて來た甲斐はないし? それに、歸るにも乘り物はなし、今ごろこんな所から歸れるものぢやなし、ああ、つまらないことだ!』

それにしても、頭はいよいよ烈しく痛んで來た。彼は身動きもせずに、じつと坐つてゐたが、いつの間にか、うとうとと、坐つたまま眠り込んでしまつた。どうやら、二時間、或ひはそれ以上眠つたらしかつた。彼は喚きたいほどの、どうにも我慢のならない頭痛を覺えて、眼をさました。こめかみはづきづきするし、額は割れるほど痛かつた。眼がさめても、すつかり我にかへつて、自分に何ごとがおこつてゐたのかを知るまでには、かなりの時間がかかつた。

そのうちに、これは煖爐を焚きすぎたので、怖ろしい炭酸瓦斯が部屋に立ちこもつて、事によつたら息がつまつて死んでしまふかも知れなかつたのだと、やうやくにして、氣がついた。それでもまだ、醉つ拂ひの百姓は、鼾をかいて寢そべつてゐた。蠟燭の火は燃えつきて、今にも消えさうになつてゐた。ミーチャは叫び聲を立てて、よろめく足取りで、廊下を隔てた森の番人の小屋をさして走つて行つた。森の番人はすぐに眼をさましたが、向うの小屋に炭酸瓦斯がこもつてゐると聞いて、早速その方へ始末をしに出て行つた。が、その事實を不思議なほど冷淡にあしらつてゐるので、ミーチャは驚ろくと共に腹立たしかつた。

「でもあの男は死んでるぞ、あの男は死んでゐるんだ、して見ると、……どうしたら、いいんだ、その時は?」ミーチャは夢中になつて、大きな聲で呼びかけた。

二人は扉を押し明けたり、窓を開けたりした。ミーチャは廊下から水の入つた桶を持つて來て、先づ第一に自分の頭を冷やしてから、今度は何かの布れを見つけてそれを水に浸し、レガーヴイの頭にのせてやつた。が、番人は相も變らず、この事件を何となく侮蔑的な態度で見てゐた。やがて窓を明けると、氣むづかしさうに、『まあ、もうこれで大丈夫。』といつて、灯のついた提灯をミーチャに殘したまま、また一寢入りするために引き返して行つた。ミーチャは窒息しかけた醉つ拂ひの頭を冷やしてやりながら、半時間ほども、世話をやいてゐた。さうして、本氣になつて、夜通し眠らずにゐようと決心したが、もう疲れ切つてゐたので、ちよつと一と休みしようと、腰を下ろすと、忽ち眼がふさがつて、知らず識らずのうちにベンチのうへに長々と寢そべつて、死人のやうに眠り込んでしまつた。

眼をさました時は、ずゐぶん遲かつた。もうかれこれ朝の九時ごろになつてゐた。太陽は小屋の二つの窓から明るく射し込んでゐた。縮れ髮の百姓はベンチに腰かけて、もうちやんと上衣を着けてゐた。その前の方には新しいサモワルと新しい角壜が置いてあつた。昨日の古い壜はもうすつかり空けてしまつて、今度の分も半分以上は空になつてゐた。ミーチャはいきなり跳ね起きると、直ぐに憎らしい百姓の奴が又しても醉つぱらつて、手のつけられないほど、正體もなく醉つぱらつてゐるのに氣がついた。彼は大きな眼を見ひらいて、暫らくその顏を見つめてゐたが、いやに落ちつき拂つて、何だか人を馬鹿にしたやうな傲慢さをさへ示してゐるらちらちら見てゐた。百姓は物も言はずに、ずるさうな眼で彼を

しく、ミーチャには感ぜられた。彼はその方へ駈け寄つた。

「失禮ですが、御承知の通り……私はあなたも、あちらの小屋の番人からお聞きなすつたことと思ひますが、私は中尉ドミトリイ・カラマゾフと申しまして、あなたに森を賣る話のあるカラマゾフ老人の息子です。」

「嘘つばちばかり！」と百姓はいきなり、しつかりした、落ちついた調子でどなりつけた。

「嘘ですつて？　あなたはフョードル・パーヴロヰッチを御存じのくせに？」

「そのフョードル・パーヴロヰッチなんて人はちつとも御存じなしさ。」百姓は物倦げに舌を廻しながら言つた。

「森を、あなたは親父から買はうとしてるんぢやありませんか、森を。まあ、眼をさまして、氣をたしかに持つて下さいよ。イリンスキイ長老がわたしをここへ連れて來たのです。あなたがサムソノフに手紙をおやりになつたので、それで私をここへよこした譯なんです……」とミーチャは息を切らしながらいつた。

「う、うそつばち！」レガーヴイは又もやはつきりした調子でどなりつけた。ミーチャの足はだんだん冷たくなつて來た。

「とんでもない！　冗談ぢやありませんよ！　多分、あなたは醉つてゐらつしやるんでせう。しかし、當り前な口もきけるし、得心も行きさうなもんぢやありませんか……さもないと……さもないと、何が何だかわたしには分かりませんよ！」

「お前さんは紺屋（こうや）だ！」

「とんでもない！　私はカラマゾフです。ドミトリイ・カラマゾフですよ。私はね、あなたに御相談があるんですよ、……有利な相談なんですよ。……森に關係のある……すてきに有利な！」

百姓は鹿爪らしく髯を撫でた。

「ちがふ、お前さんは人の仕事を請け負つておきたがら、それを放り出して、惡黨になつたんだ。惡黨なんだ！」

「實際、そんなことはありませんよ、それはあなたの勘違ひです！」とミーチャは絶望のあまりに兩手を揉んだ。百姓はたほも髯をひねつてゐたが、いきなり猾さうに眼を細くした。

「いや、ところで一つ伺ひたいが、一體、詐欺をしても許すといふ法律があるなら敎へて貰ひたいもんだ。え！　實際、惡黨だ！　お前さん、分かつたかね？」

ミーチャは憂鬱さうに後ろにさがつた。と、不意に『何物かに額をたたきのめされた』やうな氣がした、――これは後で彼自身の言つたことである。忽ちに、胸の中に明りがさして來たやうに思はれた。『炬火のやうなものが明るく輝やいて、自分はすべてのことを見きはめることができた。』ともいつてゐた。彼は茫然と立つてゐたが、自分のやうなつねに分別のある人間が、よくも、こんな馬鹿げたことに釣り込まれて、こんないさこさに、いい氣になつて乘り出したものだ、しかも、一晝夜も乘りつづけてレガーヴイなどといふ男の世話をしたり、頭を冷やしてやつたりしたものだと、彼には我ながら不思議でたまらなかつた。

『いや、この男は酔つばらつてゐるんだ、ぐでんぐでんに酔つばらつてゐるんだ。この調子では一週間でも飲みつづけるかも知れない。して見ると、かうして待つてゐたつて、駄目ぢやないのかしら？サムソノフがわざと寄こしたのだとすると、一體どういふことになるんだらう？　それにまた、若しあの女が……ああ、おれは何といふことを仕出かしたんだらう？』

百姓はじつと坐つたまま、彼をみつめながら嘲笑つてゐた。これが若しも、ほかの場合であつたなら、ミーチャは腹立ちまぎれに、この馬鹿者を殺してしまつたかも知れない。しかし、今は自分も子供のやうにすつかり弱くなつてゐた。彼は靜かにベンチのところへ行つて、自分の外套を取り上げ、默々として、それを着るなり、そのまま小屋の外へ出て行つた。一方の小屋には、番人の姿も見えず、また、誰一人としてゐなかつた。彼はポケットから細かい金を五十哥だけ取り出して、それを宿賃と、蠟燭代と、厄介をかけたお禮のつもりで、テーブルの上に載せておいた。小屋から一歩出ると、見わたすかぎり一面の森で、ほかには何も見えなかつた。彼は小屋を出てから、どつちへ曲つたらいいのか、——右か、左か、それさへも分からずに、足の向くままに歩き出した。前の晩、長老と一しよに大急ぎでこへ來たので、路のことなどはてんで氣もつけなかつた。今は誰にたいしても、サムソノフにたいしてさへも、何らの復讐の念を感じなかつた。『失はれた理想』を懷いて、自分がどこへ行くのかさへも全く頓着なしに、あてどなく、ふらふらと、狹い森の徑を辿つて行つた。今は行きずりの幼兒にさへも打ち負かされるくらゐに、心身ともに、急に、力が拔けてしまつた。が、どうにかかうにかして、森を拔けた。ふと、刈入れのすんだばかりの露はな野原が、見わたすことの出來ないほど廣々と展

けて來た。

『何といふ絶望であらう！　見渡すかぎり何といふ死が！』と、彼はなほも先きへ先きへと進みながら、繰り返してゐた。

彼を救つてくれるのは道行く人であつた。馬車屋がどこかの年老いた商人を乘せて、村の道を通りかかつたのである。馬車が追ひついたとき、ミーチャは路を訊いた。すると、それもやつぱりワローヴィヤ驛へ行く途中だとのことであつた。ミーチャは交渉をして、合乘りとして乘せて貰つた。三時間ほどして、彼らは目的地へ着いた。ミーチャはワローヴィヤへ着くなり、さつそく町までの驛遞馬車を命じたが、急に、堪らないほどの空腹を感じた。馬を車につけてゐる間に、彼は卵燒をこしらへてもらつた。忽ちのうちにそれを平げた上に、彼は大きな麵麭のきれと腸詰とをぺろりと食べてしまつた。おまけに火酒（ウオツカ）を三杯も傾けた。腹ごしらへが出來ると、元氣がついて、胸の中もまた、さつぱりして來た。馭者をせき立てて、街道を飛ぶやうに走らせたが、急に彼は、夕方までにあの『呪ふべき金』を手に入れるための新しい、今度こそ『動かすことのできない』計畫を作り上げてしまつた。『まあ、考へて見るがいい、わづかに三千留といふはした金のために、男一匹の運命が臺なしになるなんて、考へただけでも呆れ返る！』輕蔑したやうな調子で彼は叫んだ、『今日中に始末をつけてやらう。』

ここで若しも、今までにも始終つきまとつてゐたグルーシェンカのことや、彼女がどうしてゐるだらうかといふやうな心配さへなかつたら、おそらく彼は元のやうに、すつかり陽氣になつたかも知れぬ。ところが、彼女を思ふの念が、鋭いナイフのやうに、絶え間なく、彼の心を突き刺すのであつた。

つひに、車は町に着いた。ミーチャは直ぐにグルーシェンカのところへ駈けつけた。

金鑛

これこそ、あのグルーシェンカがいかにも怖ろしさうにラキーチンに話したことのあるミーチャの來訪であつた。そのころ、彼女は例の『たより』を待つてゐたので、昨日も今日もミーチャが顏を見せなかつたのを喜んで、『どうか自分の出立まで來ないでくれるやうにと、神樣にお願ひ』してゐたところであつた。ところへ、不意に眼の前に彼の姿が現はれたのだ。それから先きのことはもう分かりきつてゐる。彼女は男をまいてしまふために、これからすぐにサムソノフの家まで自分を送つて行つてくれと說きつけた。彼女はそこへ『金の勘定』をするためにどうしても行かなければならないのだ、といつたやうな風を見せたのである。ミーチャはすぐに同伴したが、クジマの門のところでわかれる時に、彼女は十一時すぎになつたらまた家へ送り返してもらひたいから、是非その時刻に來てくれるやうにといつて、間違ひなく來るやうにと約束をさせた。ミーチャの方でもこの命令を喜んでゐた。『若しも、あの女のいふことが嘘でなければ、……サムソノフの家にゐる間は、どうせ親父のフョードルのところへ行

く筈はないのだ……』と彼は心の中で、すぐに附け加へた。彼の見たところでは、彼女が嘘をついてたとは見えなかつたのである。

彼はこんな風な性質のやきもちやきなのであつた——つまり、自分の愛してゐる女が留守になつて、離れてゐる時には、女の身にどんなことが起こつてゐるかしら、自分を『裏切つて』はゐないだらうか、といつたやうな、ありとあらゆる怖ろしい空想を逞しうして、もうきつと自分を裏切つてゐるにちがひないと、心の底から思ひ込んで、あわてふためいて、生きた空もなく、女のところへ駈けつけるのであるが、一たび女の顏を——愉しさうににこにこしてゐる優しい顏を見るなり、急に元氣を取り戻して、もう疑ひなんぞといふものは全く吹きとばしてしまつて、嬉しいやうな恥づかしいやうな氣持で、自分の嫉妬心を罵るのである。

グルーシェンカを送りとどけるなり、ミーチャは我が家をさして駈け出した。おお、彼は今日中に片づけなければならない仕事が山ほどあるのだ。しかし、少くとも心の重荷だけは下ろしたやうに輕くなつた。

『とにかく大急ぎでスメルヂャコフから聞き出さなければならない、昨晩、何か變つたことが起こらなかつたかどうか、若しあの女が親父のところへ行つたとすれば、ああ、それこそ！』といふ考へが彼の胸裡にひらめいた。こんな有樣で、彼がまだ自分の家へ辿りつかないうちに、またもや嫉妬の念が、切ない胸の中にうごめき出した。

嫉妬！『オセロ』*は嫉妬ぶかくはない、かへつて、人を信じやすい。』とプッシキンはいつてゐる。實

にこの言葉だけを以てしても、わが偉大なる詩人の洞察力を示すに充分である。オゼロは單に魂を打ち碎かれ、一切の人生觀を曇らされたといふにすぎない。即ち、彼の理想が亡びたからである。しかし、オセロは身を潜めたり、探偵したり、覗いたりはしない。彼は人を信じ易い。それどころか、彼に裏切を信じさせるためには、非常な骨折をして、突いたり、押したり、煽てたりしなければならなかつた。眞のやきもちやきといふものは、そんなものではない。眞のやきもちやきといふものは、到底他人の想像もつかないやうな汚辱と道德的墮落とを、何らの良心の苛責もなしに犯すことができるものである。しかし、それらすべての人が陋劣な醜惡な精神の所有者であるかといふに、決してさうではない。それどころか、かへつて高尙な感情を具へ、純眞で自己の犧牲の精神に充ちた愛情を抱いてゐながらも、同時に、テーブルの下に身をひそめたり、卑屈きはまる人間を誘惑したり、探偵したり、立ち聞きをしたりするやうな淺ましいことを平氣でやつてのけるのである。

オセロはどんなことがあらうとも、裏切りを諦めることができなかつた筈である、——許す許さないは別としても、諦めることはできなかつた筈である、——たとひ、彼の精神が幼兒のやうに惡意がなく、無邪氣であつたにしても。本當のやきもちといふものは、決してそんなものではない。或る種のやきもちやきが、果してどんなことを大目に見、どんなことを諦めうるものか、それはたうてい常人の想像し得ないところである。やきもちやきは誰よりも早く、人を許す、このことはどんな女でもよく承知してゐる。やきもちやきはおそろしく早く（もとより初めのうち怖ろしい場面を演じた後で）、例へば、殆んど證據の歴然たる不貞をも許し、眼の前に演ぜられてゐる接吻と抱擁をも許すことができる。尤

も、これはただ、『どたん場』に及んだ時のことで、戀がたきが今からどこかへ身をひそめて世界の果てへ行つてしまふとか、自分がどこかへ、その女を連れて、怖ろしい戀仇が二度とやつて來ないやうな、どこか、さういふところへ行つてしまふとかいふ場合に限ることである。いふまでもなく、諦めるのは、ほんの暫らくの間のことである。なぜならば、戀仇が實際に姿をかくしてしまつたところで、早速また翌くる日には新しい戀仇をこしらへて、新しいのにやきもちを燒くからである。して見ると、それほど監視の眼をつけなければならない愛に、何の樂しみがあるのか、またそれほど一生懸命に警戒しなければならない愛といふものに、どれだけの値打があるものか？　といふやうな氣もするであらう。ところが、本當のやきもちやきといふものには、とても、そんなことが分かるものではない。それどころか、さういふ御連中の中には高潔な精神の人さへもあるのである。殊に著しいのは、高潔な精神をもつてゐるその人種の人たちが、どこか戸棚の中にかくれて、聽き耳を立てたり、探偵したりしてゐる時には、その『高邁なる精神』によつて、自らすき好んで陷つた汚辱のどん底を、はつきりと了解してゐながらも、決して良心の苛責といふものを感じないことである。

ところで、グルーシェンカを見るなり、ミーチャの嫉妬心は、あとかたもなく消え失せて、忽ちにして、彼は信じ易い、品のよい人間となつて、かへつて、今までに卑しい氣持を懷いてゐた自分自身をすつかり輕蔑したくらゐであつた。とはいへ、これは要するに、この女にたいする彼の愛情のうちに、單に

＊　プーシキンのノオト（一八三〇―三六）の一節。その全文は「オセロは生れつき嫉妬ぶかくはない。それどころか、かへつて、人を信じやすい。ヴオルテールはこれを悟つて、これに倣ひ、シエークスピアの創れる人物を發展させ、その人物オロスマンに次の句を吐かしめた、Je ne suis jaloux…… Si je l'etais jamais! ……♥」（譯者註）

慾情だとか、さきにアリョーシャに話したやうに『彼女の曲線美』だとかばかりではなしに、彼自身が想像したよりも、ずつと高尙な或るものが含まれてゐたといふことを、證據立てるに過ぎない。ところが、グルーシェンカの姿が見えなくなると、ミーチャは直ぐにまた、彼女が、卑劣な、狡猾な裏切りをしてゐるのではないかと疑ひ出したのである。しかも、それについて良心の苛責などは更に感じはしなかつた。

かうして、嫉妬心が彼の心の中に再び湧き立ちはじめた。何はともあれ、急がなくてはならない。先づ第一に、取りかからなければならないのは、ほんの少しでもいいから、一時逃れの借金をしなければならないといふことであつた。昨日の九留の金は旅行のために殆んどなくなつてゐた。知つての通り、一文なしでは手も足も出せるものではない。尤も、彼はさつき馬車の中で、新しい計畫とともに、借金する方法までも、ちやんと考へておいた。彼はケースつきの立派な決鬪用のピストルを一對、持つてゐた。それをこの時まで質に入れずにおいたとすると、それは自分の持物の中で最も愛惜してゐたからのことである。

彼はもうずつと前に、『都』といふ居酒屋で、或る若い官吏とちよつとした近づきになつたが、何かの折にちよつと聞いたところでは、この若い裕福な官吏は熱心な武器愛好者で、普通のピストルや、連發の物や短刀を買つて來ては、居間の壁にぶらさげて知人に見せびらかしては、自慢をしたりしてゐたが、特に連發拳銃の組織や、裝塡法や發射法などを說明することにかけては名人だとのことであつた。ミーチャは深く考へもしないで、一目散にこの人のところへ駈けつけて、ピストルを十留で質にとつ

てくれるやうにと申し込んだ。若い官吏は有頂天になつて、何とかしてそれをすつかり手放さないかと勸めたが、ミーチャは承諾しなかつた。そこで、若い官吏は利子などは決してとらないからといつて、十留の金を渡した。二人は氣持よくわかれた。

ミーチャは急いでゐた。彼は一刻も早くスメルチャコフを呼び出さうとして、フョードルの家の裏手にあたる例の四阿さして飛んで行つた。ところが、またもや次のやうな事實がはつきりして來たのである、といふのは、これから私が物語らうとしてゐる或る事件の三四時間まへに、ミーチャは一哥の金を持つてゐなかつたので、自分の愛藏品を十留で質入れした、かと思ふと、三時間の後には數千の金を握つてゐたといふのである。……しかし、そのことを話すのはまだ早すぎる。

彼はマリヤ・コンドラチェーヴナ（フョードルの隣りの女）から、待つてゐましたとばかりに、スメルチャコフが病氣でゐるといふ話を聞かされて、一方ならず驚ろくと共に當惑してしまつた。穴藏へ墜ちたこと、發作のこと、醫師の來診のこと、フョードルの心配のことなど、彼は一部始終を聞きとつた。彼はまた、弟のイワンがその朝もうモスクワへ出發したといふことも興味をもつて聞いた。

『して見ると、おれより先にワローヴィヤを通過したにちがひない、』とミーチャは考へた。とはいへ、今はそれよりもスメルチャコフのことの方が一そう怖ろしく氣がかりであつた、『今ごろどんなことになつてゐるだらう？　誰が自分のために見張番をしてくれるだらう？　誰が自分にこつそり知らしてくれるだらう？』彼はそこの家の女たちに向かつて、ゆうべ何か氣づいたことはないかと、貪るやうな調子で、根掘り葉掘り訊き出した。相手には彼の聽きたがつてゐることがよく分かつてゐるので、誰も來

た人はゐないし、イワンもゆうべはここへ泊つたのだしするから、『何もかもきちんとしてゐました』と、全く安心するやうに言ひ含めた。ミーチャは考へ込んでしまつた。今日はどうあつても見張りをしなければならないが、どこで見張りをしたものだらう？　ここにするか、それともサムソノフの門前にしようか？　彼はそこととこと兩方とを警戒しなければならないと決心した。しかし、……しかし、……馬車の上で考へ出したあの新しい、今度こそは間ちがひのない『計畫』が眼の前に控へてゐるので、それをうつかりして實行しない譯には行かなかつた。ミーチャはその方へ一時間だけ犧牲に供することにした。『一時間のうちにすつかり解決して、何もかも見とほしをつけよう。それから何よりも第一にサムソノフの家へ驅けつけて、そこにグルーシェンカがゐるかどうかをたしかめて、それからすぐにここへ引つ返して來る。そして十一時まで待つて、それから、もう一度サムソノフのところへ出かけて、あれを家まで送りとどけることにしよう。』彼はさうすることに覺悟を決めた。

飛ぶやうに家へ歸ると、顏を洗つたり、髮を梳いたり、服に刷毛をかけたり、着換へをしたりして、ホフラーコワ夫人のところへ出かけた。嗚呼、彼の『計畫』はここにあつたのだ。彼はこの夫人から三千留の金を借りる決心をしてゐたのである。それればかりではなく蟲のいいことには、咄嗟の間に彼は、夫人が自分に金を借すことを決して拒絶しはしないであらうと確信したのであつた。若しも彼が實際にさう確信したものなら、なぜ初めからあの自分とは別階級の、どう話しかけていいか分からないやうなサムソノフなどといふ緣のない男のところへ行つて、いはば、自分と同じ仲間の、この夫人のところへなぜ行かなかつたのか、といふ不審が起こるであらう。

しかし、實をいふと、彼はホフラーコワ夫人とは、この一ケ月ほど、すつかり疎遠になり、以前とても、それほど親しくしてゐた譯でもなく、おまけに、夫人が彼をひどく嫌つてゐるのをよくよく知り切つてゐたからである。この夫人は最初から彼がカテリーナと婚約があるといふことのために彼を憎んでゐたのである。彼女はカテリーナがミーチャをすてて、『あの優しい、古武士のやうな教養のある、物ごしの立派なイワン』と結婚してくれればいいがと、夢中になるほど望んでゐた。ミーチャの態度は憎らしくてならなかつた。またミーチャはミーチャで、夫人を冷笑さへもしてゐたので、或る時などは、彼女のことを、あの婦人は『はきはきしてゐて、物にこだはらないが、それと同じ程度に無教育だ』などといつたりした。

ところが、今朝ほど馬車の中で、極めて立派な一つの考へが彼の心に浮かんだのであつた。『若しも、あの夫人がそれほどまでに、俺とカテリーナとの結婚を嫌つてゐるのなら（夫人が殆んどヒステリイになるほど嫌つてゐるのを彼はよく知つてゐた）、夫人はいま三千留を拒絶する譯はないではないか。この金を持つてカーチャと別れて、永久にここから逃げ出させるためとあれば？　あんな得手勝手な上流婦人といふものは何か非常に氣まぐれな氣を起こしたとなると、その出來心を滿足させるために、いかなる費用をも惜しみはしないものだ。それに、あの人はあんな金持なんだもの』とミーチャは考へた。

ところで彼のこの『計畫』そのものはどうかといふに、それは前とは少しも變らず、やはり、チェルマーシニャに對する自分の權利の提供にほかならなかつた、——しかし、無論それはサムソノフに對してのやうな商賣上の目的ではなかつた。つまり、三千留の代りにその倍額、すなはち六七千留の利益を

得る可能性を信じて、この婦人を誘惑しようとするのではなくて、ただ負債に對する抵當にしようといふだけのつもりであつた。

この新しい計畫を實行して行くうちにも、ミーチャは有頂天になつてしまつたが、これは彼が何かに取りかかる時とか、何か不意に決心が浮かんだ時とかに見せるいつもの癖であつた。彼はいかなる新しい思ひつきにたいしても、いつも熱情を傾けて沒頭するのが常であつた。尤も、彼がホフラーコワ夫人の家の階段に足をかけた時には、なぜか背中に恐怖の惡寒を感じた。これこそ自分の最後の希望なのだ、若しも失敗したら、世界中には自分のためには何一つとして殘つてゐないのだ、『わづかに三千留のために誰かに斬りつけて、强盜をするよりほかはないのだ……』といふことを、彼はこの一瞬間に、數學的にはつきりと、悟つたのである。彼がベルを鳴らしたときは、もう七時半になつてゐた。

最初のうち、問題は微笑ましい結果を招來するかのやうに思はれた。彼が取次を賴むと、さつそく、實に急に案內してくれた。『何だかおれの來るのを待つてゐたやうだ、』とミーチャは考へた。そして彼が客間に案內されるとすぐに、女主人自ら駈け込んで來て、待ちかねてゐたといふことを、だしぬけに告げるのであつた。

「ほんとに、お待ちしてゐましたのよ！　ほんとにお待ちしてゐましたわ！　あなたがお出で下さらうとは思ひもよらないことぢやありませんか、ねえ、さうでせう、ですけれど、わたし、お待ちしてましたのよ、わたしの勘のいいのにびつくりなすつたでせう、ドミトリイさん、わたしあなたが今日いらつしやるつてことは午前中いつぱい信じきつてゐましたのよ。」

「それはたしかに驚き入りますね、奥さん、」不器用に腰を下ろしながらミーチャはいつた、「しかし……僕は非常に重大な用事でお邪魔に上がつたわけなんです……僕にとつては何よりも重大な要件でしてね、奥さん……つまり僕だけに關係したことなんで、しかも、急ぎのことで……」

「ええ、あなたが何より重大な要件でいらつしたことは、わたしにもよく分かつてゐますよ、ドミトリイさん、それは豫感なんてことでもなければ、また時勢おくれに、奇蹟を憧れることでもありませんよ（あなたはゾシマ長老のことをお聞きになつて？）、これはね、これは數學の問題なんです。カテリーナさんにあんなことが起こつたあとで、あなたがいらつしやらないなんてことがありませんものね。ええ、あなたはいらつしやらずにはゐられないのです。とてもいらつしやらずにはゐられないのです。それは數學的に、たしかですものね。」

「實生活のレアリズムです、奥さん、ほんたうにそれに違ひありませんよ。しかし一體どういふ意味か、ちよつと……」

「ほんとにレアリズムですの、ドミトリイさん。わたし、今までにあんまり奇蹟なんてことを教へ込まれてゐましたからね。あなたはゾシマ長老の亡くなられたことを御存じでせう？」

「いえ、奥さん、今が初耳です。」ミーチャは少しばかり驚ろいた。彼の頭にはちらとアリョーシャの姿が浮かんだ。

「けさ、夜の明けないうちでしたの。それにまあ、どうでせう……」

「奥さん、」とミーチャは遮つた、「僕はいま非常に絶望的な立場にあるのです。で、若しあなたが助けて下さらなかつたら、萬事がめちやめちやになつてしまふのです。先づ誰よりも自分がまつ先きにめちやめちやになつてしまふのです、僕の胸には今、このことよりはほかに何もありません。何だか、説明が拙くなりましたが、お許し下さい。僕は夢中なんです。熱がありましてね……」

「分かつてます、分かつてます、あなたは熱病に罹つてらつしやるのです。わたし何でも知つてゐますよ。あなたは、よんどころなくそんなになつたのです。そしてあなたがわたしに何をいはうとしてゐるか、わたしにはよく分かつてゐます。ねえ、ドミトリイさん、前からあなたの運命が氣になつてゐたものですから、いつもそれに注目して研究してゐたのです……ええ、わたしは本當に經驗のある精神病の醫者なんですよ。ドミトリイさん。」

「奥さん、若しあなたが經驗のあるお醫者でしたら、僕はたしかに經驗のある患者です。」とミーチャはやつとの思ひでお愛想をいつた、「ですから、若しも、あなたが僕の運命を研究して下さるなら、破滅に瀕してゐる僕をきつと援助して下さるにちがひないと思ひます。ところで、そのためには僕の計畫を一通り説明させていただきたいのです。實はその計畫のために大膽にもあなたのところへやつて來たわけなんですから。……實はあなたにお願ひといふのは……僕がわざわざお宅へあがりましたのはね、奥さん……」

「説明なさらない方がいいでせう。それは枝葉の問題ですから。しかし援助といふことですが、わたしは人を助けるのはあなたが最初ぢやありませんよ、ドミトリイさん。あなたも大かた、お聞きになつ

たでせうが、わたしの從妹のペリメーソワ。あれの良人がすつかり破滅してしまつたのです、あなたの適切な言ひ方を拜借しますと、『めちやめちやになつた』のですよ。ドミトリイさん。ところがどうしたとお思ひになります？　わたしあの人に馬匹飼養について理解をおもちでせうかしら、ドミトリイさん。」

「ちつとも持つてゐません、奥さん——ええ、ちつとも持つてませんよ、奥さん！」ミーチャは神經的にいらいらしてから叫んで、ちよつと席を立たうとした、「僕はただあなたにお願ひだけすればいいのです、奥さん、まあ、お聞き下さい。ほんの二分間で結構ですから、自由に話す時間を與へて下さい。そしたらきつとすべてをあなたに説明することができるのです。お宅へあがつた計畫を全部お話しすることができるのです。それにまた、あまりぐづぐづしてゐられないのです。とても急いでるもんですから。」ミーチャは夫人がまた何かいひ出しさうにしてゐるのを見てとつて、それを遮るつもりで、ヒステリックに叫んだ、「僕は絶望のあまり、やつて來たのです、……絶望のどん底に落ちてしまつたために、奥さんから三千留といふ金を拜借しようと思つてお伺ひした譯なんです。いえ、それには確かな、何より確かな抵當があるのです、奥さん、何よりも確かな抵當がついてゐるんですから！　お願ひですから一通り……」

「そんなことはみんな後になさいよ、あとに！」とホフラーコワ夫人も負けずに手を振つて、駄目だといふ合圖をした、「前にも申した通り、あなたのおつしやらうとすることは、前からちやんと分かつてゐますよ。あなたはいくらかのお金が欲しい、三千留のお金がお入り用だとおつしやいますが、わ

たしもつとたくさん差し上げます。數へきれないほどどつさり差し上げますよ。ドミトリイさん、わたしあなたを救つてあげますわ。ですけれど、わたしのいふことも聞いて下さらないといけませんよ！」

ミーチャはまたもや椅子から跳りあがつた。

「奥さん、あなたは本當にそれほど御親切なのでせうか！」彼は一方ならず感激して叫んだ、「ああ、あなたは僕を救つて下すつたのです！　あなたは一人の人間を無理死にから救つて下すつたのです、ピストルで死ぬところを救つて下すつたのです。……僕は死んでも御恩は忘れません……」

「もつともつと差し上げますよ、三千留よりも、もつと澤山に數へきれないほど差し上げます！」とホフラーコワ夫人は感きはまつてゐるミーチャを、輝くやうな微笑みを浮かべて眺めながら叫んだ。

「數へきれないほど？　しかし、そんなには必要ありません。命にかかはる三千留さへあれば、それでいいのです。で、僕の方でも無限の感謝をもつて、その額に對する抵當を提供したいと思ひます。實は僕の考へてゐる計畫と申しますと……」

「もう澤山です、ドミトリイさん。それはもうお話もすんだし、一旦かうと言つた以上は必らずいたします、」ホフラーコワ夫人は彼の言葉を遮つて、慈善家としての純な誇りを示した、「あなたを助けるとお約束した以上はきつとお助けしますわ。わたしはベリメーソフと同じやうに、あなたをお助けしますわ、あなたは金鑛のことをどうお考へになつて？　ドミトリイさん？」

「金鑛のことですつて、奥さん？　僕そんなことは一度も考へたことがありません。」

「その代り、あなたのためにそのことを考へてゐたのですわ。何度も何度もそのことばかり考へてゐ

たのですわ。一と月も前から、わたしあなたを注意してゐたのですもの。そして、この人こそ金鑛向きの精力家だと繰り返し繰り返し獨り言をいつてゐたのですよ。わたし、あなたの歩きぶりを研究して、この人はきつと金鑛を發見する人にちがひないと一人きめしてゐたのです。」

「歩きぶりで分かるんですか？　奥さん。」とミーチャは微笑みながらいつた。

「ええ、まあ、歩きぶりからでも。歩きぶりでその人の性格が知れるづてことは、よもやあなたも否定なさらないでせうね、ドミトリイさん？　自然科學でもやはり同じことを是認してゐるぢやありませんか。ああ、わたし今ではすつかりレアリストですわ、ドミトリイさん。あれほどわたしの心をかき亂した修院での一件以來、わたしはすつかりレアリストになつて、何とかして實際的な有益なことに身を捧げたいと思つてゐたのです。わたしすつかり病氣が癒りました。＊もう澤山です！　ツルゲェネフの言ひ草ぢやありませんけれど。」

「でも奥さん、あなたがそれほど鷹揚に、僕に貸して下さるとお約束して下さつた、あの三千留の金は……」

「それはもうあなたのものですよ、ドミトリイさん、」夫人はすぐに遮つた、「そのお金はもうあなたのポケットに入つてゐるも同然ですよ。しかも三千留どころか、三百萬留ですよ、ドミトリイさん、おまけにもう今すぐなんです。いい考へを敎へてあげませうね。あなたが金鑛を發見して、何百萬といふ

＊「もう澤山だ」……ツルゲエネフの小說。一八六四年の作。（譯者註）

お金を作つて、こちらへ歸つていらつしやるのです。そして、立派な事業家になつて、私たちを導いて下さるのです。一體すべての事業を猶太人まかせにしてよいものでせうか？　あなたは立派な建物をつくつて、いろんな企業をなさる方なんです。貧民を救濟しては、彼らから祝福をお受けになる方です。今は鐵道の時代ですからね、ドミトリイさん。あなたはすぐに有名になつて、大藏省になくてはならない人物になるのです。何しろ大藏省はいま非常に人材を要求してゐますからね。わたしは露西亞の留の下落が氣がかりで、夜もろくろく眠られないんですよ、ドミトリイさん。わたしなんかこんな考へを持つてゐても、世間ではあまり知らないんですよ……」

「奥さん、奥さん！」ドミトリイは一種不安な豫感を懷きながら、再び遮つた、「僕は大てい、あなたのお勸めに從ひませう、――立派な御忠告に從ひませう、奥さん……僕は本當に金鑛へ出かけませう……いづれそのことについては、も一度お邪魔にあがります……いえ、何遍でも參りますよ……しかし、今は、あなたが鷹揚にも僕に約束して下すつたあの三千留を……ああ、それさへあれば僕は自由なからだになれるのです、若しできることなら、今日にでも、つまり、僕はね、今は一時間たりとも呑氣にしてはゐられないのです、ほんの一時間でも、……」

「もう澤山ですよ、ドミトリイさん、もう澤山！」ホフラーコワ夫人はしつこく遮つた、「問題はただ、あなたが金鑛へ行らつしやるか、どうかといふことです。すつかり御決心がつきましたか、はつきりと、御返事して下さい。」

「行きますよ、奥さん、あとで、……僕はどこでもお望みのところへ行きますよ、……奥さん、しかし今は……」

「ちよつと待つて下さい！」と叫んで夫人は跳びあがり、幾つも小抽斗のついてゐる見事な事務卓のところへ駈けつけて、片つぱしから抽斗を引き抜きながら、死に物狂ひに何かを探しはじめた。

『三千留だ！』とミーチャは息の根もとまりさうに考へた。『しかも、今すぐに、……何の書類も證文もなしに、……おお、これこそ紳士的態度だ！　すばらしい婦人だ、ただ、あんなにおしやべりでなければ！』

「さあ！」ホフラーコワ夫人はミーチャのところへ引き返して來て、嬉しさうに叫んだ、「わたしのさがしてゐたのはこれなんですの！」

それは紐のついた小さな銀の聖像で、よく十字架といつしよに肌につけるやうな類ひのものであつた。

「これはキーエフから來たものでしてね、ドミトリイさん。」夫人は恭々しげに言葉をつづけた、「大苦行者聖ワルワノラの遺物なんです。どうかわたしに自ら、あなたの首にかけさせて下さい。これで新しい生活と、新しい大業に向ふあなたの門出をお祝ひすることになりますからね。」

かういつて、夫人は言葉どほりに、彼の首に聖像の紐をかけて、その位置を整へかかつてゐた。ミーチャはすつかり面くらつて、體を前へ屈めながら、夫人の手傳ひを始めた。やつとのことで　ネクタイとシャツの襟間を通して、胸にかけることができた。

「さあ、これでいつでも出發できます。」ホフラーコワ夫人は嚴かに元の席へ腰を下ろしながら言つた。

「奥さん、僕はほんとに嬉しくて仕様がありません、……その御親切にたいして、……何とお禮をいつてよいか分からないくらゐです。しかし……ああ、いま僕にとつてどれくらゐ時間が貴いか、それがお分かりになつたら！　……あなたのお慈悲にすがるよりほかないこの金性、……ああ、奥さん、あなたは僕にたいして、それほど御親切に、感激するほど鷹揚にして下さるのですから（ミーチャは感きはまつて不意に叫んだ）、いつそのこと、何もかも打ち明けてしまひませう、……尤も、奥さんは疾うの昔に御存じのことかも知れませんが、……僕はこの町に住むある人間を愛してゐたのです……で、僕はカーチャを裏切つてしまつたのです……いえ、カテリーナさんといふつもりだつたのです……ああ、僕はあの人にたいして、不人情な、陋劣な態度をとつて來たのです。ところが、この町へ來てから、別の……一人の女性を愛するやうになつたのです、……恐らく、奥さんが輕蔑なさつてゐる女かも知れません、何しろ、奥さんは何もかも御存じなんですから。しかし、僕はどうしても、その女を棄てられないのです。そのために今、三千留といふ金が……」

「何もかも、すつかり棄ててしまひなさい。ドミトリイさん！」ホフラーコワ夫人は斷乎たる口調で遮つた、「棄ててしまひなさい、殊に女を。あなたの目あては、金鑛なのですから、そんなところへ女なんか連れて行く必要はありません。後に、あなたが富と名譽とにつつまれて歸つていらつしやるとき、きつと、上流社會にお氣に召すお伴れが、見つかりますからね。それこそ現代的な、教育のある、偏見のない令嬢が見つかるに相違ありません。その時分までには、現にいま頭をもたげはじめた婦人問題も、きつと盛んになつて、新しい婦人が現はれて來るにちがひありません……」

「奥さん、そんなことは問題ぢやありません、それは別問題です……」ミーチャは哀願するやうに手を揉んでゐた。

「いいえ、それなんですよ、あなたの必要なのはそれなんですよ、ドミトリイさん。御自身にもそれと氣がつかずに、望んでいらつしやるのはそれなんですよ。わたしだつて、決して今日の婦人問題に反對ぢやありませんよ、ドミトリイさん。婦人の發展につれて、最も近き將來に、婦人が政治上の權力さへも獲得する——といふのが、わたしの理想なんですの。わたしにも娘がありますからね、ドミトリイさん。でも、こんなことにかけて、わたしを知つてゐる人は少ししかありません。いつか、この問題について、小説家の＊シチェドリンに手紙を書いたことがありますの。この小説家は婦人の使命について、それはそれは色んなことを教へて下さいました。それで、去年はわたし匿名でたつた二行の手紙を出しましたわ、『わが文豪よ、現代の婦人に代つて、あなたを接吻し、抱擁します、現代の婦人のために、たゆまず續け給はらむことを。』と書いたのです。署名は『母より』といたしました、『現代の母より』としようかしらと、いろいろ考へて迷つたあげく、ただ『母より』とすることにしました。さうした方がずつと精神的に美しいものですからね。ドミトリイさん。それに『現代』といふ言葉が『現代人』といふ雜誌を思ひ出させます。——これは今の檢閲の點から見て、あの人たちに苦々しい記憶なんですからね、……ああ、まあ、本當にあなたはどうしたといふんでせう！」

＊ サルトウイコフ・シチェドリン。……正當な意味での諷刺作家。當代の社會に對する諷刺は、今日に至つて一そうの價値を與へられ、殊にレーニン、スターリン等、この作家を推賞してやまなかつた。序でながら、この作家についての研究は日と共に旺んになりつつある。一八二六—八九。（譯者註）

「奥さん！」たうとうミーチャは跳び上つて、やるせない哀願をしながら、彼女の前で両手を揉んで、
「あなたはあんなに鷹揚に仰つしやつたことを延び延びになさるところを見ると、僕を泣かせるおつもりなんですね……」
「ええ、ちや、お泣きなさい、ドミトリイさん、勝手にお泣きなさいよ！　ほんとに美しいお心ですわね、……これからあなたは長い旅路に上るお方なんですからね！　涙はあなたの胸を慰めて下さいますよ、後日お歸りになつてお喜びになるでせうよ。わさわざ大急ぎでシベリアからお歸りになつて、わたしたちに喜びを分けて下さるやうなことにしたいものですね……」
「しかし、僕にも一こと言はして下さい。」いきなりミーチャは喚き立てた、「最後にもう一度おねがひいたします。いかがでせうね、お約束して下さつた額は今日いただけるものでせうか、お都合が悪ければ、いついただきにあがつたら宜しいんでせうか？」
「何ですね、額つて、ドミトリイさん？」
「お約束の三千です……あなたがあれほど鷹揚に……」
「三千ですつて？　留ですの？　まあ、わたしに三千留なんてあるもんですか！」ホフラーコワ夫人は落ちついた驚ろきの情を含んで言つた。ミーチャは全身がしびれたかのやうであつた……
「一體、どうしたことでせう、たつた今……あなたが仰つしやつたぢやありませんか……僕のポケットに入つてゐるも同然だとまで仰つしやつたぢやありませんか……」
「おお、違ひます、それはあなたの勘違ひですよ、ドミトリイさん。若しさうだとすると、あなたは

わたしの言ふことがお分かりにならなかつたのですよ。わたし千留よりもすつと澤山な、數へきれないほど澤山お約束したのは事實です、そのことなら今すつかり思ひ出しました。ですけれど、それは金鑛のことを根において言つただけの話です。」
「ではお金は？　三千留は？」ミーチャは愚かしげに叫んだ。
「まあ、若しあなたがお金の意味にとつてゐらつしやつたのなら、生憎、少しも持ち合せがありませんわ。いま一文もなしなんですよ、ドミトリイさん、わたし今ちやうどお金のことで支配人と喧嘩してゐるところでしてね、わたし自身でさへ二三日前にミウーソフさんから、五百留ほど拜借したやうな始末です、ええ、ええ、ほんとにお金なんか持ち合せがありません。それにね、ドミトリイさん、たとひあつたにしろ、決してあなたに差し上げない筈ですわ。第一、わたし一度もお金なんか貸したことないんですもの。金を貸すのは、いさかひのもとですからね。またあなたには、特に御用立てしたくないんですの、あなたを助けたいと思へばこそ、ですの。あなたに御用立てしたくないんですの。なぜと申して、あなたにとつて何よりも必要なのはただ一つ金鑛だけです、金鑛だけです、金鑛だけです！……」
「ええ、畜生め！……」だしぬけにミーチャは唸るやうにいつて、拳固で力まかせにテーブルを叩いた。
「あら、まあ！」とホフラーコワ夫人は愕ろいて、悲鳴を上げながら、客間の隅へ飛び退いた。
ミーチャは唾を吐いて、足早に部屋を出て、家の外へ、往來の闇の中へ出て了つた！　彼は氣ちがひ

のやうに自分の胸を叩きながら歩いた。それは二日まへの夕方、最後にアリョーシャと暗い往來で出會つたとき、弟の前で叩いて見せたと同じ箇所であつた。胸のこの箇所を叩くといふことが何を意味してゐるのか、またこんなことをして、いかなる氣持を示さうとしてゐるのか、——これこそ、今のところ世界中に誰ひとり知る者のない秘密であり、あの時アリョーシャにさへも打ち明けなかつた秘密である。しかし、この秘密のなかには、彼にとつては不名譽以上のものが含まれてゐた。ここに破滅と自殺が含まれてゐた。若しも、カテリーナにたいして、三千留の金を手に入れて返濟し、そのことによつて、胸にこびりついて、良心の非常な重荷となつてゐる不名譽を『胸のその箇所から』追ひ出すことができなかつたら、破滅と自殺よりほかないのだと彼は思ひ込んでゐたのである。かうしたことは悉く後になつて讀者にはつきりと分かつて來ることである。ところで、今は、肉體的にあれほど頑丈なこの男が、最後の望みを失つたために、ホフラーコワ夫人の家から數歩のところまで來かかると、まるで赤ん坊のやうに泣きくづれてしまつたのだ。かうして彼は廣場までやつて來た。すると、不意に眞正面から何物かに突き當つたやうな氣がした。と思ふと、小柄な、どこかの老婆の金切り聲がきこえる。彼はその老婆をもう少しで突き倒すところであつた。

「あれえ、今少しで人を殺すところだよ！　何だつて足元を見ないんだい、乞食野郎！」

「どうしたんだえ、あんたは？」ミーチャは夜目にもそれと見てとつて、かう叫んだ。それは例のサムソノフの看病をしてゐる年寄の女中で、前の日ミーチャはこの老婆をあまりにもよく觀察したのである。

「まあ、あなたさまこそどなたですかね？」老婆はまるで別人のやうな聲でいつた、「暗いもんですから、どなたさまとも見分けがつきませんで。」

「あんたはサムソノフさんの家に住んで、看病なすつてる人でせう？」

「さやうでございますよ、あなた、たつた今、プローホルイチのところへちよつと用足しにまゐりましてね、……それにしても、あなた樣はまだ、どなたさまやら存じませんが？」

「ところでね、お婆さん、ちよつと聞きたいことがあるんだけど、アグラフェーナさんは今あんたんところにゐるかね？」もどかしさのあまり我を忘れてミーチャはいつた、「僕は二三時間まへに、あの人を送つて行つたんだが。」

「あなた樣、ゐらつしやいましたよ。おゐでになつたと申しましても、ほんの暫らく居られたきりで、すぐにまたお歸りになりましたよ。」

「え？　歸つたつて？」とミーチャは叫んだ、「歸つたのはいつごろだらう？」

「それは、ゐらつしやるとすぐにお歸りになつたのでございますよ。わたしどもにゐらしたのは、ほんのちよつとでございますよ。旦那樣にちよいとした話をなすつて、お笑はせになると、そのまま、すたすたと歸られましたよ。」

「嘘をいへ！　この婆め！」とミーチャは喚き立てた。

「あら、まあ！」と老婆は叫んだが、もうミーチャは影も形も見えなかつた。彼はまつしぐらにモローゾワの家をさして駈け出した。やつと辿りついたときは、もうグルーシェンカがモークロエに向けて、

出發した後で、まだ十五分とも經つてゐなかつた。フョーニャは料理番をしてゐる祖母のトリョーナと臺所に坐つてゐたが、そこへ『大尉』が駈け込んで來たのであつた。フョーニャはその姿を見るなり、聲を限りに叫んだ。

「喚くのか?」とミーチャはどなりつけた、「あれはどこにゐるんだ?」

しかし、怖ろしさのあまり氣の遠くなつたフョーニャがまだ一言もいはないうちに、彼は彼女の足元に身を投げかけた。

「ねえ、フョーニャ、後生だから敎へておくれ、あの人はどこにゐるの?」

「旦那さま、わたしは何も存じません。ドミトリイ樣。何もわたしは存じません。あなたが、たとひ殺すと仰つしやつても、何も存じませんのでございます。」とフョーニャは一生懸命に誓つた、「さつきあなたはお自分で御一しよにお出かけになつたぢやありませんか?」

「それからまたあいつだけ戻つて來たんだ!」

「いいえ、お歸りになりません、誓つて申します。決してお歸りにはなりません!」

「嘘をいへ!」とミーチャはどなつた、「お前のおどおどしてゐる顏つきを見ただけでも、あれがどこにゐるかちやんと分かつてる!……」

彼はそのまま表へ飛び出した。フョーニャはおどおどしながらも、こんなにやすやすと厄を免かれたのを喜んだが、彼女は、これはきつとミーチャが非常に急いでゐたためだといふことをよく承知してゐた。さもなければ、彼女はこんなにいい氣になつてゐられなかつたかも知れない。ところが、ミーチャ

は飛び出してゆくとき、或る思ひがけない動作によつて、フョーニャとマトリョーナ婆さんの二人を驚ろかしたといふのは、ちやうどテーブルの上に青銅の臼が載つてゐて、その中に長さ六寸ばかりの小さい青銅の杵が入つてゐたのを、ミーチャが駈け出しながら片方の手でドアを開ける瞬間に、一方の手でその杵を引つたくつて、自分の横のポケットに押し込むと、そのまま姿を消したことである。

「ああ、大變だ! あの人は誰かを殺すつもりなんだわ!」とフョーニャは兩手を拍つて叫んだ。

Ⅳ

暗闇の中で

彼はどこへ駈けて行つたのであらう? それは分かり切つたことである。『あれのゐるところは親父のところよりほかにはないのだ。サムソノフの家から、親父のところへ眞つすぐに走つて行つたのだ。今となつては、もう分かり切つてゐる。あいつらのどんな陰謀も、どんな僞りも、はつきり見え透いてゐるのだ……』かうした考へが嵐のやうに彼の心の中を渦巻いてすぎた。彼はマリヤの家の屋敷の中へは駈け込まなかつた。『あそこへ寄る必要なんかあるものか、ちよつともそんな必要はないんだ、……少しでも騒がせるやうなことをしてはならないんだ、……あいつらはすぐに裏切りをして、告げ口をする

に決まつてる、……マリヤはあいつらの仲間に相違ないんだ……スメルヂャコフだつてさうだ、みんな買收されてゐるんだ！』

彼の頭にはまた別な考へが湧き起こつた。彼は横丁を通つて、フョードルの家の外側を大きく廻り道して、ドミトロフスカヤへ出て、小さな橋を渡り、一直線に寂しい裏道へと現はれた。そこはがらんとして、人けのない横町で、路の一方は隣りの家の菜園の編垣で、他の一方はフョードルの庭園を取りかこむ岩乘な高い塀であつた。ここまで來て、彼は一つの場所を選び出した。それは人々の言ひ傳へによつて、かつて息臭ある女リザヱータが攀ぢ上つたことがあるといふ、その場所であることは、彼も知つてゐた。『あんな女でも越せたんだから、』なぜとも知らず、かうした考へが彼の頭に浮かんで來た、『おれにだつて越せないことはない！』事實、彼は一躍して、すぐに塀の上のところにうまく手をかけた、そして元氣よく身を引き上げた、ひらりと足をかけて、塀の上に馬乘りになつた。庭の中には塀と程遠からぬところに湯殿があつたが、その塀の上からは、灯りのともつた母家の窓がよく見えてゐた。

『やつぱりさうなんだ、親父の寢室に灯りがついてゐる。あれはここに來てゐるんだ！』彼は塀の上から庭に飛び下りた。彼は、グリゴリイもスメルヂャコフも病氣してゐるので（スメルヂャコフの病氣も或ひは本當なのかも知れない）、誰ひとり自分に氣のつく者がゐないことをよく知つてはゐたものの、彼は本能的に身をひそめて、一ところにじつと立つたまま、耳を澄ましはじめた。しかし、死のやうな沈默があたりに立ちこめて、まるでわざとのやうに、そよとの風もなく、闃として聲なき夜であつた。

『ただ聞こゆ、靜寂のささやき、』なぜかしら、こんな詩の一節が、彼の胸にちらついた、『誰もおれが塀を乘り越えたことに氣がつかなければいいが。恐らく、誰も氣がつかなかつたとは思ふが、……』やや暫らくの間じつと立ちつくしてから、彼は立木や灌木を避けながら、そつと庭草を踏んで歩き出した。彼は自分で自分の足音に一歩一歩耳をすましながら、盜み足して永いこと歩いて行つた。五分間もかかつて灯りのついてゐる窓のところまで辿りついた。窓のすぐ下に、接骨木や木苺の高く茂つた藪が幾つかあつたのを彼はよく覺えてゐた。母家から庭へ出る左側のドアは閉まつてゐたが、彼は傍を通りすぎるとき、事さらに氣をつけてそれに注目した。やがて、つひに彼は藪のところまで辿り着くと、その蔭に身をかくした。彼は息までこらしてゐた。『ちよつと待たなくてはならない』と彼は考へた。『若し、おれの足音を聞きつけて、耳をすましてゐるとしたら、あれは空耳だつたとは思ひ直しをさせたいものだ、……だから、せめて咳拂ひや嚔をしないやうにすることだ……』

彼は二分間ほど待つて見たが、胸の動悸がはげしくて、時をりは息がつまりさうであつた。『駄目だ、この動悸はとても止みさうもない。』と彼は考へた。『もうこれ以上待つてゐられない。』彼は藪のかげに身をひそめてゐた。藪の前面は窓からさす灯りに照らし出されてゐる。

『木苺よ、とても眞つ赤な苺の實！』何のためとも知らず、彼はこんなことを呟やいた。靜かに音もなく立てずに、彼は一歩々々窓ぎはに近づいて、爪さき立ちをした。フョードルの寢室の樣子は、隈なく彼の眼の前に現はれた、まるで掌をさすやうに。それは小さな部屋で、赤い衝立によつて横に區切られてゐたが、フョードルはよく、その衝立を『支那式』だと言つてゐた。この『支那式』といふ言葉が不意

にミーチャの心にひらめいた、『あの衝立のかげにグルーシェンカがゐるんだ。』彼は先づフョードルの姿を仔細に眺め始めた。彼はミーチャが一度も見たことのない新しい縞絹の部屋着を着て、總のついた、やはり絹の紐を腰に巻いてゐた。部屋着の襟の下からは、金釦のついた和蘭製の細地のきれいな、しやれたワイシャツが覗いてゐた。フョードルは頭の上に、嘗てアリョーシャが見たと同じ赤い繃帯を巻きつけてゐた。『おしやれしてやがる。』とミーチャは考へた。

フョードルは何やら考へ込んでゐるらしい様子で、窓際に佇つてゐたが、不意に頭を振り上げて、しばらく耳を澄ましてゐた。しかし何の物音もないので、テーブルに近づいて、酒壜からコップに半分ほどコニャクを注いで、それを飲み干した。それから彼は深い溜息をして、また暫らく、じつと佇つてゐたが、やがて、そそくさと窓と窓との間の壁にかかつてゐる鏡のところへ歩み寄り、右手で額のところの赤い繃帯をちよつと持ち上げて、未だに癒りきらない打ち身や瘤をしきりに眺めた。

『一人きりだな。』とミーチャは考へた、『どうも一人きりらしい。』

フョードルは鏡から離れると、いきなり窓の方を振り向いて、じつと外の方を覗いた。ミーチャはあわてて物かげへ飛びのいた。

『ことによつたら、あれは衝立のかげにゐるのかも知れない。多分もう眠つてゐるだらう。』彼はかう考へて胸の痛みを感じた。フョードルは窓ぎはから離れた。『親父が窓から覗いてゐるのは、あれを探さうとしてゐるからなんだ。して見ると、あれはゐないんだな。でなければ、親父が闇の中を見つめるいはれはないではないか？　……堪らなくなつて、いらいらしてゐるんだ……』ミーチャは急に窓のと

ころへ駈けつけて、又もや中を覗き始めた。老人はテーブルに向かつて腰をかけてゐたが、何だか佗びしさうにしてゐた。つひに彼はテーブルに肘をついて、右の掌で頬を支へた。ミーチャはわき目もふらずに見まもつてゐた。『一人ぼつちなんだ、一人ぼつちなんだ！』彼はまた繰り返した、『若し、あれがゐるとすれば、親父の顔つきはあんな風ぢやない筈だ！』

奇妙なことではあるが、彼女がここにゐなかつたといふことが、彼の心に一種異様な、意味のない憤怒の情を湧き立たせた。『いや、これはあれがここにゐないからぢやない。』ミーチャはすぐにかう考へて、自分自身に說明した。『つまり、あれが來てるか來てないか、どうしても確かにつきとめることが出來ないからなんだ。』ミーチャはその後になつて思ひ返して見ると、その瞬間彼の感情は非常に明晰になつてゐて、あらゆることを微細な點まで考量し、一點も見落さなかつたほどであつた。しかし、心の痛みが、——未知と不明の心の痛みが刻々と彼の胸に量りも知れぬほどの速さをもつて募るのであつた。『一體、あれは本當にここにゐるのか、ゐないのか？』といふ疑問が、苦々しく彼の胸に煮えくり返るのであつた。何を思つてか、彼は急に意を決して、手をさし伸べて、こつこつと窓框を叩いた。彼はノックを最初の二つを靜かに、しまひの三たびを少し早目に、こつ、こつ、こつと叩いたが、それはつまり老人がスメルヂャコフと打ち合はせてあつた合圖の叩き方で、グルーシェンカが來たといふ意味であつた。老人はぎくりとして、首を振り上げ、さつと立ちあがつて窓ぎはに駈けつけた。ミーチャは物蔭に飛び退いた。フョードルは窓をあけて、すつかり頭を外へ突き出した。

「グルーシェンカ、お前かえ？　お前なのかえ？」と彼は妙に慄へる聲で、半ば囁やくやうにいつた、

「どこにゐるんだえ、おまへ、おい、どこにゐるんだ！」

彼はひどく昂奮して息を切らしてゐた。

『親父一人きりだな！』とミーチャは考へた。

「どこにゐるんだえ、一體？」と老人は再び叫んで、一そう首を伸ばし、肩まで乘り出しながら、左右をきよろきよろと見廻すのであつた、「ここへおいで、お前にいい贈り物を用意してゐたんだ、さあおいで、見せてあげよう！……」

『あれは例の三千留の包みのことをいつてるんだな、』とミーチャは考へた。

「一體、どこにゐるんだえ？　ドアのところかい？　すぐ開けてやるよ……」

かういつて老人は窓の外へ乘り出さんばかりにして、右の方を覗いてゐたが、そこには庭に通ずるドアがあるのであつた。次の瞬間には、グルーシェンカの返事を待たないで、きつと駈け出して行つて、ドアを開けるに違ひない。ミーチャは身じろぎもせずに、じつと傍で彼を眺めてゐた。彼が何よりも嫌つてゐる老人の横顏、だらりとさがつた喉ぼとけ、鉤鼻、甘たるい期待に微笑む唇、さうしたもののすべてが、左の方から斜めに射す室內のランプの光線によつて、眞赤に照らし出されたのである。怖ろしい、兇暴な憎惡の念が、不意にミーチャの胸にこみ上げて來た。『あいつだ、あいつがおれの競爭者だ、あいつがおれを苦しめた當人だ、おれの生活を痛めつけた奴なんだ！』これは彼が、四日間に四阿で、『お父さんを殺すなんてことがどうして言へるのでせう？』といふアリョーシャの質問にたいして、一種の豫感でも感じたやうに答へた時、弟に斷言した、

突發的な、兇猛な、復讐心に充ちた憎惡の念の閃きであつた。そのとき彼は『いや、おれにも分からないんだ、分からないんだよ。』と彼は答へた、『或ひは殺さないかも知れないし、若しかしたら、殺すかも知れん。おれはただ、いざといふ瞬間になると、親父の顏が急に憎らしくなりはしないかと心配でならないんだ。おれはあの喉ぼとけや、鼻や、眼や、あの圖々しいせせら笑ひが憎らしくつて、たまらないんだ。おれは個人的な嫌惡を感ずる。おれの怖れるのはそれなんだよ、おれには腹の蟲を抑へつけることが出來ないんだ……』

かうした個人的な嫌惡の情がたまらないほど込み上げて來た。ミーチャは我を忘れて、いきなりポケットから靑銅の杵を取り出した……

『神樣があのときは自分をお護り下すつたのだ、』とミーチャは後になつて自分でかういつた。ちやうどその時、グリゴリイは病床で眼を醒ました。その日の夕方、彼はスメルヂャコフがイワンに話した例の療法を實行した。火酒（ウオトカ）に或る極めて强烈な秘藥を混ぜて、妻の力をかりて全身に塗りつけてから、妻が『或る祈り』を唱へてゐる間に、その殘りを飮み乾して、それから眠りに就いたのである。マルファもやはりその藥を飮んだが、生れつき下戶だつたので、そのまま良人の傍に、まるで死んだやうになつて寢込んでしまつた。

ところが、グリゴリイは夜中にふと眼をさました。そしてほんのちよつと思案した後、急に腰のあた

りに怖ろしい痛みを感じはしたけれども、寢床のうへに起き上がつた。それからまた何やら考へてゐたかと思ふと、立ちあがつて、そそくさと着更へをした。恐らくは、彼の良心が『こんな危い時刻に』誰ひとり家の番をする者もないのに、安閑として眠つてゐることを許さなかつたのかも知れない。癪瘤に惱まされたスメルヂャコフは、身動きもせずに、隣室に横たはつてゐた。マルファはいささかも身を動かさなかつた。『婆さん弱つとるわい。』グリゴリイはその方を見やりながらかう考へて、喉を鳴らしながら、入口の階段の方へ出て行つた。いふまでもなく、彼は階段のところからちよつと、あたりの樣子を見ようとした迄のことであつた。といふのは、腰の痛みと右足の痛みに堪へきれず、とても歩くことができなかつたからである。ところが、ちやうどそのとき、彼は庭へ通ずる木戸に、夕方から鍵をかけずにゐたことに氣がついだ。彼は極めて几帳面な、嚴密な男で、一定不變の規則と永年の習慣に凝り固まつてゐたので、痛みのために跛をひいたり、よろめいたりしながらも、階段を下りて庭の方へと出て行つた。果して、木戸は全く開け放しになつてゐた。機械的に彼は庭の中へ足を踏み入れたが、おそらく、何か眼に映じたからか、それともまた何か物音を聽きつけたからかも知れなかつた。ふと左の方へ眼をやると、そこには主人の居間の窓が開いてゐるのが見えた。もう窓のところに人の氣配もなく、誰ももう窓から覗いてはゐなかつた。

『夏でもないのに、どうして今ごろ開いてるんだらう?』とグリゴリイは考へた。すると、ちやうどその瞬間、眞向ひの庭の中に、何やら異樣なものが、不意にちらつき始めた。彼のところから四十歩ばかり前の方の暗闇の中を、一人の人間が駈け抜けてゐるらしかつた。何か影のやうなものが非常な速さ

で動いてゐる。

「これは大變だ!」といつて、グリゴリイは、我をも忘れ、腰の痛みも覺えずに、走つてゐる相手を遮るために、駈け出した。

彼は近道をとつた。見たところ、庭の事情には彼の方が明るいらしかつた。曲者は湯殿を目さして走つてゐたが、やがて湯殿の向うに出て、塀に飛びついた……。グリゴリイはその姿を見失はないやうに追跡しながら、我をも忘れて走つて行つた。彼が塀のところまで來ると、ちやうど相手の男は塀を乘り越さうとしてゐるところであつた。グリゴリイは夢中になつて飛びかかり、兩手で曲者の足をしつかりと抑へつけた。

てつきり、蟲が知らせた通りであつた。彼は對手の見分けがついた。それはあの『ならずものの親殺し』であつた。

「親殺し!」と老人は近所隣り中へ鳴りひびくやうな聲で喚き立てた。

しかし、彼はそれ以上、叫び聲を立てる餘裕もなく、まるで雷にでも打たれたかのやうに、其の場にどつと倒れてしまつた。ミーチャはまた庭へ飛び下りて、倒れた男の上へ身を屈めた。ミーチャの手には青銅の杵が握られてゐたが、彼はそれを機械的に草の中へ投げ出した。杵はグリゴリイから二歩ばかり向うへ落ちた。そこは草の中ではなくて、最も眼につき易い小徑の上であつた。彼は眼の前に倒れてゐる男を幾秒かのあひだ、仔細に點檢した。老人の頭は血みどろになつてゐた。ミーチャは手を伸ばして、それにさはつて見た。後になつて、はつきりと思ひ出したことであるが、そのとき彼は、老人の頭

蓋骨を割つてしまつたのか、それともただちよつと、杵で前頭部を打ちのめして『失神』させただけなのか、そのいづれかを『充分に確かめ』たくてたまらなかつた。ところが、血がとめどなく流れ出て、瞬くうちに、ミーチャの指先を眞つ赤に染めてしまつたのである。忘れもしない、彼はふとホフラーコワ夫人を訪問した時に用意した新しい白のハンカチをポケットから取り出して、それを老人の頭へ押しあてながら、その顔や顳顬の血を拭き取らうと、無意味な努力をしたのであつた。しかも、そのハンカチも見る見るうちに血に染まつてしまつたのである。

『ああ、何だつて、おれはこんなことをしてゐるんだ?』ミーチャは急に我にかへつた、『若しも、この男の頭蓋骨を割つてしまつたのなら、今更それを確かめたつて仕方がないぢやないか……それに、今となつては、どつちにしたつて同じことぢやないのか!』彼はやるせなげに、ふと附け足した、『若し殺してしまつたのなら、殺してしまつたでいいんだ、……爺さん、生憎こんなところへ出つくはして。まあ、じつとそのまま臥てゐるがいい!』彼は聲高らかに叫んで、いきなり躍に飛びかかり、ひらりとばかり横町に飛び下りると、そのまま一目散に駈け出した。

彼は血みどろのハンカチを丸めて、左の手に握りしめてゐたが、走りながらそれをフロックの後ろのポケットにねぢ込んだ。彼はまつしぐらに走つた。町の眞つ暗な往來で、たまさか彼に出逢つた幾人かの行人は、その晩、すさまじい勢ひで走つて行く一人の男があつたことを、後になつて思ひ出した。彼は再び、モローゾワの家をさして飛んで行つた。

先きほど彼が立ち去つたすぐ後で、フョーニャは門番頭のナザールのところへ駈けつけて、『今日も

明日も二度とあの大尉さんを通さないで下さい。』と、『拜むやうに』賴んだ。ナザールは様子を聽いて、承知はしたが、あいにく、急に二階の奥さんに呼ばれたので、二階へ行つてしまつた。その途中で、ついこのごろ田舍から出て來たばかりの二十歳になる自分の甥に出會つたので、それに門番の代理を賴んだが、大尉氏のことはすつかり言ひ忘れてしまつた。門のところまで駈けつけたミーチャは、こつこつと戸を叩いた。青年はこれまで幾度も心附けを貰つたことがあるので、すぐに彼の顔を見分けた。そこで青年は直ぐに門を開けて彼を通し、やがて、快活な微笑みを洩らしながら、『アグラフェーナ樣は唯今お留守ですよ。』と、前もつて注意するかのやうに、あわてて報告した。

「一體、どこへ行つたんだい、プローホル?」とミーチャは、いきなり立ちどまつた。

「さつき二時間ほど前に、チモフェイの馬車でモークロエへお出かけになりました。」

「何しに?」とミーチャは叫んだ。

「それは分かりませんでございますよ、何でも將校とやらんところで、わざわざ誰かがあの方をお迎ひに馬車をよこしなすつたんでございますよ……」

ミーチャはこの青年を振りすてて、狂氣のやうになつて、フョーニャのところへと駈け出した。

V

出來心

フョーニャは祖母と二人で臺所にゐたが、二人とも、もう寢ようとしてゐるところであつた。ナザール・イワーノヰッチを賴りにして、二人は今度もまた內から戶締錠をかけなかつた。ミーチャは駈け込むや否や、フョーニャに飛びついて、しつかりと、咽喉にしがみついた。

「さあ、すぐ白狀しろ！　あれはどこにゐるんだ、いまモークロエで誰と一しよにゐるんだ？」彼は夢中になつて叫んだ。

二人の女はきやあと喚いた。

「はい、申しますとも、はい、ドミトリイ樣、今すぐ何もかも申し上げますよ。決して隱しだてはいたしません。」死ぬほど驚ろかされたフョーニャは早口にかういつた、「奥さまはモークロエの將校さんのところへおいでになりました。」

「將校さんて誰だ？」ミーチャはどなつた。

「元の將校さんでございますよ、あの、奥さまの昔のお方でございますよ。五年前に奥さんを棄てて

行つてしまひなすつたあのお方。」フョーニャは例の早口でぽきぽき言つた。

ミーチャは女の咽喉をしめつけてゐた兩手を離した。彼はまるで死人のやうに眞つ蒼になつて、物をもいはずに、彼女の前に立つてゐたが、その眼つきには、彼がフョーニャの片言を聞くや否や、何もかも、一切合財、底の底まで悟つて、凡ゆることを洞察したことが、ありありと窺はれた。哀れなフョーニャは、この瞬間に、勿論、彼が果して、一切の事情を悟つたかどうか、そんなことを觀察してゐる餘裕がなかつた。彼女はミーチャが駈け込んで來た時のやうに、相も變らず、櫃の上に腰を下ろしたまま、全身をぶるぶる慄はせながら、自分を守らうとするかのやうに兩手を前に伸ばしてゐた。彼女は今も相變らずの姿勢で、化石したかのやうに見えた。恐怖のあまり、大きく見ひらいたその眼は、じつと彼の顔を見つめてゐた。おまけに彼の兩手は血に染まつてゐるのだ。ここへ駈けつける途中で、彼は汗を拭くために、その手を額に觸れたと見えて、額にも、右の頰にも、血の痕が眞赤についてゐた。フョーニャは、今にもヒステリーを起こしさうであつた。年寄りの料理女は飛び上がつたまま、まるで氣ちがひのやうに、殆んど意識を失つて、彼を見つめてゐた。ミーチャは暫らくの間、ぼんやり立つてゐたが、不意に機械的にフョーニャの隣りの椅子に腰を下ろした。

彼は坐つたまま、別に何を考へてゐるといふ譯でもなく、ただ恐怖におそはれてゐるらしく、全く茫然自失してゐるかのやうであつた。しかし、何もかも火を見るよりも明らかであつた。あの將校——さうだ自分はあの男のことを知つてゐる。すべてのことは何もかもようく知りつくしてゐる。當のグルーシェンカの口から聞いたのだ。一と月まへに、その男から手紙が來たといふことも知つてゐる。して見

れば、一と月、まる一と月のあひだ、つまりこの新しい男が到着するまで、この問題は自分に全く秘密に運ばれてゐたのだ。それなのに、彼はこの男のことは、夢にも思つてゐなかつたのだ！　それにしても、どうして彼はこの男のことを考へずにゐられたのか？　どうして　どうして彼のことを、思ひ出さずにゐられたのか？　何だつて、あの時あの将校のことを忘れたのか、聞くなりすぐに忘れるといふ法があるものか？　これこそ、まるで何かの妖怪のやうに彼の面接してゐる問題であつた。彼は事實、恐怖のあまり、寒けを覺えながら、おづおづとこの妖怪を觀るのであつた。

ところが、急に、彼はおとなしい、人なつこい子供のやうに、靜かに、物やさしくフョーニャに向かつて話しかけた。たつた今、あれほどまでにこの女を驚ろかしたり、苦しめたりしたことは、全く忘れはててしまつたかのやうであつた。不意に彼は、今のやうな立場にある人としては不思議なくらゐ、極めて正確に、フョーニャにいろんな質問を始めた。またフョーニャも彼の血だらけな手を見て、狂はんばかりの樣子であつたが、同樣に不思議なほど氣さくな調子で、一つ一つの質問に對して、はきはき答へるばかりか、かへつて一切の『眞相』を、餘すところなく提供しようとあせつてゐるかのやうであつた。次第に彼女はむしろ一種の快感をさへ覺えながら、事こまかに說明を始めたが、それは決して彼を苦しめようと思つてではなく、むしろ全力をつくして、裏心から彼のために盡くさうとあせつてゐるらしかつた。彼女はその日の出來事を細大もらさず、何もかも說明して聞かせた。ラキーチンとアリョーシャの訪ねて來たことから、フョーニャ自身が見張り番をして立つてゐたこと、女主人の出立した時の模樣、女主人が窓からアリョーシャを呼びとめて、ミーチャによろしく言つてくれ、そして『わたしが

あの人をたつた一時間だけ愛してゐたことを、どうぞ永久に忘れないやうにといつて頂戴』と大きな聲でいつたことまで、くはしく物語るのであつた。ミーチャによろしくといふ言葉を聞くと、ミーチャは急に薄ら笑ひをうかべて、蒼ざめた頰をさつと赧らめた。その瞬間、フョーニャは自分の好奇心に對する後々の報いなどは、いささかも怖れずにかういつた。

「まあ、ドミトリイ樣、あなたは何といふ手をしてゐらつしやるんでせう？　すつかり血だらけぢやございませんか？」

「ああ、」ミーチャは機械的に答へて、ぼんやりと自分の手を見廻してゐたが、すぐにまたその手のことも、フョーニャの質問のことも忘れてしまつた。

彼はまた沈默に浸つた。ここへ駈け込んで來た時から、もう二十分ほど經つた。さつきの恐怖は消え失せたが、どうやら、一種の新しい、確固たる決心が彼を全く擒にしてしまつた觀があつた。彼はいきなり席を立つて、物思はしげに微笑んだ。

「旦那樣、どうなさいました？」フョーニャはまた彼の手を指さしながら言つたが、——何となく今は哀しみの點で、かなりに彼に接近してゐる人間でもあるかのやうに、憐れみ深い調子であつた。ミーチャは又もや自分の手を眺めた。

「これは血だよ、フョーニャ、」妙な表情をして、彼は相手を見つめながら口を出した。「これは人間の血だ。ところで、ああ！　何のために流した血だらう！　それにしても、……フョーニャ……ここに一つの塀がある（彼は謎でもかけるやうに彼女を眺めた）、それは高い塀だ、見るからに怖ろしい、し

かし、……明日、夜が明けて、『太陽が昇つたら』、ミーチャはその塀を乗り越えるのだ、……どんな塀だか、お前には分からないだらうフョーニャ。いや、何でもないんだよ、……明日になつて、人の話を聞いたら、何もかも分かるだらう、……今日はこれでさよならだ！　おれは決してあれの邪魔なんかしないよ、おれは道をゆづる。道をゆづるぐらゐのことは、おれだつて心得てゐるのだ。よきひとよ、恙なく暮らせ！　……たつた一時間、おれを愛してくれたさうだが、そんなら、どうかミーチェンカ・カラマゾフを永久に忘れないでゐてくれ、……なあ、おい、あれはおれのことをミーチェンカといつたつけな、お前も覚えてるだらうな？」

こんなことをいひながら、彼はいきなり臺所から出て行つてしまつた。フョーニャはさつき、彼が駈け込んで來て、自分に飛びかかつた時よりも、今こんな風に急に出て行つたことに却つて一そう驚ろかされた。

それからちやうど十分ののち、ミーチャはさつきピストルを質入れした若い官吏、ピョートル・イリッチ・ペルホーチンの家へ入つて行つた。もう八時半ごろになつてゐた。ペルホーチンは茶を飲み終つて、居酒屋の『都』へ玉突きに行くつもりで、たつた今フロックを着直したばかりであつた。ミーチャはその出會がしらを抑へたのである。相手は彼の姿を、血みどろの彼の顔を見るなり、思はず驚ろきの叫び聲を立てた。

「おやつ！　一體、どうしたんです？」

「あのね、」とミーチャは早口にいつた、「僕はさつきのピストルをもらひに來たんです。金も持つて

來ました。どうもありがたう、僕は急ぐんですからね、ペルホーチンさん。どうかお早く願ひます。」

ペルホーチンはいよいよ驚ろきを深くするばかりであつた。彼は早くもミーチャの手に一束の紙幣が握られてゐるのを見てとつた。が、何よりも不思議なのは、彼がこの金を握つたまま入つて來たことであつた。こんな風に金を握つたまま入つて來る人はどこにもない。しかも、その紙幣をみんな右手で一握りにして、これ見よがしに前の方へ差し出してゐるのだ。玄關でミーチャに出つくはしたペルホーチンの召使が、あとになつてこんなことをいつたことであるが、彼は金を握つてゐる右手を差し出して、そのまま廊下へ入つて來たといふが、これで見ると、往來でもそんな風に、わしづかみにして持つて歩いてゐたものらしい。しかも、それはいづれも虹色の百留紙幣で、それを彼は血みどろの指で持つて歩いてゐたのである。

ずつと後になつて當路の人たちが、『金はいくらあつたか？』と訊いたとき、ペルホーチンは、どうもそのときは、見ただけでは、ちよつと勘定できなかつたが、二千留か、ひよつとすると、三千留、尤も、大きな『かなりな嵩』のある束であつたと答へた。ミーチャ自身が同樣にあとで申し立てたところによると、『あの時はすつかり正氣ではなかつたらしいが、決して醉つぱらつてはゐなかつた。ただ何となく夢中で、ひどくぼんやりしてゐたらしい。が、それと同時に、一つことを考へてゐるやうでもあつた。しかも何かのことを考へ考へして、考へをまとめようとしてゐながら、どうも解決することができない、といふ風であつた。氣ばかりせいてゐて、返事の仕方も實に妙で、言葉鋭く、少しも悲しい目に遭つたといふやうなところはなく、かへつて愉快さうに見えたほどである。』

「でも、一體、どうしたんです？　今日は一體、どうしたんです？」ペルホーチンは荒々しく客を見廻しながら又もや叫んだ、「一體、どうしてそんなに血みどろになつたんです。轉ぶかどうかしたんですか、え、まあ御覽なさい！」

彼は相手の肘を引つぱつて行つて鏡の前に立たせた。血まみれになつた自分の顏を見ると、ミーチャはぞつとして、腹立たしげに苦い顏をした。

「ええ、畜生！　まだその上にこんな……」と彼は恨めしげに呟やいて、手早く紙幣を右手から左手へ持ちかへて、發作的にポケットからハンカチを取り出した。が、そのハンカチも同じく血潮にまみれてゐた（それはグリゴリイの顏や頭を拭いたハンカチであつた）、それには殆んど白いところがなく、生乾きどころではなく、皺くちやのままに塊まつてしまつて、擴げようとしてもどうしても擴がらなかつた。ミーチャは忌々しげにそれを床の上に叩きつけた。

「ええ、こん畜生！　何かきれはありませんか、……ちよつと拭きたいんだけれど……」

「ぢや、血がついてるだけですね、怪我したんぢやないんですね？　そんなら、いつそ洗ひ落した方がいいでせう。」とペルホーチンは答へた、「さあ、ここに洗面器がありますから、これへ水を汲んであげませう。」

「洗面器？　それはいい、……ところで、これはどこへおいたらいいでせうね？」

何だか妙に當惑しながら、彼は百留紙幣の束を示して、物問ひたげにペルホーチンを眺めた。まるで自分の金をおく場所を決めるのが、ペルホーチンの責任でででもあるかのやうであつた。

「ポケットへしまひなさい。それとも、このテーブルへ載せておいたら。決してなくなりませんから。」

「ポケットへ？　さう、ポケットがいい。これで結構、……いや、君、こんなことはつまらないことだよ！」彼は急に夢心地から醒めたやうに、かう叫んだ、「ねえ、君、第一にあのピストルのことを片づけようぢやありませんか。あれを返して下さい。さあ、これが君の金です、……何しろ、非常に、非常に入り用になつて來たので……それに時間がないですよ、ほんの一寸の時間も……」

かういつて、彼は束の中から一ばんよい百留紙幣をとつて、若い官吏に差し出した。

「しかし、僕のところには釣錢がないかも知れませんよ。」と相手はいつた、「もつと細かいのがありませんか？」

「ありません。」とミーチャは再び札束を見ながらいつたが、何だか自分の言葉が信じられないかのやうに、指で上の方の二三枚をめくつて見た。「ないです、みんな大きいのばかりです。」彼はかう附け加へて、又しても物問ひたげにペルホーチンの顏を覗き込んだ。

「一體どこでそんな成金になりました？」とペルホーチンは訊ねた、「いや、待つて下さい、プロトニコフの店へ子供をやつて見ますから。あそこの家はおそくまで店を開けてゐますから、――ひよつとしたら取り替へてくれるかも知れません。おい、ミーシャ？」と彼は玄關の部屋の方を向いて呼んだ。

「プロトニコフの店へ、――それは素敵だ！」と彼は何かの考へに思ひ當つたかのやうに叫んだ、「ミーシャ！」と入つて來る少年に呼びかけて、「おまへ一つ、プロトニコフの店へ走つて行つて、ドミトリイ・カラマゾフがよろしくつて、それからすぐ自分で出かけるからと、さういつておくれ、……それ

にいいかえ、もう一つ、――僕が行くまでにシャンパンを、先づ三打ばかり用意して、いつかモークロエへ行つたときのやうに、ちやんと馬車に積み込んでおくやうにつて、……僕はあのとき、あすこの店で四打も買つてやつたんですよ（と彼は急にペルホーチンの方へ向いていつた。）――あすこぢやもう、よく知つてる筈だから、心配するには及ばん、ミーシャ。」かういつて彼は再びボーイの方をかへりみた。「それからね、いいかえ、チーズに、ストラスブルグの饅頭（ピローグ）に、燻製の石斑魚（シーグ）に、ハムに、イクラに、……いや、そのほかに、あの店にあるものはみんな註文してくれ。先づ百留か、まあ、この前の時と同じやうに百二十留でもいい……さうだ、それからね、手土産も忘れずにね、金平糖と、梨と、西瓜を二つか三つ、四つでもいい、――いや、西瓜は一つでたくさんだよ、それからチョコレートに氷砂糖に、ドロップに、手套飴（チャグーシャ）、さうだ、以前モークロエへ持つて行つたものがみんなあればいいんだ。シャンパンも三百留ぐらゐのところだ、……うん、さうだ、今度もあの時の通りにすればいいんだ。ところで、いいかえ、君、ミーシャ、たしかにミーシャといつたつけね、……この子はミーシャといふんでしたね？」彼はまたペルホーチンの方を向いた。

「ちよつとお待ち下さい。」ペルホーチンは不安さうに耳を傾けながら、彼の様子を眺めてゐたが、口をはさんだ、「あなた御自身でいらして御註文なさる方がよくはありませんか、でないとこいつが飛んでもないことを言つてしまひますよ。」

「なるほど、どうも飛んでもないことを言ひさうですね。おい、ミーシャ、おれはそのお駄賃にお前を接吻してやらうと思つたんだが、……若し註文を間違へなかつたら、お前に十留やらう。さあ、大急

ぎで一走り行つて来てくれ、……シャンパンが一ばん大事なんだぞ、シャンパンを出すやうにな。それからコニャクと、赤葡萄酒と白葡萄酒、みんなあのときと同じだ、……あの時のものは店でももう分かつてる筈だ。」

「まあ、僕のいふことをおききなさい。」ペルホーチンはいらいらしながら叫んだ、「ね、かうしたらいかがです？　こいつはただ金の兩替に走らすだけにして、まだ店を閉めないでおけといはせることにして、その後であなたが行つて御自分で仰つしやつたらいいでせう。……では、これに紙幣（さつ）をお渡しなさい。さあ、進めっ、ミーシャ！　お一、二！」

ペルホーチンはわざとミーシャを急いで追ひ出したらしい。といふのは、少年は客の血に染まつた顔や、慄へる指に紙幣を握つてゐる血みどろの手を、驚ろきと怖れのために口をあけて、立ちすくんだまま、眼を皿のやうにして眺めてゐたからである。しかも、恐らくはミーチャの言ひつけなど、ろくに呑み込んでもゐなかつたであらう。

「さあ、こつちへ來てお洗ひなさい、」ペルホーチンは嚴然といつた、「金はテーブルの上か、御自分のポケットにしまつてお置きなさい、……ええ、そこかし、フロックはお脫ぎになつた方が宜しいでせう、それでいいでせう、さあ、こつちへいらつしやい。しま彼はフロックを脫ぐのを手傳ひにかかつたが、突然また叫んだ。

「御覽なさい、フロックまで血みどろになつてるぢやありませんか！」

「これは、……これは、フロックぢやありませんよ。ただちつと袖のところが、……ああ、これは、ハ

ンカチの入つてたところです。ポケットから惨み出したんです。きつとフォーニヤのところで、ハンカチを下にして坐つてたので。それで惨み出したんでせう。」何だか不思議なくらゐに馴れ馴れしくミーチャはすぐに説明した。

ペルホーチンは苦い顔をしながら、聞いてゐた。

「とんでもないことをしましたね。きつと誰かと喧嘩したんでせう。」と彼は呟やいた。

二人は洗ひにかかつた。ペルホーチンは水差しを手にして、水をかけてやつた。恐ろしくせかせかしながら、ミーチャはろくに石鹸も使はなかつた。(兩手がぶるぶる慄へてゐたのである。後になつてペルホーチンはそのことを思ひ出した。)ペルホーチンはすぐに、もつと石鹸をたくさんつけて、もつと強くこするやうにと言ひつけた。時がたつにつれて、彼は一そうミーチャの上に權力を揮つて行くかのやうに見えた。序でに言つておくが、この青年はなかなか肚のすわつた男であつた。

「御覽なさい、まだ爪が綺麗になつてゐないぢやありませんか。さあ、今度は顏をこすりなさい。それ、そこですよ。顏顎の上の、耳のわきです、……一體、あなたはそのシャツを着て出かけるんですか？　どこへ行くんです？」と、この通り、右の袖口のところが血みどろぢやありませんか。」

「ええ、血みどろです。」と、シャツの袖口を見ながら、ミーチャはいつた。

「ぢや、シャツを着換へなさい。」

「そんな暇はありません。僕はね、僕は、ほら……」彼は顏と手を手拭で拭ひ、フロックを引つかけながら、依然として馴れ馴れしげに續けた、「袖を折り込んでおきますよ。さうしたら、フロックの下になつて見えやしないでせう、……ほら！」

「ぢや、今度は、あなたがどこで、そんなことをしたのか聞かして下さい。誰かと喧嘩でもしたんでせう、え？　いつかのやうに、また居酒屋でですか？　またあのときの二等大尉が相手ぢやありませんか、あの時は、あの男をなぐつたり、引きずつたりしましたね？」何となく責めるやうな口振りで、ペルホーチンはこの間のことを言ひ出した、「一體、今度は誰をなぐりつけたんです、……それとも殺したんでせうね？」

「馬鹿な！」とミーチャはいつた。

「なぜ『馬鹿な』です？」

「御心配はいりません。」とミーチャはいつて、不意に笑ひ出した、「これはね、ほんのだつた今、市場のところで、婆さんを押しつぶしたんですよ。」

「押し潰したつて？　婆さんを？」

「いや、爺さんです！」とミーチャは相手の顏をまともに見つめながら笑つてゐたが、まるで相手が聾ででもあるかのやうに大聲を立てた。

「ええ、馬鹿らしい！　やれ爺さんだとか婆さんだとか、……誰かを殺したんでせう、え？」

「しかし、もう仲直りしましたよ。初めはとつ組んで、——それから仲直りしましたよ。ある所でね。僕たちは友だちになつて別れました。一人の馬鹿者ですがね、……その男が僕を許してくれましたよ。……今ごろはきつと許してくれてるに違ひありません。……起ちあがつたら、あんなに許してはくれな

かつたでせうよ。」ミーチャは不意に眼くばせした、「でも、どうだつていいんですよ。ね、お分かりでせう、ペルホーチンさん。どうだつていいですよ。心配しないで下さい！　今更そんなことを話すのが厭やなんです！」きつぱりと断ち切るやうにミーチャは言つた。

「僕はね、何でそんなに誰彼の區別なしに喧嘩を買ひたがるのかと思つたからです、……例の二等大尉の時だつて、何だかばかげてゐますものね……しかし喧嘩をしておきながら、その足で遊びに出かけようなんて――全く君のやりさうなことですよ！　シャンパンを三ダースも、――なぜそんなに要るんです？」

「萬歳！　さあ、ピストルを下さい。全くこれ以上時間がないんですから。君とおしやべりしてゐたいんですけれど、何しろ、ねえ、君、時間がないもんだから。尤もその必要はないがね。あまりおそくなつたので、これ以上話してゐる譯には行かないんだ。あつ！　僕の金はどこへ行つたかな？　どこへ置いたつけ？」と叫んで、彼は兩手を左右のポケットに突つ込み始めた。

「テーブルの上へ置いたぢやありませんか、……君が自分で、……ほら、ここにありますよ、忘れたんですか？　全く君にかかつては、金もまるで、ごみか、湯水のやうですね。さあ、君のピストルは上げませう。しかし、どうも不思議ですね。五時すぎにこれを十留で質に入れておきながら、今は何千留といふ金を持つてゐるぢやありませんか。二千か三千はありさうですね？」

「きつと三千ぐらゐあるでせう。」ミーチャはズボンのポケットに金を押し込みながら、かういつて笑つた。

「そんなことをしたら、おとしますよ。君は金鑛でも持つてるんですか？」

「金鑛？　金鑛？」とミーチャは力いつぱいに叫んだが、急に大聲で笑ひ出した、「ペルホーチン君、君は鑛山へ行きたいんですか？　この町の或る婦人がね、若し君が鑛山へ行くとなれば、さつそく君に三千留も投げ出してくれる筈ですよ。その婦人がひどく金鑛好きでしてね、實は僕にも投げ出してくれたんですがね。君はホフラーコワ夫人を御存じですか？」

「知り合ひぢやありませんが、噂にも聞いてゐますし、見たこともあります。一體、その人が君にほんとに三千留くれたんですか？　ほんとですか？」ペルホーチンはかういつて、怪訝さうな眼つきをして相手を眺めた。

「ぢや、君、明日、太陽が昇つたとき――永遠に若々しいアポロ神が、神を讃美し、祝福しながら昇つたとき、さつそくあの人のところへ、あのホフラーコワ夫人のところへ行つて、果して僕に三千留といふ金を投げ出したかどうか、訊いて見たらいいでせう。聞き合はして御覽なさい。」

「僕には、君たちの關係は分かりませんよ、……そんなに君がきつぱり言ひ切るところを見ると、そんなに大金を握つて、シベリヤへ行くかはりに、すつかの婦人がくれたといふのは本當でせうよ。君はそんな大金を握つて、シベリヤへ行くかはりに、すつかり費ひ果たさうとするぢやありませんか、……一體これからどこへ出かけるつもりなんです、え？」

「モークロエへ。」

「モークロエ？　だつてもう夜ぢやありませんか！」

「元は何不自由ないマストリューク だつたのに、今は無一物のマストリューク になつちやつた。」不意

にミーチャが叫んだ。
「どうして無一物です？　何千といふ大金を握つてゐるのに、無一物つてことはないでせう？」
「僕がいふのは金のことぢやありません。金なんか、どうなとなれだ！　僕のいつてゐるのは女心のことです。

女ごころは浮氣なものよ、
變りやすうて、自墮落で。

これはユリシーズの言葉ですが、僕は全くこれに同感です。」
「僕には君のいふことがさつぱり分かりません。」
「僕は醉つ拂つてでもゐますかね？」
「醉拂つてはゐませんが、それよりも一そう悪いんです。」
「いや、僕は精神的に醉つ拂つてゐるんですよ、ペルホーチンさん、精神的の醉つ拂ひです！　いやもう充分です！」
「君、どうしたんです？　ピストルに丸をこめたりして？」
「ええ、ピストルに丸をこめるんです。」
ミーチャは實際に、ピストルの入つた函を開けて、火藥入れの筒の蓋をとり、一生懸命にそれを裝填

してゐたのである。それから彈丸を取り出して、それをつめる前に二本の指でつまんで、眼の前の蠟燭の火にすかして見た。
「何だつて君はそんなに丸を見てるんです？」ペルホーチンは不安ながらも、好奇心をもつて見つめてゐた。
「さう。ちよつと考へてるんですよ。若しも假りに、君がこの丸を自分の頭の中に打ち込まうと考へたとする、そしたら果してその時、丸を見るか見ないか、どつちでせうね？」
「何だつて見るんです？」
「それが僕の頭へ入つて行くんですもの。どんな恰好をしてゐるか、ちよつと見るのも面白いぢやありませんか。……しかし、馬鹿げたことですよ。ちよつと頭に浮かんだつまらないことです。さあ、これでおしまひだ。」彼は裝塡し終つて、それを麻屑で押し込みながら附け足した、「ペルホーチン君、つまらん話だよ。何もかも馬鹿げたことだ。どんなに馬鹿げたことか、少しでも君が分かつてくれたらなあ！　ところでね、紙つきれを少しばかりくれませんか。」
「さあ、この紙。」
「いや、もつと滑らかな、綺麗なのが欲しいんだ。字の書けるやつをさ、ああ、それそれ。」
ミーチャはテーブルからペンを取り上げて、大急ぎで二行ばかり書き終ると、それを四つ折りにして、チョッキのポケットへねぢこんでしまつた。それからピストルを函に入れ、鍵をして、手にとつてから、活氣のない、物思ひに沈んでゐるやうな微笑みをうかべてペルホーチンを眺めた。

「さあ、出かけませう。」と、彼はいつた。

「一體、どこへ出かけるんです？　いや、ちよつとお待ちなさい。……若しや、君はその丸を御自分の頭に擊ちこむつもりぢやないんでせうね？」ペルホーチンは心配さうに訊ねた。

「丸なんて馬鹿げたことです。僕は生きたいんですからね、僕は生命を愛する、……恐らく、君はそれを眞にうけてくれるでせうね。僕は金髪のアポロを愛します、その熱い日光を……ね、ペルホーチン君、君は道をゆづるのを知つてますか？」

「ゆづるとは？」

「道をあけることです、愛する者と憎む者のために道をあけてやることです。そして憎む者をも愛することができるやうに、——かうしたことを、道をゆづるといふんです！　彼らに僕はかういつてやる、君たちの上に祝福あれ、君たちはこの道を通つて行くがいい、僕は……」

「君は？」

「いやもう、澤山、さあ、出かけようよ。」

「それは大へんだ。誰かに話して、君を行かせないやうにしなければならない。」ペルホーチンは彼をみつめながらいつた、「一體、何の用事があつてモークロエへ出かけるんです、今ごろ？」

「あそこには女があるんですよ、女が。しかし君、もう澤山だよ、ペルホーチン君。やめて下さい。」

「ねえ、君、君はそんなに野蠻だが、僕はいつも君といふ人が何となく好きでたまらなかつたんですよ、……僕は心配でならないんです。」

「ありがたう。君は僕を野蠻だと言ひましたね。だが、人間はみんな野蠻なのさ。野蠻人だよ！　たゞ僕にこれ一つだけは斷言しておかう、野蠻人だ！　と。おお、ミーシャが歸つて來ましたよ。僕はすつかりこの子のことを忘れてゐた。」

ミーシャは兩替したお金を手いつぱいに握つて、そそくさと入つて來た。そしてプロトニコフの店ではみんな誰も彼もが『大騒ぎ』をして、酒の壜や魚や茶などを引つぱり出してゐるから、今にすつかり支度が整ふだらうと報告した。ミーチャは十留の札を取り出して、ペルホーチンに手渡し、もう一枚をミーシャの手に握らせた。

「そんなことはなさらないで下さい！」とペルホーチンは叫んだ、「僕んところでは決してそんなことはさせないのですから。それは却つて子供に甘えさせる悪い癖になりますから、その金はおしまひ下さい。さあ、そこへおしまひなさい。何だつてそんな無駄ぜにをお使ひになるんです？　明日になると、早速その金が役に立つかも知れません。そんなことをすると、今にまた僕のところへ、十留貸してくれなんぞと言つて、のこのこ來るやうになるでせう。何だつて君は金を横のポケットにばかり入れるんです？　いや、そんなことをすると失くしちやいますよ。」

「ねえ君、モークロエへ一しよに行かうぢやありませんか？　僕は何だか飲みたくなつたんです、それも特に君と二人で飲みたいんです。僕は一度も君と飲んだことがないですね、え？」

「何のためにそんなところへ僕が行くんです？」

「ねえ君、さつそく一本抜いて人生のために飲まうぢやありませんか？　僕は何だか飲みたくなつた

「ぢや、居酒屋でやつたらいいでせう。出かけませう。僕も今行かうと思つてたところです。」
「いや、居酒屋へ行く暇なんかありません。そんならプロトニコフの奥の部屋で飲むことにしませう。そこで一つ、謎をかけようかな。」
「ああ、かけて見たまへ。」
ミーチャはチョッキのポケットから例の紙切れを取り出して、ひろげて見せた。それにはくつきりと大きな字でかう書いてあつた。
『一生涯に報いて、われ自らを罰す、わが全生涯を罰するなり！』
「僕はどうしても誰かに話しますよ。これからすぐに行つて知らせますよ。」ペルホーチンはその紙切れを讀んでかういつた。
「ねえ君、もう時間がなくなるよ、さあ、行つて一杯飲まうよ。進めっ！」
プロトニコフの店は殆んどペルホーチンの家のすぐ隣りで、ちやうど通りの角にあつた。それは金持の商人が經營してゐる、この町でも最も主だつた雜貨店で、店そのものも決して惡くはなかつた。その店へ行くと、ペテルブルグの大商店にあるやうな雜貨は何から何まで備へてあつて、あらゆる雜貨はもとよりのこと、『エリセーフ兄弟商會元詰』の葡萄酒の壜、果物、葉卷、茶、砂糖、珈琲、そのほか何でも置いてあつた。その店にはいつも、番頭が三人すわつてゐて、走り使ひは二人の配達小僧がやつてゐた。この地方は衰微してしまつて、地主たちはどこかへ散り散りに姿をくらましてしまひ、商業は日を追うて活氣を失つて行つたが、雜貨の方は依然として繁昌するばかりか、年と共によくなつてゆくらゐであつた。つまりかうした商品に對しては、客足が絶えないからである。

店では今か今かとミーチヤの來るのを待ちかねてゐた。店の者は彼が三四週間まへに、やはり今度と同じやうに、葡萄酒やいろいろの商品を何百留といふほど註文を受けて、しかも現金で拂つてもらつたことをまざまざと記憶してゐたのである（いふまでもなく、この店ではミーチャならば、何一つ掛け賣りはしなかつた）。そのときも今度と同じやうに、虹いろの百留紙幣の束をわしづかみにして、何のためにそんなに澤山の葡萄酒や食料品が必要なのか、ろくろく考へもせずに、また考へようともせず、しかも別に値切らうとする風もなく、やたらに札びらを切つたことは、彼らもよく覺えてゐた。
そのとき、彼はグルーシェンカと一しよにモークロエへ飛び出して、『その晩と次の日との、ほんのわづかの間に、三千留の金をすつかり使ひはたし、さんざん豪遊をしたあげく、一文なしになつて歸つて來た。』といふ話が町中にひろがつたのである。彼はそのとき、この町に逗留してゐたジプシイの一隊を總揚げにしたが、二日の間といふものは、醉つ拂つてゐるあひだに惜し氣もなく金を引き出されたり、高い酒を底知れぬほど飲み倒されたとのことであつた。人々はミーチャがモークロエで野暮な百姓たちにシャンパンを飲ましたり、田舍の女や娘たちに、ストラスブルグの饅頭（ピロージ）や、いろんな菓子を振舞つたりしたといつて、嘲し合つては嘲笑つてゐたのである。ミーチャの面前で嘲笑することは、少々危險なので、かげで、殊に居酒屋などで一そうひどく笑ふのであつた。その話題といふのは、彼自身の口から出た、人前はばからぬ大つぴらな、ある一つの告白で、この『無鐵砲な振舞』によつて、彼がグルーシェンカから得たものは、ただ『彼女の足へ接吻を許されただけで、それ以上のことは何も許されな

かつた』といふのであつた。

ミーチャとペルホーチンとが店へ近づいたときには、三頭立馬車が毛氈を敷き、小鈴をつけて、入口のところに支度されて、馭者のアンドレイがそれに乗つてミーチャの來るのを待ち受けてゐた。店ではもう品物を殆んど一箱に詰め終つて、ただミーチャがやつて來たら、すぐに釘を打つて馬車に積み込むばかりにしてゐた。これを見て、ペルホーチンは驚いて、「おや、一體、どこからこんなに早く馬車が來たんだらう?」とミーチャに訊ねた。

「僕が君のところへ走つて行く途中、アンドレイに出つくわしたので、そこの店へすぐに馬車を廻しておくやうにと言ひつけておいたのさ、無暗に暇をつぶすがものはないからね。この前はチモフェイの馬車を雇つたが、今度はチモフェイも例の魔法使ひといつしよに僕より先に、つ、つ、つ、つうと行つてしまつたんだ。おい、たぶん遲れるだらうな、アンドレイ?」

「いえ、チモフェイはわたしたちより一時間も先きに着くくらゐのものでせう。若しかすると、それほどでもないかも知れませんよ。」とアンドレイは忙しさうに答へた、「チモフェイの車もわしが用意してやつたんですよ、だから、あいつがどのくらゐ行つてゐるか、わしにはちやんと分かつてまさ。あいつの走らせ方と來たら、とても、わしの足もとにも及びませんよ、ドミトリイ様。とてもわしの足もとにも寄りつきやしませんよ。なあに、一時間も先きにどうして着けるもんですか!』アンドレイは眞面目になつてかう答へた。彼は痩せぎすな、髪の赤らんだ、まだ血氣さかんな馭者で、袖なしを着け、手には粗末な羅紗の外套を持つてゐた。

「あいつらにたつた一時間ぐらゐの遲れで濟んだら、酒代は五十留だ。」

「いや、一時間なら請け合ひますよ、ドミトリイ様。一時間はおろか、三十分も先きには、着かしやしませんよ。」

ミーチャは何かと指圖をしながら、しきりにそはそはしてゐたが、話をするにも、物を言ひつけるにも、何だか妙に、とりとめがなくて、筋道が立つてゐなかつた。何か言ひかけても、しめくくりを忘れてしまふといふ風であつた。ペルホーチンもやむを得ず、口添へをしてやらなければならないと考へた。

「四百留だぞ。四百留より少くちやいかん、この前の時のやうにするんだぞ。」とミーチャは命令した、「シャンパンが四ダース、一壜でも少くてもいけないんだ。」

「何だつてそんなに澤山いるんです? 一體、何の必要があるんです? ちよつと待て!」とペルホーチンは叫んだ、「この箱は何だ? 何が入つてるんだ? 何が入つてゐるのかね?」

忙しさうに行つたり來たりしてゐた番頭たちは、お世辭たつぷりな調子で、この箱の中にはただシャンパンが半ダースと、口直しのおつまみ物や果物やドロップや、そのほか『先づ以て是非ともなくてはならないもの』だけが入れてあるので、『御註文』の大部分の品は、この前のときと同じやうに、唯今さつそく、別な馬車に積み込んで、やはり三頭立で充分間に合ふやうにお屆けいたしますと說明した、『旦那樣が向ふへお着きになつてから、一時間以內に向ふへお屆けいたします。』

「一時間以上おくれちやいかんぞ。決して一時間以上おくれないやうに。それからドロップと手套飴(チャグーシャ)をもつと積んでおけ。あそこの娘たちはとても好きだからな。」とミーチャに熱心に念を押した。

「手套飴はまあいいとして、シャンパンがどうして四打も要るんだね、君？　一ダースで結構だよ！」

ペルホーチンはもう殆んどむきになつてゐた。

彼は値段のかけ引きをしたり、品物の勘定書を出させたりして、なかなかおとなしくしようとはしなかつた。しかも、全體でほんの百留ほど負けさせただけであつた。結局、全體で三百留ほどで、それ以上にならない品物を荷造りして造るやうにとのことで鳧がついた。

「ええ、みんな勝手にするがいい！」ペルホーチンは急に氣が變つたらしく、かう叫んだ、「僕の知つたことぢやないぢやないか？　ただで儲けた金なら、勝手にばら撒くがいい。」

「まあ、こつちへ來給へ、儉約氏、こつちへ來たまへよ、そんなに怒るもんぢやないよ、」とミーチャは奥の部屋へ彼を引つ張つて行つた、「すぐ一壜を持つて來させるからね、一しよにやらうぢやないかよ。ねえ、ペルホーチン君、一しよに出かけようぢやないか。本當に君は可愛いい人なんだからな。僕は君のやうな人が大好きなんだ。」

ミーチャは汚れたナプキンのかかつた小さなテーブルの前の編椅子に腰を下ろした。ペルホーチンはその眞向ひの席に座を占めた。シャンパンはすぐに運ばれた。「皆さん牡蠣はいかがでございます？　ごく新しく着いたばかりの、飛び切り上等の牡蠣なんでございますが。」と店の者はすすめた。

「牡蠣なんかどうだつていいよ、僕は食べないよ。僕たちは何もいらないんだ。」とペルホーチンはさ

も憎らしげに齒をむいた

「牡蠣なんか食つてる暇はないよ。」とミーチャはいつた、「それに欲しくもないしさ、ねえ君。」と彼はだしぬけに情をこめて言つた、「僕はこんなしまりのないことが大嫌ひだつたんだよ。」

「誰だつてそんなものを好くもんか！　まあ、考へても見たまへ、百姓にシャンパンを三ダースも買つてやるなんて、誰だつてそれだけで、腹が立つよ！」

「僕のいふのはそんなことぢやないよ、僕はね、もつと高級なしまりのことをいつてるんだよ。僕にはしまりなんてものはちつともないんだからね。高級のしまりといふものがね、……しかし、……それもみんな昔のことさ。今更くよくよすることはないんだ。もう取り返しがつかないんだ。どうなと勝手になれだ！　僕の一生は本當にしまりのないものだつた。人間といふものはちやんとしまりをつけなけりやならない。これは洒落かな、え？」

「君は讒言(うはごと)をいつてるんだよ。洒落ぢやない！」

「この世の神に御榮(みさかえ)あれ、
わが身の神に御榮(みさかえ)あれ！」

これはいつだつたか、ふつと僕の胸から出た詩なんだ。しかし、それは詩でなくて涙だ……僕が自分で作つたんだ、……でも、あの二等大尉の褌をつかまへて、引つ張つた時ぢやないよ……」

「何だつて君、だしぬけにあの男のことなんか言ひ出すんだい？」

「なぜあの男のことをだしぬけに言ひ出すかつて？　くだらないことさ。今にすつかり鬼がつく。今にすつかり平らになるよ。もうちよつとで、――きまりがつくんだ。」

「實際、僕は君のピストルのことが氣になつて仕方がない。」

「それもくだらないことさ！　さあ、途方もないことを考へ込んだりしないで、飲みたまへ。僕は人生を愛する。僕は人生を熱愛する、忌まはしいくらゐに愛する。もう澤山だ！　人生のために、……ねえ君、人生のために飲まうぢやないか。僕は人生を乾杯することを提言する！　何だつて僕は自分でこんなに嬉しいんだらう。僕は神の創造を祝福する。僕はいつでも神を祝福し、神の創造を祝福するけれど、しかし、……一匹の臭い蟲けらを殺さなくてはならない。そいつが這ひまはつたり、他人の生活を傷つけたりする心配を取り除かなければならないんだ、……ねえ君、人生のために飲まうよ！　何といつても人生よりも尊いものはないんだから！　何もないんだ、斷じてないんだ！　人生のために、そして女王の中の女王のために！」

「人生のために飲まう、そしてまあ、君の女王のために飲むのもいい！」

二人は互ひに一杯づつ飲んだ。ミーチャは有頂天になつてそはそはしてゐたが、それと同時に憂鬱でもあつた。それはちやうど、重苦しい、始末のわるい不安が眼の前に立ち塞がつてでもゐるかのやうであつた。

「ミーシャだ、……やあ、君のミーシャがやつて來たぢやないか！　ミーシャ、いい子だ、ここへ來い！　さあ、明日の朝の金髪のアポロのためにこの杯を飲み乾してくれ……」

「一體、何だつてこいつに杯を？」とペルホーチンはいらいらして叫んだ。

「まあ、いいよ、僕にまかしておいてくれ、僕はかうしたいんだから！」

「ええつ！」

ミーシャはぐつと杯を飲み乾して、お辭儀をすると、そのまま逃げ出してしまつた。

「あの子はきつといつまでもこのことを覺えてゐてくれるだらうよ。」とミーチャはいつた、「僕は女が好きだ、女が！　女とは何物ぢや？　地上の女王なり！　ペルホーチン君、僕は悲しい！　悲しくて仕樣がない。君はハムレットを憶えてゐるかえ？　＊『この胸が、何としたか甚う堪へがたなう惱ましい、ホレーショー、……はれ、憫然なヨリック！』おそらくはこれが僕なのだ、僕がそのヨリックかも知れないんだ。さうだ、今の僕はそのヨリックなのだ。そしてやがては髑髏になる！」

ペルホーチンは默々として聽いてゐた。ミーチャもしばらく言葉を休めてゐた。

「そこにゐる君んとこの犬は何といふ犬だね？」ミーチャはちやうどそのとき、隅つこの方にゐた眼の黒い、小さな可愛らしい狆に眼をつけて、いきなり、放心したやうな聲で、番頭に訊ねた。

「これはうちのおかみさんの、ワルワーラ樣の狆でございまして、」と番頭は答へた、「さつき抱いてこちらへいらつしやつて、そのまま忘れてお歸りになつたのでございます。お屆けしなければならんのですが。」

「僕はちやうどこれと同じやうなのをどこかで見たことがある、……たしか聯隊で……」ミーチャは

＊ ハムレット第五幕第一場と第二場に出てゐる言葉。坪内氏譯による。（譯者註）

物思はしげに呟やいた、「何でもそいつは後脚を一本くじいてゐたつけ、……ペルホーチン君、ついでに僕は訊きたいことがあるんだが、……君はこれまでに、何か盗みをしたことがあるかね?」

「まあ、何といふ質問だらう!」

「いや、その一寸。あのね、誰かのポケットから人のものをとつたことがあるかと訊くので、決して官金のことなんか言つてるんぢやないよ。官金なら誰でも手をつけるからね。無論、君だつてやつたらうさ……」

「ええ、よしたまへ。」

「いや、僕がいつてるのは他人の物のことだよ。本當に、ポケットか紙入れの中から、……盗つたことがあるかつていふのさ、え?」

「僕は一度、十のとき、母の金を二十哥テーブルの上から取つたことがあるよ。そうつと取つて、握りしめてゐたのさ。」

「うん、それで?」

「いや、別にどうもしないさ。三日の間、しまつておいたけれど、たうとう恥づかしくなつて、白狀して返しちやつたよ。」

「ふむ、それで?」

「あたりまへさ、なぐられたよ。ところで一體、君はどうしてこんなことを訊くのか知れないけれど、君御自身は盗つたことはないのかえ、え?」

「あるさ。」ミーチャはずるさうに眼をぱちぱちさせた。

「何を盗んだの?」ペルホーチンは好奇心をおこした。

「十のとき、母の金を二十哥。三日たつてから返してしまつたけど。」

かういつてミーチャはいきなり席を立つた。

「ドミトリイさま、もうそろそろお出かけになりませんか?」不意にアンドレイが店の入口から聲をかけた。

「用意ができたかい? 出かけよう!」とミーチャはあわて出した、「もう一寸、いひ殘しておきたいことがある、……アンドレイにウォトカを駄賃に一杯のましてやつてくれ、今すぐ! コニャクも一杯くれ。さよなら、ペルホーチン君、どうか惡く思はないでくれたまへ。」

「だけど、明日は歸るだらうな?」

「ああ、きつと歸るとも。」

そこへ番頭が飛び出して來て叫んだ、「唯今お勘定を濟ましていただけませんでせうか?」

「勘定か? よしきた、きつとするよ。」

彼はまた紙幣の束をポケットから取り出して、その中から三百留を引き出して、勘定臺の上に拋り出し、急ぎ足に店を出て行つた。一同はそのあとにつづいて出て、ぺこぺことお辭儀をしながら、有難うだの、御機嫌ようだのと言ひながら見送つた。アンドレイはたつたいま飲み乾したコニャクに喉を鳴らしながら、すぐに馭者臺の上に飛びあがつた。ところが、ミーチャがやつと席に落ちつくなり、思ひが

けなくも、眼の前にフョーニャが立つてゐるのを見た。彼女はせいせい喘ぎながら駈けつけると、聲高らかに叫んで、彼の前に兩手を合はせ、いきなり身を投げ出した。

「ドミトリイ様、情深いドミトリイ様。後生ですから、奥様を殺さないで下さいまし！　わたしがいろんなことをおしやべりしたものですから、……それから、あの方をも殺さないで下さいまし。だつて、あの方は前から譯のあつた人なんですもの！　きつと今度はアグラフェーナ様と御結婚なさるおつもりに違ひございません。わざわざシベリヤからお歸りなさつたのもそれがためなのでございますよ、……ドミトリイ様、どうか人の命を取らないで下さいまし！」

「ちえつ！　ちえつ！　ははあ、あつちへ行つて何かやらかさうといふんだな！」とペルホーチンは獨り言のやうに呟やいた、「今こそすつかり讀めた。かうなつたら、どんなにしたつて分かるんだ。ドミトリイ君、若し君が人間並みの顏がしたいんなら、すぐにそのピストルを僕に寄こすがいい。」彼は聲をはり上げてどなつた、「ねえ、ドミトリイ君！」

「ピストル？　まあ君、待つてくれたまへ、僕は途中で溝の中へ棄てつちやふから。」とミーチャは答へた、「フョーニャ、起きろ、おれの前に跪いたりするのはよしてくれ！　ミーチャは人を殺したりなんかしないからね、この馬鹿なおれも、もうこれからさき人を殺したりなんぞはしないからね。なあ、おい、フョーニャ、」と彼は叫んだが、もうその時は馬車の中に落ちついてゐた、「おれはさつきお前に失敬なことをしたが、あれは勘忍してくれよ、この惡人を許してやつてくれ、……可哀さうだと思つて、……でも許してくれないなら、くれないでもいいよ。今となれば、もうどつちにしたつて同じことだ。さあ、やつてくれ、アンドレイ、元氣よく飛ばしてくれ！」

アンドレイは馬に鞭うつた。鈴が鳴り出した。

「さやうなら、ペルホーチン君！　君に最後の涙をおくるよ！　……」

『醉つ拂つてもゐないんだが、なんてくだらないことばかりいつてるんだらう？』ペルホーチンはその後ろ姿を見やりながら、考へるのであつた。彼は、店の者がミーチャをごまかさうとしてゐるのを知つて、殘りの食料や酒類を同じく三頭立の荷馬車に積み込むところを、殘つてゐて監視してやらうかとも考へたが、急に何だか腹立たしくなつて來たので、いまいましさうに唾をはいて、行きつけの居酒屋に玉突きに出かけた。

「あれはいい男だけれど、馬鹿だ！」と途すがら彼は呟やいた、「グルーシェンカの『昔の人』だとかいふ將校のことは、おれも聞いてゐた。それにしても、若し向ふへ着いたら、そのときは、……ええ、あのピストルだ！　あ、糞つ、勝手にしやがれ！　一體おれがあいつの伯父さんとでもいふのか？　あいつらが好きなやうにするがいいんだ。どうせ大したことは起こるまいて。ただの騒ぎ屋にすぎないんだ。醉つ拂つて、喧嘩をして、仲直りをする。どうせ兩方とも眞面目な人間ぢやないんだからな？　なあに、どうせ何でもないんだ！　あの文句は『道をゆづつて自らを罰す』つてどんなことだらう？　居酒屋でも、醉つ拂つて、何べんもその同じ文句をどなつたもんだ。が、今は醉つてゐない。『精神的に醉つ拂つてゐる』とかいつたつけ、――なあに、氣取つた文句を並べるのが好きなんだ。やくざ者め、一體、おれがあの男の伯父さんだとでもいふのか？　きつとあいつは喧嘩したに相違ないんだ。顏

ちゆう血だらけだつた。相手は誰だらう？　料理屋へ行つたら分かるだらう。それにハンカチも血だらけだつた、――いまいましい、おれんとこの床のうへに残して行きやがつた。……ええ、もうどうだつていいや！」

彼はおそろしく不機嫌で居酒屋に來た。そしてさつそく勝負を始めた。遊戯は彼を陽氣にした。二番目の勝負が終つたとき、彼はふと勝負の相手に向かつて、ドミトリイ・カラマゾフはまた現金を手に入れたけれど、少くとも三千留ぐらゐはあるらしい、そしてそれをまたグルーシェンカと二人で遊んで使ふつもりで、モークロエへ向かつて飛んで行つたといふ話をした。この話は思ひがけないほどの好奇心を聽き手に惹き起こした。一同は笑ひもせずに、妙に眞面目な調子で話し始めた。おまけに、勝負さへもよしてしまつた。

「三千留！　三千なんて金がどうしてあの男の手に入つたんだらう！」

先きから先きへと質問の矢が放たれた。ホフラーコワ夫人についての噂は疑惑をもつて迎へられた。

「まさか親父を殺して取つたんぢやないだらうな、ほんとに。」

「三千留！　どうも穩やかぢやない。」

「いつかあの男は、父親を殺してやるつて、自慢らしく吹聽してゐたつけ。ここの人は誰でも聽いて知つてるよ。ちやうどそのときも三千留つて言つてたつけ……」

ペルホーチンはこれを聞くと、何だか急に返事するのもそつけなく、澁々と返事をするやうになつて來た。彼はミーチャの顏や手についてゐた血のことは一と言もいひ出さなかつた。そのくせ、ここへ來

るときには、先づ第一に話すつもりでゐたのである。

やがて三回目の勝負が始まつたが、ミーチャの噂もだんだん下火になつて來た。ところが、三回目の勝負が終つたとき、ペルホーチンはそれ以上勝負をつづける氣がなくなつたので、そのままキューをおいて、豫定してゐた夜食もたべずに、居酒屋を出た。廣場のところまで來ると、彼は自分でも呆れるくらゐに、思ひ迷つた氣持で、立ちどまつてしまつた。やつと我に歸ると、現在自分がフョードルの家へ行つて、何か變つたことが起こらなかつたかどうかをたしかめる氣になつてゐることが分かつた。『づまらないことのために（きつとつまらないことなんだ）、よその家を叩き起こして、不體裁なことを仕出かすくらゐが關の山だ。ちよつ、いまいましい、一體、おれがあの男の伯父さんだとでもいふのかい？』

おそろしく不機嫌な氣持で、彼はまつすぐに自分の家をさして歩き出した。と、不意にフョーニャのことが胸にうかんだ。『ええ、畜生！　今さつきあの女に訊いて見ればよかつたんだ、』彼は口惜しまぎれにかう呟やいた、『そしたら何もかも分かつた筈だのに。』彼女と話をして確かめたいといふ慾望が、おそろしく性急に彼の頭に押し寄せて來た。たうとう彼は中途でくるりと向きかへつて、グルーシェンカの住んでゐるモローゾワの家へ急いだ。彼は門に近づいて戸を叩いた。が、夜の靜けさの中のノックのひびきは急に彼の心を冷靜にして、癇癪をおこさせるのであつた。家の人はみんな眠り込んでゐると見えて、誰ひとり應へる者もなかつた。

『若しかすると、ここでもおれは不體裁なことを仕出かすかも知れない！』　彼は一種の苦痛を覺えな

がらかう考へたが、そのまま立ち去らうともせずに、今度はその音が往來ちゆうに響きわたるほどに、力まかせに戸を敲き始めた。

『これでいいんだ、もうやめるもんか、敲き起こしてやる、敲き起こしてやるんだ！』一つ敲くごとに、彼はかう呟やいて、殆んど物狂ほしいくらゐに、自分自身に對して腹を立ててゐたが、同時にますます猛烈に門を敲くのであつた。

VI

おれ樣の御入來だ

ドミトリイは街道を飛ばしてゐた。モークロエまでの道のりは二十露里と少しであつたが、アンドレイの馬車（トロイカ）は、それを一時間と十五分くらゐで行けさうな速度で走つて行つた。飛ぶやうな速さは、ミーチャの心を忽ちすがすがしくしたらしかつた。空氣は爽やかに、冷え冷えとして、澄み渡る空には大きな星がいくつも輝やいてゐた。それは、アリョーシャが大地に身をひれ伏して、狂氣のやうになつて、『永久にこの土を愛する』と誓つたのと同じ夜の、しかもおそらくは同時刻であつた。しかし、ミーチャの心の中は、暗澹とし、ひどく暗澹としてゐた。さまざまなことが彼の心を責め苛んではゐたが、しかも、その瞬間に、彼は身をもつて、ひたすら彼の女王たる女に憧れてゐた。その女のところへ、ミーチャは今はこれまでと、ただひと目見ようとして馬を飛ばしてゐるのであつた。

ちよつと一と言いつておくが、彼の心はただの一瞬間も反抗の念を感じてゐなかつたのである。不意に地の底から湧いて飛び出して來たかのやうな新しい男、新しい戀敵、あの將校に對して、――姨妬ぶかいミーチャがいささかも姨妬の情を感じてゐなかつたといつても、おそらく讀者は信じてはくれないであらう。若し誰かがここへ飛び出して來るやうなことがあれば、何びとたりとも、彼はすぐに烈しい姨妬心を起こし、おそらくはその怖ろしい手を再び血に染めたであらう、――それに、彼はこの『昔の人』にたいしては、今かうして馬車（トロイカ）を飛ばしてゐる間にも、姨妬がましい憎惡の念を感じなかつたばかりか、微かな反感をすらも持たなかつたのである、……尤も、まだ一度も彼はその男に會つたことはなかつたが。

『もうこの問題には議論の餘地がない。これは二人の權利なんだ。どうせそれは、あれに忘れられない、五年間忘れることができなかつた彼女（あれ）の初戀なんだ。して見ると、あれはこの五年のあひだ、その男だけを愛してゐたことになる。ところで、このおれは、おれは何のためにそんなところへ飛び出したんだらう？　そんな場合、おれに何の意味があるんだ？　脇へ寄つてやれ、ミーチャ、道をゆづつてやれ！　今のおれは一體、何ものだ？　今はあの將校が現はれて來なかつたにしても、何もかもが濟んでゐるのだ。全然、あの將校が姿を見せなかつたにしても、やつぱり何もかも濟んでゐる筈なんだ……』

若しも今彼に物ごとを判斷する力があつたとしたら、自分の感じを言ひ表はすために、おそらく、かうした言葉をもつてしたことであらう。しかし、その時の彼には物を判斷するなどといふことはできない沙汰であつた。今の決心も何らの判斷なしに生まれたものであつた。さつき、フョーニャの最初の言葉を聞いただけで、忽ち、この決心は、これに伴ふ凡ゆる結果とともに、胸に浮かんで來て、承認されたのであつた。とはいふものの、かういふ決心した反面には、やはり彼の心の中は暗澹として、痛々しいまでに暗澹としてゐた。すなはち、彼の決心は安らひを與へてくれなかつたのである。あまりにも多くのものが、彼の背後に立ち塞がつてゐて、彼をなやますのであつた。そればかりではなく、時をりはこれが我ながら不可思議に思はれるほどであつた。『われ自らを罰す』といふ宣告は、彼の手によつて紙に書かれ、しかもその紙はここに——ポケットにちやんとしまつてあるのだ。ピストルもちやんと彈丸で塡めてあるのだ。明日の朝は、どんな風にして、『金髪のアポロ』の最初の熱い光りを迎へようかといふことまで、すつかり決心がついてゐる。

それでゐながら、彼は依然として過去から脫れることができない、背後に振り棄てて來たすべてのもの、また自分を惱まして來たものから綺麗に手を切つてしまふことができないのだ。彼はそのことを苦しいほど痛感してゐた。またこのことを思ふことに、彼の心は絶望の淵に沈んで行くのであつた。

どうかすると、ゐても立つてもゐられなくなつて、不意にアンドレイに馬を止めさせ、自分は馬車から飛び下りて、例の裝塡してあるピストルを取り出し、曉を待たずに其の場で一切の片をつけてしまはうとさへも思ふのであつた。が、かうした瞬間は、すぐに火花のやうに消え失せた。それに、馬車は

『風を切つて』駈けてゐるではないか。目的地が近づくにつれて、又しても彼女のこと、——彼女ひとりのことが一そう強く、彼の心をとらへて、ほかの一切の怖ろしい考へを心の外へ追ひやるのであつた。ああ、彼は、たとひ一目でもよいから、たとひ遠くからでもよいから、彼女の姿が見たいと、どんなに憧れてゐたことであらう！『あれはきつと今頃はあの男と一しよに居るだらう。おれは今に、あの女があの、初戀の男と二人でゐるところを覗いてやる、おれの望みはそれで達せられるのだ。』自分の運命に、あれほど宿命的な一轉期を劃したこの女にたいして、今の今ほど彼の胸の底から強い愛情が湧いて來たことは、これまでに一度としてなかつたのだ。それは彼自身にさへも思ひがけない初めての新しい感情であり、また祈りにも比すべく、女の前に我が身を棄ててもよいくらゐの優しい感情であつた。『いや、本當にこの身を棄ててもよい！』彼はヒステリックな歡喜の發作に打たれて、かう叫んだ。

もう殆んど一時間ばかりも走りつづけてゐる。ミーチャはぢつと默りこんでゐた。常の時ならば話の好きな百姓であるアンドレイも、やはり口をきくのを怖れてでもゐるらしく、まだ一ことも口をきかなかつた。ただ三頭の痩せた、威勢のよい栗毛の馬を、一心に鞭うつばかりであつた。ミーチャはだしぬけに、怖ろしい不安におそはれて叫んだ。

「アンドレイ、若しも寢込んでゐたらどうしようかな？」

不意にかういふ考へが彼の心に浮かんだ。こんなことは今までには一度として考へなかつたことである。

「どうせはあ、寢てるでがせうな、ドミトリイ樣。」

ミーチャは痛ましさうに眉をひそめた。若し、それが本當だつたら、どうしようか、……自分が、……こんな氣持を懷いて、……駈けつけて見ると、向ふではもうみんな寢てしまつてゐる。……どうせあの女も眠つてゐるんだ。かう考へると、腹立たしい感情が、彼の心にこみ上げて來る。

「追へ、アンドレイ！　鞭だ！　しつかり！」彼は夢中になつて叫んだ。

「でも、ひよつとしたら、まだ床に入つてはゐないかも知れませんぜ。」暫らく無言であつたアンドレイはかういつた、「何でも、あそこには人がたくさん集まつてたとかチモフェイが言つてやんしたからな、……」

「驛に？」

「いや、驛ぢやがんせん、プラストゥノフの宿屋でして、つまり、勝手にこさへた驛なんで。」

「分かつてる。ところで、そこに人が大勢ゐるといふんだね？　どうしてまたそんなに大勢ゐるんだ？　一體どんな連中だい？」ミーチャはこの思ひもよらない報知を耳にして、非常に驚ろいて叫んだ。

「はい、旦那樣ばかりだとかチモフェイが申して居りましたよ。そのうちお二人はこの町から行つてるとか申して、――それから別にお二人、よそから見えた方がゐらつしやるさうですよ。たぶん、まだ他にもおいでかも知れませんが、別だん詳しいことは申しませんでした。皆さんが何でも歌留多を始めたとか申してをりました。」

「歌留多を？」

「はい、だから歌留多を始めたとありや、まだ床には入らんでござんせうよ。今やつと十二時前くらゐのもんでがせうから。」

「もつと急げ、アンドレイ、もつと！」又もやミーチャは氣短かに叫んだ。

「一つお伺ひしたいことがあるんですが、あれは一體どうしたわけでがせう。」しばらく默つてゐたと思ふと、アンドレイはまた口を出した、「ねえ、旦那、お怒りになつちやいけませんよ。それがどうも怖くて……」

「といふと？」

「はい、さつきフョーニャが旦那の足もとにばつたり倒れて、奥さんと今一人の方とを殺さないで下さいとお頼みしたでがせう、……ねえ旦那、……こつちへ旦那をお連れ申して、かへつてその、……いや、御免下さい、わたしは根が正直なもんですから、……何か馬鹿げたことを言つたかも知れませんが……」

ミーチャは不意に後ろから肩をおさへた。

「お前は別當だらう？　え？」と彼は逆上したかのやうに訊ねた。

「はい、さよで……」

「そんなら、お前は他人に道をゆづらなければならん、といふことを知つとるだらう？　他人に道を讓らうともしないで、人をひき殺したりして、おれ樣のお通りだなんて吐かす別當を見たら、一體、お前は何と思ふ？　いや、別當といふものは、決して人をひいてはならんのだ、人をひいたり、人の命を損ねたりしてはいかんのだ。で若し、お前が、人の命を損ねた日には、――自分で我が身を罰するがい

い。……若しお前が人を傷つけたり、人の命をとつたりしたら最後、——自分に罰を加へてどこかへ姿を隠さなければならないんだ。」

これらの言葉は殆んどヒステリックになつてゐるミーチャの口から自然に迸つたのである。アンドレイはその様子を見て、驚ろいてゐたが、依然として話の相手にはなつてゐた。

「全くですよ、ドミトリイ様。全くその通りです。誰だつて人をひいたり、苛めたりすることはできません。人に限らず、どんな生物だつて同じです、なぜつて、生き物はみんな神様がお創りになつたものですもんね。假りに馬をたとへにとつて御覧なさい、ほかの別當は、(よしんば露西亞の別當でも、)やたらに引つぱたくぢやござんせんか。みんな無理矢理に追ひ廻はして、さんざん追ひまくるぢやありませんか。」

「地獄へかい?」とミーチャは口を入れた。そして、だしぬけに、ぶつきら棒な調子で聲を立てて笑ひ出した。

「アンドレイ、お前はほんとに肚のない男だなあ。」かういつて再び彼の肩を強く抑へつけた、「おい、ドミトリイ・カラマゾフは地獄へ行くか行かないか、お前どう思ふ?」

「旦那、それは分かりませんなあ。それはあなた次第ですものな。だつて、旦那は、……あなたはこの町で、……ね、旦那、キリスト様は十字架で磔にされて、おかくれになつたときに、そのまま十字架から下りて、眞つ直ぐに地獄へ行かれたぢやありませんか。そして、そこで苦しんでゐる罪人たちを一人のこらず放しておやりになつたのですね。すると地獄は、もうこれから先き、自分のところへ誰も

罪人が來てくれないだらうと思つて、悲しんで呻き出したのでした。そのとき神様は地獄に向かつて、『地獄よ、そのやうに呻くものではない。お前はこれから、華族だとか、大臣だとか、えらい裁判官だとか、金持だとかいふ者が、みんなお前のところへやつて來て、そしてこの次ぎにわしが來るまでには、これまでの永い間と同じやうに、ずつとずつと後々まで、いつぱいになつてしまふだらう。』と仰つしやいました。これはその通りです。この通りの言葉を使つて申されたのです……」

「民譚(リゲンダ)だな、立派なものだ! さあ、アンドレイ、左の馬に一鞭やらんか!」

「ですからね、旦那、地獄はかういふ人たちのためにできてるんでがすよ、」とアンドレイは左の馬に鞭をあてながら、「ところが、旦那は小さな赤ん坊みたいなお方ですよ、……手前どもの眼には、どうもさう思はれるです。……ただ旦那は短氣な性分だ、それは本當でがすけれど、その正直なところに免じて、神様は許して下さいますよ。」

「ぢや、お前はおれを許してくれるかい、アンドレイ?」

「何だつて、わしが旦那を許すんでやんせう? 旦那はわつしに何も害をなさつたこともないのに。」

「いや、みんなの代りにだ、みんなの代りにお前一人が今、たつた今この往來の眞ん中でこのおれを許してくれるかい? ねえ、聞かしてくれ、大將!」

「おお、旦那! あなたを馬車へ乘せて行くのが、わるいお話で……」

しかし、ミーチャはそれを聞かうともしなかつた。彼は我を忘れて祈りながら、不躾に獨り言をいつ

た。

「神様、放埒をしつくしてゐるわたしを、このままお傍へ行かせて下さいまし。そして、わたしを咎めないで下さいまし。どうかあなたのお審きを通り抜けさして下さいまし。……わたしはこの通りわが身を責めてゐるんですから、どうか審きをしないで下さいまし。おお、神様、わたしはあなたを愛して居ります。ですから、どうか私を咎めないで下さいまし。わたしはこの通り、けちな野郎ではありますが、それでもあなたを愛してゐるんでございます。たとひあなたが私を地獄へお送りになりませうとも、私はそこでもあなたを愛します。地獄の中からでも、いつまでも、あなたを愛すると叫ぶでせう、……けれど、どうぞ最後の日が来るまで、この世の愛を完うすることを許して下さいまし、……今ここであなたの熱い光りのさし上るまで、たつた五時間のあひだ、この世の愛を完うすることを許してやつて下さいまし、……何せ、わたしは自分の心の女王を愛してゐるからなんでございます、……わたしは實際それを愛してゐるのです。愛さずにはゐられないのです。あなたには、わたしといふ人間の心が全部お分かりになつてゐる筈でございます。わたしはこれからあそこへ駈けつけて、あれの前に身を投げ出し、お前があれの前を通り抜けて、おれを置き去りにしたのは尤もな話だ、……では左様なら、お前の犠牲者を忘れてしまつてくれ、……決して、おれのことなんぞ氣にかけんでくれ！　と、かう申しま す。」

「モークロエだ！」アンドレイは鞭で前の方を指しながら叫んだ。

ふつと、夜の蒼白い闇を透して、黒い建物の群れが、廣々とした平野の中に堂々と浮かんで来た。モ

ークロエは人口二千ばかりの村ではあつたが、その時刻にはもう村中が、すつかり眠りに就いて、ただあちこちに、疎らな灯りが闇の中に明滅してゐるばかりであつた。

「追へ、追へ、アンドレイ、俺さまの御入來だ！」ミーチャは熱狂してゐるやうに叫んだ。

「まだ寝ちや居りません！」アンドレイは再び鞭でプラストゥノフの宿屋を指しながら言ふ。それはちやうど村のすぐ入口になつてゐた。往來に向いた六つの窓はまだ明るく輝やいてゐた。

「まだ眠つてないな！」ミーチャは嬉しさうに繰り返した、「アンドレイ、早く駈けろ！　うんと威勢よく駈けつけろ！　鈴を鳴らして、景氣よくみんなに俺の來たことを知らせるんだ。さあ、俺さまの御入來だ！　俺さまの御入來だぞ！」とミーチャは夢中になつて喚いた。

アンドレイは疲れはてた馬に鞭をあてて、本當に威勢よく高い階段の前へ駈けつけた。そして汗みどろになつて、半ば息絶えたやうになつてゐる馬の手綱を引きしめた。

ミーチャは馬車から飛びおりた、そのとき、宿屋の亭主は寢室に入らうとしてゐたが、一體、こんなに仰々しく馬車を乘りつけたのは誰だらうと、いささか好奇心をおこしながら、階段のところから覗いて見た。

「トリフォン・ボリースイチぢやないか？」

亭主は身をかがめてじつと見入つてゐたが、急に階段を飛びおりて來て、媚びるやうな喜びの色を浮かべながら、客の方へまつしぐらに駈けつけた。

「ドミトリイ様。まあようこそ！　またお目にかかれようとは？」

このトリフォンといふのは肉づきのよい、丈夫さうな百姓で、背丈は中位で、やや肥り氣味の顏をして、容貌がいかめしく、人當りがわるく、モークロエの百姓にたいしては殊更さうであつたが、何か少しでも儲けになりさうなことを嗅ぎつけると、すばやく卑屈なほどに愛想のいい顏つきになるといふ天分を持つてゐた。彼はいつも露西亞風の服裝をしてゐて、襟をはすに切つたシャツの上に袖無外套を着込んでゐた。もういい加減に金を貯めてゐるのに、もつとその上のいい位置を空想してゐた。

百姓の半分以上はみんな彼の爪牙にかけられて、みんな首の廻らぬほどの借金をしてゐた。彼は近所の地主から土地を借りたり買つたりしてゐたが、彼はその土地を、とても借金が返せさうにもない百姓に、代償として耕作をさせてゐたのである。彼はやもめ暮らしをしてゐたが、もう成人した娘が四人もあつた。そのうちの一人は早くも後家の身となり、彼の孫になる二つの小さな子供と共に、父の家に住みこんで、まるで日傭かせぎのやうに働いてゐた。二番目の百姓みたいな娘は、かなりの官吏のところへ嫁に行つてゐるが、その宿屋の一室の壁にかけてある、おそろしく小さな家族一同の寫眞の中には、制服を着て肩章をつけたこの官吏の寫眞を見ることができる。末の二人の若い娘は、いつも教會の祭の日とか、人を訪問する時とかには、身にぴつたりついていろや綠いろの着物を着て出かけて行つたが、その翌くる日になると、いつもと同じやうに夜明け前から起き出して、白樺づくりの箒をもつて客室を掃き出すやら、汚れ水を汲み出すやら、泊り客の出たあと片づけをしたりするのであつた。

もう何千留といふ金を儲けてゐるにもかかはらず、トリフォンは浮かれ客のポケットを空にしてしま

ふのが大好きで、まだ一と月ともたたない以前に、わづか二十四時間のあひだに、三百留とは行かないまでも、少くとも二百留以上の金をドミトリイから巻きあげたことを覺えてゐるので（それはドミトリイとグルーシェンカとが二人で身を眩ましたときのことであるが）今もミーチャが階段のところへ馬車を着けた瞬間、彼は良い鴨がかかつて來たとばかりに、喜ばしさうに、まつしぐらに出迎へた次第であつた。

「まあ、まあ、ドミトリイ様。あなたがおいで下さらうとは存じもよりませんでした。」

「待て、トリフォン、」とミーチャは口を切つた、「まづ何よりも大事なことを訊かう。一體あれはどこにゐるんだい？」

「アグラフェーナ様でございますか？」亭主はすぐに合點して、穴の明くほどミーチャの顏を見つめた、「はい、ここに……おいでございます……」

「誰と？　連れは誰だい？」

「よそのお方ばかりで……一人は官員さんですが、話しぶりから見ますと、どうも波蘭人らしうございますよ。アグラフェーナ様へ迎への馬車をお出しになつたのもその方でございます。も一人のお方は、どうもその方のお友だちのやうでもありますし、またただの道づれらしいところもあるんです。その邊は何とも分かり兼ねますが、お二人とも文官のやうなお身なりでいらつしやいますよ……」

「で、一體、豪遊でもしてゐるのかい？　金は持つてるかい？」

「何の豪遊どころぢやございませんよ。高が知れたもんでしてね、ドミトリイ様。」

「高が知れてるつて？　でほかの連中は？」
「はい、町からいらした二人づれの旦那が……チョールヌイのお歸りがけをそのままお泊りになつてゐるお客様です。何でも一人はお若い方で、たぶんミウーソフ様の御親戚かと存じますが、ついお名前を忘れまして、……いま一人は、御存じかも知れませんが、地主のマクシーモフで、巡禮のためにこの町のお寺へ寄つたところ、ふとあの若いミウーソフ様の御親戚と落ち合つて、一しよに旅をしてゐるとかいふことで……」
「それで全部か？」
「はい、それだけで……」
「もういい、默つてろ、ところでトリフォン、お前に一ばん肝心なことを訊きたいんだが、あれは一體どんな様子だい？　どうなんだ？」
「へえ、つい先きほどお着きになつたばかりでございますよ。皆さんと御一しよにゐらつしやいます。」
「浮かれてるかえ？　笑つてるか？」
「いいえ、あまりにこにこなさらない様子でございます。どちらかと申すと、お退屈さうなくらゐにお見受け申します。何でも、あのお若い方の髪を梳いたりしてゐらつしやいますよ。」
「その波蘭人の、將校の？」
「いいえ、そのお方はお若いどころぢやございませんよ。なあに、旦那様、あの方ぢやございません。あのミウーソフ様の御親戚にあたるお若いお方、……どうもお名前を忘れてしまひました。」
「カルガーノフとはいはなかつたかい？」
「へえ、そのカルガーノフ様で。」
「よしよし、自分で見分けるよ。で、みんなは歌留多をしてるのか？」
「はい、歌留多をお始めになりましたが、もうおやめになりました。お茶もすんで、フルーツ・リキュールをあの官員さんが御註文なさいました。」
「よしよし、トリフォン、もういいよ。おれが自分で見分ける。ところで、も一つ訊きたいんだが、ジプシイはここにゐるかい？」
「ジプシイは唯今さつぱり音沙汰がございません、ドミトリイ様。お上でおつ拂つてしまつたもんですから。その代り、ここに猶太人がをります。鑼鼓（チンバル）をたたいたり、ヴァイオリンを彈いたりいたします。ロヂェストヴェンスカヤに居りますから、お招びになればきつとやつて參りますよ。」
「それを招べ、必らず招ぶんだぞ！」とミーチャは叫んだ、「それから、この前の時のやうに、娘たちも總上げにすることができるか？　第一にマリヤをな。それからスチェパニーダにアリーナもな。合唱（コーラス）に二百留奮發する！」
「いや、そんなに大金をおかけになるんでしたら、もうみんな寢てゐますけれど、村ぢゆう總上げにでもいたしますよ。それに旦那様、この邊の百姓たちや娘つ子たちに、一體旦那様からそんな手厚いことをしていただく値うちがありませうかね？　あんな不躾な下等な奴らに、そんな大金をお使ひになる

なんて！　あんな百姓が、葉巻をいただいて喫む柄ぢやありませんよ！　あんな惡黨の奴ら、ぷんぷん臭い匂ひを立ててるぢやありませんか。娘つ子たちにしても虱だらけですものなあ。別に私は旦那様のために、ただで自分の娘たちを起こして參りませう。そんな大枚のお金をいただかうとは申しません。たつた今床に入つたばかりですから、ちよつと蹴れば起きて來ますよ。そして旦那様のために歌をうたはせますよ。この前のとき、あなたは百姓たちにシャンパンを振舞ひなさいましたが、本當にまあ！」

トリフォンがいろいろとミーチャに同情するのは、みな表面だけのことであつた。彼はこの前のときもシャンパンを半打もごまかしたり、テーブルの下に落ちてゐた百留札を拾つて、掌の中へ握りこんでしまつたりしたのである。そしてその札は掌の中へそのまま殘つてゐるのであつた。

「ねえ、トリフォン、俺があのとき、ここで撒きちらしたのは千やそこいらぢやなかつたねえ。覺えてゐるかい？」

「ええ、覺えて居りますとも、旦那様。さやうでございますよ。何しろ三千留くらゐ使つて行かれたのですからなあ。」

「ところが、俺はもう一度おなじことをやりたくて來たんだ。ほら、この通り。」

かういつて彼は、丸めた紙幣の束を取り出して、亭主の鼻さきへ突き出した。

「さあ、よく聞いてくれ、忘れちやいかんよ。もう一時間もたつたら酒が來る。いいかい、つまみ物も饅頭も、金平糖も來る、——そしたら、すぐ運んで來るんだぞ。今アンドレイの乘せて來た箱をすぐ上へ持つて來て欲しいんだ。それを開いてすぐシャンパンを出してくれ。さあ、肝腎なのは娘つ子だ。

娘つ子を招ばなけりやならん。それにマリヤを是非……」

彼は馬車の方を顧みて、ピストルの入つた函を取り出した。

「さあアンドレイ、勘定だ。受け取つてくれ！　そら、千五留が馬車賃だ。それから五十留が酒手だ、……お前がよく行き屆いて親切にしてくれたお禮だ、……お前、このカラマゾフの旦那を忘れちやいかんよ！」

「旦那、わたしは怖ろしうございます！」アンドレイはもじもじした。「お茶代は五留だけで結構です。それより餘計には頂けません。トリフォンさん、證人になつて下せえ。馬鹿なことを申しましたが、どうかお許し下さい……」

「何をびくびくしてゐるんだ？」ミーチャはじつと彼を見つめながらいつた、「ぢや、どうにでもするがいい！」彼は五留の金を投げ出してどなつた、「さあ、トリフォン、すぐに俺を案内して、何よりも先に皆の者をそつと一目だけ見せてくれ。けれど、皆には俺の姿を見られないやうにしてな。一體、みんなはどこの部屋にゐるんだい？　絲いろの部屋かい？」

トリフォンは氣づかはしげにミーチャを見つめたが、すぐ言はれるままに實行した。彼をつれて用心ぶかく玄關を通りぬけ、自分はいま客の坐つてゐる部屋と隣り合つたとつつきの大廣間へ入つて行つた。そこから蠟燭を持ち出し、そつとミーチャを連れ込み、眞つ暗な隅つこに彼を立たせた。で、ミーチャは誰にも相手には見られずに、一同を自由によく見ることができたのである。しかし、決して永い間は見てゐられなかつた。といふよりは、と見かう見することができなかつたのである。彼は女の姿を

見るや否や、動悸が急に激しく打ち出して、眼がくらんでしまつたのである。

彼女はテーブルのわきの安樂椅子に腰をかけてゐたが、その隣りには男ぶりのいい、まだ年の若いカルガーノフが長椅子に倚りかかつてゐた。グルーシェンカは彼の手を握りながら、何だか笑つてゐるらしかつたが、彼は何だか腹立たしさうにして眼をそらし、ちやうどグルーシェンカとさしむかひになつて、テーブルの向ふ側に坐つてゐるマクシーモフに、さもいまいましさうな樣子で大きな聲で何かしら話しかけてゐた。マクシーモフは何がをかしいのか、しきりに笑ひこけてゐた。長椅子の上には例の男が坐つてゐた。その隣りの椅子には、もう一人の見知らぬ男が腰を下ろしてゐた。長椅子の男はパイプをふかしながら、どかりと後ろにもたれかかつてゐたが、ミーチャはただ、『この妙に肥つた顏の男は、きつとあまり脊が高くないに相違ない、そして何だか腹を立ててゐるらしい。』と考へただけであつた。更にその友達であるもう一人の見知らぬ男は、何となくひどく脊が高いやうにミーチャには思はれたが、それ以外のことは何一つ見分けることができなかつた。彼は息がつまつて來た。とても一分間も、じつと立つてゐることはできなかつた。彼はビストルの函を長椅子の上において、身も冷え心もしびれるやうな思ひをしながら、いきなり綠いろの部屋に語り合つてゐる人々を目がけて飛びこんで行つた。

「あーっ！」

グルーシェンカは最初に彼の姿を見つけて、驚ろきのあまり金切り聲を立てた。

Ⅶ

元の、まぎれもない男

ミーチャは例の大股で、急ぎ足にぴつたりとテーブルのところに歩み寄つた。

「皆さん、」と殆んど叫ぶやうに大聲でいつたが、彼は一ことごと毎に口ごもつた、「僕は……僕は何でもありません！　怖がらないで下さい！」と彼は叫んだ、「僕は……僕は、別に何でもないんです。何でもないんです。」彼は突然グルーシェンカの方を振り向いたが、彼女は椅子に腰をかけたまま、ちぢみ上がつて、カルガーノフにもたれかかり、その手をしつかりと握りしめてゐた、「僕……僕もやはり旅の途中です。僕は朝までゐるだけです。皆さん、朝まで一しよに僕をおいてくれませんか？　本當に朝までです。これが最後です。お名殘に同じ部屋においてくれませんか？」

かう言ひをはると、彼は長椅子にもたれてパイプをくはへてゐる小男の方を振り向いた。相手はおごそかにパイプを口からはづすと、嚴しさうに言ひ放つた。

「*あなた、僕たちはここを借りきつてゐるんですよ。部屋はほかに、いくらもあるぢやありません

* あなた、君といふ波蘭語。（譯者註）

か。」

「やあ、ドミトリイさん、あなたでしたか！　一體どうしてここへ？」と不意にカルガーノフが言葉を添へた、「さあ、一しよにお坐んなさい。よく來ましたね！」

「御機嫌よろしう、あなたは親切な……ほんとに大切な方だと僕はいつも思つてゐます……」ミーチャは嬉しさうに元氣よく答へて、すぐにテーブル越しに手を伸ばした。

「あつ、痛い！　きつい握り方ですね！　まるで指が折れさうだ。」とカルガーノフは笑つた。

「あの人はいつもそんな握り方をするのよ、いつもさうよ。」グルーシェンカは面白さうに口を入れて、やはり怖づ怖づと微笑みを洩らしたが、ミーチャの顏つきを見てゐると、決して騷動なんか起こさうもないといふことが急に分かつたらしかつた。彼女は相變らず不安な念を懷きながら、非常な好奇心をもつてその顏を見まもつてゐた。彼女は彼から何かしら或る種の異常な驚愕を受けてゐたのであつた。實際グルーシェンカは彼がこんな時分に、今のやうな風に入つて來て、かうした口のきき方をしようとは、思ひもかけてゐなかつたのである。

「やあ、今晩は。」左手の方で地主のマクシーモフが、甘つたるい調子でいつた。ミーチャはその方へも駈け寄つた。

「今晩は。あなたもいらしてたんですね！　あなたもここに來てゐるなんて、實際愉快だ！　皆さん、皆さん、僕はね……（彼は再びパイプをくはへてゐる紳士の方へ顏を向けたが、たしかに彼はこの人をこの一座の主人公と考へたらしかつた）。僕は飛ぶやうにやつて來たのです、……僕は自分の最後の日

を、最後の時間を、この部屋で過ごしたかつたのです。この部屋で……以前、僕も自分の女王を……崇め奉つたことのある、この部屋で過ごしたかつたのです、……御免なさい。あなた！」彼は夢中になつて叫んだ、「僕は神に誓つてここへ飛んで來たのです、……いや、怖れないで下さい、これが僕の最後の夜ですから！　パーネ、仲好く飮まうぢやありませんか！　すぐに酒が來ますよ、……僕は馬車にのせて持つて來たのです。……（彼の手は知らず知らず紙幣の束の方へ行つてそれを取り出した）御免なさい、パーネ。僕はこの前の時のやうに音樂が聞きたいんです、どんちやん騷ぎがやりたいんです、ところで、蛆蟲が、何の役にも立たない蛆蟲が、地べたを這つて行きますが、それももう影も形もなくなつてしまひますよ！　僕は自分の喜びの日を、最後の夜に記念したいのです！　……」

後は殆んど息を切らしてゐた。まだまだ言ひたいことがいくらもあつたが、何だか妙な叫びが口を洩れて出るばかりであつた。紳士はじつと身動きもせずに、彼の顏と紙幣の束とを見つめてゐたが、ふとグルーシェンカの顏に眼をやつたとき、何だか腑に落ちないやうな樣子であつた。

「若しも、わが女皇殿下のお許しがあつたら……」と彼はいひかけた。

「え、女皇つて何のことなの？　女王のことなの？」不意にグルーシェンカがさへぎつた、「わたし、あなたのお話きいてると可笑しくなつてしまふわ、まあ、お坐んなさいな、ミーチャ。一體、あんたは何を言つてらつしやるの？　どうぞですから、びつくりさせないで頂戴な。ね、びつくりさせない？　させないこと？　さうなら、わたしあんたを歡迎するわ……」

「え、僕がびつくりさせるつて？」ミーチャは兩手を高く差し上げて叫んだ、「おお、遠慮なく傍を通

つて下さい。かまはず通り抜けて下さい。決して邪魔はいたしませんから……」

かういつたかと思ふと、いきなり彼は全くだしぬけに（一同の者にとつても、勿論、彼自身にとつても）、椅子にどつと身を投げかけて、反對の壁の方へ顔を向け、まるで抱きつくやうに椅子の背をつかみながら、涙にかき暮れた。

「まあ、まあ、またかうなのよ。あんたつて人は何て人でせう！」グルーシェンカはたしなめるやうに叫んだ、「わたしのところへ來ると、いつもかうだつたわ。——急に何かしやべり出すけれど、わたしには何のことかちつとも分からないのよ。この前も泣いたくせに、今日もまた泣き出したぢやないの？　見つともないつたらありやしない！　なぜそんなに泣いてるの？　何かほかにまだ、一人前の譯があつてもよかりさうなもんだわ？」一言一句、妙にいらいらした調子でいひながら、彼女は謎のやうに言ひ足した。

「僕は、……僕は泣きやしないよ、……やあ、今晩は！」彼は椅子の上でぐるりと身をかはして、だしぬけに笑ひ出した。しかし、それはいつものやうにぶつきら棒な、固苦しい笑ひではなく、妙に聞きとりにくい、無理に伸ばしたやうな、懐へ聲の、神經質な笑ひであつた。

「そら今度はまた、……まあ、陽氣になんなさいよ、ね？」とグルーシェンカは說きつけるやうにいつた、「わたし、あんたが來てくれたので、ほんとに嬉しいわ。ほんとに嬉しいわ、ねえ、ミーチャ、あんた分かつて？　わたし本當に嬉しいつて言つてるのよ！　わたしこの人に一しよになつて貰ひたいと思ひますわ。」彼女は一同に向かつて命令するやうに、かういつたが、その言葉はだしかに、長椅子に

坐つてゐる男にあてつけてゐるのであつた。「是非さうしたいの、是非！　だから、若しこの人が行つてしまふなら、わたしも行つてしまひますわ！」彼女は眼を輝やかせながらかういひ足した。

「女王の命ずるところ——即ち法律です！」波蘭人は媚びるやうにグルーシェンカの手を接吻しながらかういつた、「どうかあなたもわれわれの仲間入りをして下さい？」彼はミーチャに向かつて愛想よく言つた。

ミーチャはまた何やら長口舌を揮ふつもりで、立ち上がつたが、口から出たことは、まるで別なことであつた。

「飲まうぢやありませんか、皆さん！」彼は演說の代りに、だしぬけにかういつた。一同の者は笑ひ出した。

「まあ、わたしこの人がまた喋り出すのかと思つたわ。」とグルーシェンカは神經質らしく叫んだ、「よくつて、ミーチャ、」と彼女は押しつけるやうな調子でいひ足した、「後生だから、そんなに飛び上がらないで頂戴。でもシャンパンを持つて來たのは上出來だわ。わたしも少しいただくわ。フルーツ・リキュールなんかいやよ。でもあなた御自身でいらしたのは何よりもよかつたわ。でなかつたら退屈でしやうがないんですもの。……あなたはまた豪遊しにいらしたんでせう？　まあ、そのお金はポケットにしまつておきなさいよ。一體、そんな大金、どこから手に入れたの？」

ミーチャの手に依然として驚づかみにされてゐる紙幣は、非常に一同の——特に波蘭人の注目を惹いた。ミーチャは急にあわてて、ポケットにそれを押し込んで、さつと顔を赧くした。ちやうどそのと

き、宿の亭主は、栓を抜いたシャンパンの壜と、コップをいくつか盆に載せて入つて來た。ミーチャは壜を取り上げかかつたが、すつかり狼狽してしまつて、それをどうしていいのか分からなかつた。カルガーノフはミーチャの手から壜を取り上げて、シャンパンを注いだ。

「おい、もう一本、もう一本！」ミーチャは亭主に言ひつけた。そして、さつきはあれほど鹿爪らしく、親交の乾杯をしようといつておいた例の波蘭人に杯を差すのも忘れて、そのまま一人でぐつと飲み乾した。すると、急に彼の顔つきが一變してしまつた。入つて來たときの莊重な悲劇的な表情は、全く消え失せてしまつて、何かしら妙に子供らしい表情が顔に表はれた。彼は急におとなしく、へりくだつたやうに見えた。そして絶えず神經的に、子供らしい笑ひを含み、小心らしく幸福さうな顏をして一同を眺めたが、その表情はまるで、何か惡いことをしていぢめられた犬が、やつと許されて、また可愛がつて貰つてゐる時のやうな有難さうな表情であつた。彼は何もかも忘れてしまつたかのやうに、喜ばしさうに、子供らしい微笑みを浮かべながら、一座の人たちを見廻してゐた。

彼は笑みをたたへてグルーシェンカを見つめた。そして自分の椅子を持つて行つて、ぴたりと彼女の肘椅子に近づけた。次第々々に、彼はこの二人の波蘭人にたいする見分けもついたが、しかもなほはつきりと正體がつかめなかつた。長椅子の波蘭人は、その堂々たる態度と、波蘭風のアクセントと、それに特にそのパイプとで、ミーチャを感服させた。

『まあ、一體、どんな人なんだらう？　まあ、しかし、パイプをくはへてゐるところはなかなか立派だ。』とミーチャは考へた。いくぶん氣むづかしさうな、もう四十恰好に見える波蘭人の顏も、その小

さい鼻も、その下に見える思ひ切つて短い、染め毛をしてぴんと尖つた高慢ちきな髭も、やはりミーチャの心に、いささかの問題を惹き起こすには足らなかつた。馬鹿々々しいまでに、髮を前の方へなでつけた、シベリヤ出來の實にやくざな髮も、さしてミーチャを驚ろかさなかつた。

『どうも髮をかぶつたところを見ると、あんな風をするのが當り前と見える。』彼は幸福な氣持でこんなことを考へつづけてゐた。

もう一人の壁際ちかく坐つてゐた波蘭人は、長椅子に坐つてゐる波蘭人よりは年齡が若かつたが、一同の者を圖々しく挑戰的な態度で見廻しながら、無言のうちにも輕蔑の念をうかべて、じつと連中の話に耳を傾けてゐた。それは長椅子に腰をかけてゐる波蘭人とは比べものにはならないほど、圖拔けて背が高いといふ點だけがミーチャに印象を與へたにすぎなかつた。『この男、立つたら一丈六尺位あるだらうなあ。』といふ考へがミーチャの頭を掠めた。と同時に、この背の高い波蘭人は、長椅子に坐つてゐる波蘭人の親友であるとともに、若しかすると『護衛』かも知れない。從つて、パイプをくはへた小さい方の波蘭人は、この背の高い波蘭人を頗る使つてゐるに相違ない、といふ考へも彼の心に閃めいた。しかも、かうしたことはすべて、ミーチャの眼には、全く正しい想像で、決して疑ひをさし挾む余地のないもののやうに思はれた。今や、小犬のやうにおとなしい彼の氣持からは、あらゆる競爭心が跡かたもなく消え失せてしまつたのである。更に、彼は、グルーシェンカの態度にも、一種謎のやうな彼女の話しぶりにも、まだ少しも氣がつかなかつた。ただ彼女が自分に優しくしてくれる、自分を『許して』傍へ坐らせてくれたといふことを、慄へる胸で悟つただけであつた。彼はグルーシェンカがシャン

パンのコップを傾けるのを見てゐると、嬉しさのあまりわれを忘れてしまつた。とはいへ、一座の人々の沈默は不意に彼を驚ろかした。彼は何やら期待するやうな眼で、一同を見廻し始めた。

『ところで、われわれはどうしてかうじつと坐つてるんでせう？　一體、どうしてあなた方は何も始めないんです。皆さん？』彼の微笑みを含む眼は、かう訊ねてゐるやうに見えた。

「この人がいい加減なことばかりいふもんですから、僕たちはさつきから笑つてたんですよ。」不意にカルガーノフはミーチャの胸中を察したかのやうに、マクシーモフを指さしながら口を切つた。

ミーチャはすぐにカルガーノフをにらみつけてから、やがてマクシーモフの方へ視線を轉じた。

「いい加減なことですつて？」彼はいきなり例のぶつきら棒な、無愛想な笑ひ聲を立てたが、何かで嬉しくなつたらしかつた。「ははぁ！」

「さう。まあ考へても見て御覽なさい、この人はね、二十年代の露西亞の騎兵將校が、みんな波蘭の女と結婚したなんて言ひ張るぢやありませんか、そんなことはひどいナンセンスでさあね。え、さうぢやありませんか？」

「波蘭の女と？」とミーチャはまたしてもすつかり有頂天になつて言ひ返した。

カルガーノフには、グルーシェンカに對するミーチャの關係もよく分かつて居り、波蘭人のことも大體想像はついてゐたが、そんなことはあまり彼の興味を惹かなかつた。或ひはまるつきり彼の興味を惹かなかつたともいへるかも知れない。何よりも彼の興味を惹いたのは、例のマクシーモフであつた。偶然にマクシーモフと、ここで一しよになつて、しかもここの宿屋で、生れて初めて、この二人の波蘭人

に出喰はしたのであつた。しかし、グルーシェンカは以前から知つてゐたし、また嘗て誰かと一しよに彼女の家に行つたこともあつたが、彼女の好むところとはならなかつた。ところが、ここでは、打つて變つたやうに、彼女から非常に優しさうな目つきをされた。それもミーチャの來る前までは、殆んど撫でさすらないばかりであつたが、彼はまたさうされながらも、何となく無感覺でゐるやうに見えた。

彼はまだ二十歳足らずと思はれる青年で、しやれた身なりをし、非常に愛くるしい色白の顏に、ふさふさとした美しいブロンドの髮を持つてゐた。その色白の顏には、聰明らしい、時として年にも似合はない深い表情をもうかべる明るい、美しい空色の眼があつた。にも拘はらず、この青年は、どうかすると、まるで子供のやうな顏つきをしたり、口のきき方をしたりすることがあつて、自分でもそれを意識してゐながら、少しも恥ぢる樣子はなかつた。いつも愛想がよかつたが、彼は大體において、非常に風變りで、氣まぐれでさへもあつた。時として、顏の表情には、何となく物に動じない、執拗な感じの漂ふこともあつた。即ち、相手の顏を見たり、話を聞いたりしてゐるうちにも、絕えず何か別のことを空想するといふ風があつたのである。物憂げに、物ぐささうにしてゐるかと思ふと、時には、見たところ、極めて些細なことから、急に昂奮することもあつた。

「まあ、どうでせう、僕はもう今日で四日もこの人を連れて歩きまはつてゐるんですよ。」と、彼は物ぐささうに言葉尻を引き伸ばして話をつづけたが、その調子は少しも氣取つたところがなく、全く自然なものであつた、「あなたも覺えていらつしやるでせう、あなたの弟さんがこの人に馬車を衝きあてて跳ねとばしたことがあるでせう、それ以來なんです。あの時、なぜか僕はそのために、非常にこの人に

興味を覚えて、すぐ田舎の方へ連れて行つたのです。ところが、この人はあんなとんちんかんなことばかりいふもんですから、僕はこの人と一しよにゐるのが、恥づかしくなつてしまひました。そこで、この人を連れて歸るところなんですよ……」

「このお方、波蘭の女といふもの、見たことないです、それであんな途轍ない出たらめ仰つしやるんです。」パイプをくはへた波蘭人はマクシーモフにかういつた。

彼は相當な露西亞語を操つてゐた。少くとも、見て想像するよりは、ずつと巧妙であつた。ただ露西亞語を使ふときには、いつも波蘭風に訛らせるくせがあつた。

「だつて、私自身は波蘭の女と結婚したんですよ。」と答へて、マクシーモフはくすくすと笑つた。

「ははあ、それぢあ、あなたは騎兵隊に出てたんですか？　それで騎兵の話をなすつたんですね。騎兵將校だつたんですか？」とカルガーノフはすぐに啄を容れた。

「むろん、さうだとも。はて、この人が果して、騎兵將校だつたかな？　は、は！」ミーチャは熱心に耳を傾けながら叫んだ。そして誰かが物を言ひ出すと、すぐその方へ物問ひたげな眼を向けて、まるで自分の思ひもよらないことを一座の人々から聞き出さうとしてゐるかのやうな風であつた。

「いやいや、それはでござんすね、」マクシーモフは彼の方へ振り向いてからいつた、「わたしが申しましたのはその、何なんでございますよ、あちらの娘衆は、……綺麗な娘さんたちは、……われわれ露西亞の鎗騎兵と一しよになつて、マズルカを踊るんでございますよ、……女一人に鎗騎兵一人とでマズルカを踊りましてね、それが濟むと、さつそく仔猫のやうに、男の膝に飛び乘つて來るんですよ、……

白い仔猫のやうにでございますよ、……しかも、あちらのお父つあんもおつ母さんも、それを見ながら、お許しなさる、……お許しなさるんでございますよ、……聖くる日になると、その鎗騎兵は出かけて行つて結婚の申込をするといつた塩梅で、……まあ、こんな風に結婚を申込むのでございますよ、ひ、ひ！」と結んでマクシーモフは忍び笑ひをした。

「あなた、ならず者です！」椅子に腰かけてゐた脊の高い波蘭人がだしぬけに呟やいて、膝のうへに載せてゐた足を反對に組みなほした。ミーチャの眼には、彼のよく磨いた大きな靴だけが映つた。その靴には厚ぼつたい汚い裏革がついてゐた。ところで、波蘭人は大體、二人ともかなりに垢じみた身なりをしてゐた。

「まあ、ならず者なんて、この人は何だつてそんなきたない言葉を使ふんだらう？」グルーシェンカは憤慨した。

「いや、*アグリッピナさん、このお方が波蘭で見たのは百姓娘で、良家の令嬢でないです。」パイプをもつた波蘭人はグルーシェンカに言つた。

「まあ、その邊のとこだらう！」脊の高い波蘭人は輕蔑するやうに口を添へた。

「まだあんなことを！　この人に話させなさいよ！　人が話をしてゐるのに、何だつて邪魔をするんです！　これからが面白いところぢやありませんか？」グルーシェンカはどなりつけた。

「いや、わたし、邪魔してるんぢやありませんよ。」髪をかぶつた波蘭人はグルーシェンカの方をぢつ

＊ アグリッピナ……アグラフエーナといふ名を波蘭風にいつて。（譯者註）

と見つめながらいつた。そして勿體ぶつて口をつぐむと、再びパイプを吸ひはじめた。

「いえ、いえ、今のこの方のおつしやつたことは本當ですよ。」カルガーノフは何だか重大問題でもあるかのやうに、またもや昂奮して、「この人は波蘭へ行つたこともないんです。どうして波蘭の話なんかできるもんですか？　波蘭で結婚したことなんか無いんでせう？　ね？」

「はい、スモレンスク縣でございます。でも、その以前に或る鎗騎兵が、その女をですね、私の未來の妻を、母親や叔母や、それからもう一人、大きな息子をつれた親戚の女と一しよに露西亞へ連れて來たことがあるんですよ、それはその波蘭からでして、……本國からでして……その女を私に讓つてくれたんですよ。それはわれわれの方の中尉で、大そう男振りのいい青年でした。初めは自分でその女と一しよになるつもりでゐたらしいのですが、その女がびつこだつたことが分かつたもんですから、結婚しないことになつたんです。」

「ぢや、君はそのびつこの女と結婚したんですか？」とカルガーノフは叫んだ。

「はい、さうでございますよ。何しろ二人で私を少しだましたんです、びつこのことを隱したんでございます。初めのうちは、女がよく跳ぶわいと、さうばかり思つてたんです。いつもぴよんぴよん跳ねてたもんですから、これは氣が浮き立つてて跳ねるんだなと、さう思つてたんですよ。」

「君と家をもつのが嬉しくつてですか？」と妙に子供らしい、よくひびく聲で、カルガーノフが叫んだ。

「はい、さうだと存じました。けれど、それはまるきり別の原因だつてことが分かつたんでございますよ。そののち、私たちが結婚しましたとき、その結婚の當夜でしたが、式が濟んでから、家内がすつかり白狀しまして、哀れつぽい聲で詫しを乞ふぢやありませんか。何でも子供のとき、水たまりを飛びこえて、足をくじいたとか申しましてね。ひっ、ひっ！」

カルガーノフはまるで子供のやうになつて笑ひころげて、もう少しで長椅子の上にころがるところであつた。グルーシェンカも一しよになつて、大きな聲で笑ひ出した。ミーチャはミーチャで、今や幸福の絶頂に達してゐた。

「あのね、ねえ、これは本當のことですよ、もう嘘ぢやありません。」カルガーノフはミーチャに向かつて叫んだ、「御存じかも知れませんが、この人は二度結婚したんですよ、今の話は初めの細君のことなんです、——ところが、二度目の方はね、家出をしてしまつて、今でも生きてるんですよ、御存じですか？」

「まさか、そんなことが！」といつて、ミーチャは極度に驚ろいた表情をして、急にマクシーモフの方を振り向いた。

「いいえ、逃げてしまつたんです。私はこんな面白くない經驗を持つてますんで。」とマクシーモフは謙遜な態度で裏書きした、「それが或る紳士と一しよになんでございますよ。ところで、それよりも困つたことは、少ししかない私の財產をその前に自分名義にすつかり切り換へてしまつて、——あんたは教育のある人だから、自分で食べることに事缺くやうなことはないでせう——と、かう言ふぢやありませんか。それつきり私とは緣切りです。或る立派な僧上さまが、私に向かつて、かう仰つしやりました

よ、『お前さんのつれあひは、一人は跛だつたが、もう一人の方はあんまり足が輕すぎたよ。』と。ひっひっ！」

「まあ、お聞きなさいよ、お聞きなさい！」カルガーノフは眞赤になつて叫んだ、「若しこの人が嘘をついてるとすれば、——いや、しよつちゆう嘘をついてますがね、——それはただ僕たちを面白がらせるために嘘をつくだけのことなんです。これは卑怯なことぢやないでせう、ないぢやありませんか？それで僕は、御承知の通り、どうかすると、この人が好きになるんですよ。尤も、おそろしく卑屈な人間ですけれど、それがまたこの人には自然なんですからねえ。さうぢやありませんか？　どうです？　人によつては、何か自分の利益のために卑屈になることがありますけれど、この人のは本當に單純なんです。天性から來るんですよ、……まあ、考へても御覽なさい。ゴオゴリの『死せる魂』は、あれは自分のことを書いたんだと言ひ張るんですよ（昨日も途々そのことばかり議論しましたがね）。覺えでおいでせうけど、あの中にマクシーモフといふ地主があるでせう。この男をノズドリョフがなぐりつけたために、『醉ひに乘じ、鞭をもつて、地主マクシーモフに個人的侮辱を加へたる廉により』裁判に附せられるでせう、——え、覺えてますか？　ところがこの人は、自分がそのマクシーモフで、なぐられたのも自分だと言ひ張るぢやありませんか！　まあ、そんなことがあるものでせうか！　チーチコフが一ばん最後に旅行をしたのは、何でいつたつて、二十年代の初めごろですもの、まるで年代が合はないぢやありませんか。そんな時分にこの人がなぐられるなんてことがあるもんですか。ねえ、そんな筈はないでせう？」

何のためにカルガーノフがこんなに昂奮したのか、それは考へも及ばなかつたが、しかも彼は眞底から昂奮してゐたのである。ミーチャも共に、面白がつてゐた。

「ところで、若しこの人を本當になぐつたとすれば！」彼は笑ひながらどなつた。

「たしかに私がなぐられたといふわけではありませんが、ただその……」マクシーモフは急に口を入れた。

「ただそのつて何だえ？　なぐつたのか、なぐらないのか？」

「時に、何時（なんじ）であらうか、君（パーネ）？」パイプを持つた波蘭人は、退屈さうな表情をしてゐる脊の高い友人に訊いた。

相手は返事のかはりに肩をゆすぶつた。二人とも時計を持つてゐなかつたからである。

「なぜお話なさらないんです？　話す人には勝手に話させたらいいぢやありませんか。自分が退屈したからといつて、ほかの人も話をしちやいけないなんて法はないでせう？」グルーシェンカは何だか喧嘩を吹つかけるやうな調子で彼に喰つてかかつた。

そのとき、ミーチャの胸に初めて何ものかが閃めいたらしかつた。波蘭人も今度はいかにも腹が立つたといふ風に答へた。

「いや、わたし一切（いつさい）、反對しません、何もわたし言はんぢやつたです。」

「そんならいいけど、さあ話をつづけて頂戴。」グルーシェンカはマクシーモフに向かつてかう叫んだ、「どうして皆さん默つてしまつたんですの？」

「いえ、もうお話することもございません。みんな馬鹿げきつたお話ですから。」マクシーモフは少し氣取つて、すぐに答へたが、さも滿足してゐるらしかつた、「それにゴオゴリの書いたものは、みんな諷喩（アレゴリイ）になつてゐますよ。何しろ人の名前だつて、どれもこれも諷喩的（アレゴリカル）になつてゐますからなあ。ノズドリョフ（鼻孔の意）*も、本當はノズドリョフでなく、ノソフ（鼻の意）でございますし、クフシンニコフはまるつきり別な名前のシクヲールネフになつてゐますしね。フェルナルヂイはそのままフェルナルヂイですが、それはただ、伊太利人ではなく、露西亞人で、ペトロフでございますしね、フェルナルヂイ夫人は美しい婦人でしてなあ、可愛らしい小さい足に、窮屈すぎるほどの靴を穿いて、きらきら光る金箔のついた小さな短いスカートをはいて、それでひらひらと舞つたのでございますよ。四時間といふのは間違ひで、ほんの四分間ばかり舞つただけでございました、……誰も彼もみんな、うつとりしてしまつたものでございますよ……」

「でも一體、どういふ譯で君はなぐられたんだ?」とカルガーノフはどなつた。

「ピロンのためでございます!」とマクシーモフは答へた

「ピロンといふと?」とミーチャが叫んだ。

「有名な佛蘭西の文學者ピロンのことでございます。ちやうどその、とき、例の市場の居酒屋で、大勢あつまつて酒を飲んでをりました。その人たちが私を招待してくれましたものですから。それで、先づ第一番に私が警句を引つぱり出したものです。『まこと、それなるは汝か、ブアローよ? さてもふさけ切つたるその扮裝（いでたち）!』すると、ブアローは、自分は今假裝舞踏會に出かけるところである、と答へるぢやありませんか。なあに實は、お湯に行くところなので、自分のことと思つてしまつたのです。で、私はさつそく、別の諷詩を述べましたが、それは教育ある人人の口に膾炙されて居る、ぴりつと來るやつです。

御身はサフォ、われはファオン、まぎれもあらず、
さりながら、御身が海への道を知らざるは、われにとりては悲しきことなり。

すると一同はなほ機嫌を惡くして、口ぎたなく私を罵倒し初めたのです。ところが、私はまた、惡い結果になるとも知らずに、その場を言ひ繕ふつもりで、ピロンについての例の氣のきいた逸話（アネクドート）を語り初めたのです。ピロンが佛蘭西の翰林院（アカデミイ）會員へ入れてもらへなかつたものですから、その敵討ちのつもりで、自分の墓碑銘を書いたといふ話をしたのです。

Ci-git Piron qui ne fut rien
Pas même académicien.

ピロンは眠る、ここにして、何ものにてもあらざりし、
アカデミシャン（翰林院會員）にてもあらざりし。

するとみんなが私を捕まへてなぐつたのでございます。」

＊ ノズドリョフ（三百代言）、クフシンニコフ（中尉）、フェルナルヂイ（曲藝師）……いづれもゴオゴリの「死せる魂」の人物。（譯者註）

「一體、どういふ譯なんだ？　どうしてなんだえ？」
「私に教育があるためでございますよ。人間といふものは何とでも、なぐる口實はつくものでございますからね。」マクシーモフはつつましやかな、諭すやうな話の調子で結末をつけた。
「ええ、もう澤山！　聞くも厭やらしい。聞きたくもないわ。私もつと面白い話かと思つたわ。」だしぬけにグルーシェンカがさへぎつた。
ミーチャは愕然として、笑ふのをやめてしまつた。脊の高い波蘭人は立ち上がつた。そして、毛色の違つた仲間へ入つて、自分などには少しも興味がなくてさも退屈したといつた風に、兩手を後ろに組んで、部屋の中を隅から隅へと歩き出した。
「おや、ぢつと坐つて居れないのね！」とグルーシェンカは嘲けるやうな眼で彼を見ながらいつた。
ミーチャは何だか心配になつて來た。そのうへ、彼は、長椅子の上の波蘭人が、いらだたしい表情をして自分を見つめてゐるのに氣がついた。
「君！」とミーチャは叫んだ、「飲まうぢやありませんか！　もう一人のお方も御一しよに！　さあ、飲まうぢやありませんか、皆さん！」
彼は忽ち三つのコップを手先へ引き寄せて、なみなみとシャンパンを注いだ。
「波蘭のために、皆さん、波蘭のために飲みませう。波蘭の國のために！」とミーチャは叫んだ。
「それは大きに嬉しいです、あなた、飲みませう。」と長椅子の波蘭人は、嚴肅な、しかも慇懃な調子でいひながら、自分のコップを取り上げた。

「さあ、もう一人のお方……お名前は存じませんが、もし、大人、コップをお取り下さい！」とミーチャは急き立てた。
「パン・ヴルブレフスキイです。」長椅子の波蘭人が口を出した。
ヴルブレフスキイは悠々と體をゆすぶりながら、テーブルに近づいて來て、立つたまま、自分のコップを取り上げながら叫んだ。
「波蘭のために、皆さん、萬歳！」ミーチャはコップを取り上げながら叫んだ。
三人は一しよに飲み乾した。ミーチャは壜を取つて、すぐにまた三つのコップに注ぎこんだ。
「今度は露西亞のために、ねえ、皆さん、われわれは兄弟になりませう！」
「私にも注いで下さいな！」グルーシェンカがいつた、「私も露西亞のために飲みたいわ！」
「そんなら僕も。」とカルガーノフがいつた。
「ではわたくしも御一しよに、……年とつたお婆さんの露西亞のために。」マクシーモフは忍び笑ひをした。
「みんなで飲むんだ、みんなで！」とミーチャは叫んだ、「亭主、もう一本！」
ミーチャが自分で用意して來た分の殘りの三本が一どきに運ばれた。ミーチャはすぐにコップに注いで廻つた。
「露西亞のために、萬歳！」再び彼は叫んだ。
二人の波蘭人を除いたほかの一同は、祝杯をあげた。グルーシェンカは一氣にコップを飲みほした。

二人の波蘭人はコップにさはらうともしなかつた。

「あなた方は一體どうしたんです?」とミーチャが叫んだ、「ぢや、あなた方は何ですか?」

ヴルブレフスキイはコップを取り上げると、それを高くさし上げ、よく徹る聲でいつた。

「*千七百七十二年までの露西亞のために!」

「これは大きにうまい!」と別の波蘭人が叫んだ。かうして二人とも乾杯した。

「あなた方は馬鹿ですね!」とミーチャは思はず口を辷らせた。

「あなた(バーヌ)!」と二人の波蘭人はまるで牡鷄のやうに身構へして、怖ろしい權幕で叫んだ。

中でもヴルブレフスキイの方が特に熱くなつた。

「一體、自分の國を愛しちやいけないんですか?」と彼は叫んだ。

「お默んなさい! 喧嘩なんかお止しなさい! 喧嘩なんかしたら承知しませんよ!」とグルーシェンカは足で床をとんとん踏みならしながら叫んだ。

彼女の顔は燃えかがやき、眼は異樣に光り出した。たつた今飲んだばかりの酒が顔に出て來たのである。ミーチャは非常に驚ろいた。

「皆さん(パーノヴ)、どうか許して下さい! 僕が惡かつたのです。もうあんなことは言ひません。ヴルブレフスキイさん、パン・ヴルブレフスキイさん、もうあんなことは申しません……」

「まあ、あなたも默つてらつしやいよ! 坐つてらつしやい、ほんとに馬鹿な人だわね!」グルーシェンカは恨めしさうに不滿の色を見せて齒をむいた。

一同は席についた。そして互ひに顏を見合せながら、鳴りを靜めてゐた。

「皆さん、何もかも僕が惡いんです!」グルーシェンカのいつたことが、少しも呑み込めずに、またもやミーチャは口をきき出した。「けれど、何だつて皆さんはかう、ぼんやり坐つてるんでせう? え、何を始めたら面白くなるでせう? 愉快に、また愉快に遊ぶ方法がありさうなものを?」

「ああ、本當に面白くなくなつた!」カルガーノフはさも退屈さうに、口の中で呟やいた。

「また先きほどのやうに、*親取り(バンク)でもしたら如何でせう?」不意にマクシーモフがいつて、くすくす笑つた。

「親取り(バンク)? ああ、それがいい!」ミーチャは叫んだ、「ただこの紳士方さへ何でしたら……」

「ブージノ、あなた(バーヌ)!」長椅子の波蘭人は氣が進まぬらしく口を出した。

「それもさうだね。」とヴルブレフスキイは合槌を打つた。

「ブージノ? 一體ブージノつて何のこと?」とグルーシェンカが訊いた。

「それはつまり遲い(ボーズドノ)といふことですよ。あなた、時刻が遲い(ボーズドノ)といふことですよ。」と長椅子の波蘭人が說明した。

「この人たちにかかつちや、何でもかんでも遲いんだわ! 何もできつこないわ!」グルーシェンカ

＊ 一七七二年……プレデリック大王は波蘭を侵畧せんと企てゐた露西亞のエカテリナ二世および、オーストリアのマリア・テレサを誘つて、波蘭を攻撃し、つひにこの年、波蘭を分割せしむるに至つた。すなはち第一回の分割であり、露西亞はこれ以後、三回に亙つて東部の廣大なる地域を奪つた。(譯者註)

＊＊バンク……賭博にて親の基金をとる遊び。(譯者註)

は忌々しくなつて、殆んど喚くやうに言つた、「自分が退屈なもんだから、ほかの人まで退屈な目に遭はさうと思つてらつしやるのよ。ミーチャ、この人たちはねえ、あんたのゐらつしやる前までは、すつかり黙りこんで、わたしを鼻先きであしらつてゐたんですよ。」

「とんでもない！」と長椅子の波蘭人は叫んだ。「[*]Iso muvish, to sen stane. Vidzen ne lasken, iestem smutni. （あなたが私に御機嫌がよくなかつたもんですから、自然私も沈んでゐたのです。）Estem gotuv. （やりませう、私も）あなた、」と彼はミーチャの方を向いて言ひ足した。

「さあ、始めませうね！」とミーチャは同意して、ポケットから紙幣を取り出し、その中からテーブルの上に二百留だけとつて載せた。

「僕はうんと負けてあげますよ。さあ、歌留多を出して、親取り（バンク）をやつて下さい。」

「ここの家の主人より歌留多を借りて来ませう。」と小柄の波蘭人は勿體ぶつた調子で言葉に力を入れていつた。

「To hailepshi sposub （それ、何より良し方法です）」とヴルブレフスキイは合槌を打つた。

「ここの主人に？　なるほどそれはいい、よく分かりました。ぢやこの家から借りることにしませう。あなた方は見上げたものですよ！　おい、歌留多だ！」ミーチャは聲を張り上げて、亭主に言ひつけた。亭主はすぐにまだ封も切つてない新しい歌留多を持つて来た。そしてミーチャに向かつて、もう娘たちは集まつてゐるし、チンバルを持つた猶太人も間もなくやつて来る都合になつてゐるが、例の食料品を積んだトロイカはまだ着かないと報告した。ミーチャはテーブルから飛びあがつて、指圖をするために次の部屋へ駈け込んだ。ところが、娘たちはやつと三人來てゐるだけで、おまけに、マリヤの姿もまだ見えなかつた。彼はどんな指圖を下していいのやら、何のために駈け出して来たのやら、自分でも分からなかつた。彼はただ手土産に持つて来た箱の中から、氷砂糖や手套飴（チャグーシキ）をとり出して、娘たちに分けてやるやうに言ひつけただけであつた。

「それから、アンドレイにウォトカをやるんだ。ウォトカを！」と彼は早口に命令した、「ずゐぶんアンドレイには失敬したからなあ！」

このとき不意にマクシーモフが後ろから走つて来て、彼の肩に手をかけた。

「私に五留下さいませんか。」と彼はミーチャに囁やいた、「私もちよつと親取りをやつて見たいので。ひ、ひ！」

「すてきだぞ！　すばらしいぞ！　さあ十留やらう、そら！」

彼は又もやポケットから紙幣を殘らず取り出して、十留の紙幣を一枚みつけてやつた。

「負けたらまた来い。いいかい、また来るんだぞ！」

「はい、よろしうございます。」とマクシーモフは嬉しさうに咳やいて、廣間の方へ駈けて行つた。

ミーチャも直ぐに引き返して来て、一同を待たせておいた詫びをいつた。波蘭人は二人とも、もう席についてゐて、歌留多の封を切つてゐた。誰も彼もが、前よりはずつと愛想のいい、殆んど優しいといつてもよい位にしてゐた。長椅子の波蘭人は更に一服吸ひ終つて、歌留多を出す支度をしてゐたが、そ

[*] 波蘭語は露西亞語にかなりに共通するものがある。共通語の多い場合には、大體、日本語中の一種の方言のやうに譯しておいた。その他のときは、露をローマ字化して示し、原文の露語によつて譯をつけておく。（譯者註）

の顔には、一種の勝ち誇つたやうな色まで漂つてゐた。
「一ケ月ですよ、皆さん！」とヴルブレフスキイは叫んだ。
「いや、僕はもうしませんよ。」とカルガーノフは答へた、「僕はもうさつき、この人たちに五十留も捲き上げられたんですから。」
「あなたは運悪かつたんです。しかし、多分、今度はまた運が向いて來るでせう。」長椅子の波蘭人は彼の方を向いて言つた。
「親の金はいくらです？　有限ですか？」とミーチャは訊ねた。
「それは勝手ですよ、あなた。百留でも二百留でも、賭けたいだけ賭ければいいのです。」
「ぢや、百萬留！」ミーチャは聲を立てて笑ひ出した。
「大尉さん、あなたはボドヴイソーツキイのことをお聞きになつたでせうね。」
「ボドヴイソーツキイと申しますと？」
「ワルシャワ市である人が有限の銀行を始めたんです。そこへ誰彼なしに金を賭けに出かけるんですが、ボドヴイソーツキイもそこへやつて來て、千留の金貨を見ると、さあ、バンクをやらうといふのです。で、銀行の方では『ボドヴイソーツキイさん、あなたの名譽にかけて勝負をなさるのですか？』と念を押す。すると、彼はすぐに『無論、名譽にかけて。』と答へるので、『それぢや結構です。』といふことになつて、いよいよ銀行が札を切りはじめたのです。するとボドヴイソーツキイの方が勝ちまして ね、『あなた、これをお取り下さい。』と銀行がいひながら、さつそく手箱から百萬留の金を出して來て

彼に手渡したのです。『さあ、お受け取り下さい。これがあなたの勘定です！』それは百萬留の勝負だつたんです。『わたしはそんなことは知りませんでした。』とボドヴイソーツキイがいふと、『ボドヴイソーツキイさん、あなたが名譽にかけてなすつたのだから、わたしの方も名譽にかけてしまひました。』で、ボドヴイソーキイは結局その百萬留を取ることになつたといふ話です。」
「それは本當のことぢやありません。」とカルガーノフがいつた。
「カルガーノフさん、V shlyahetnoi company tak muvits ne prijstoi（身分ある人たちの席で、そんなことをおつしやるのは失禮ですよ。）」
「ぢや、波蘭人の博奕うちが百萬留よこすだらうよ、君にも。」とミーチャは叫んだが、すぐに氣がついて、「いや御免なさい、あなた、僕はまた悪いことをいひました、この人ならきつと百萬留ははふり出しますよ、名譽にかけて、波蘭人の體面を重んじて。どうです、僕のこの波蘭語の話し方は、は、は！　さあ、僕は十留かけませう、そら、ジヤックが出ますよ。」
「そんなら私も一留だけ女王様に賭けませう、可愛いハートの女王様に、ひつ、ひつ！」マクシーモフは自分の女王の札を引き抜いて笑ひながらいつた。かと思ふと、それを一同の者に見せまいとするかのやうに、體をぴつたりとテーブルに押しつけて、テーブルの下で手早く十字を切つた。ミーチャは勝つた。一留賭けたのも勝つた。
「隅打りだ！」とミーチャは叫んだ。
「私はまた一留**素で行きます。一留々々ちつちやな素で行きます。」マクシーモフは、一留勝つたので、有頂天になつて、幸福さうにかう呟やいた。

「しまつた！」とミーチャが叫んだ。「倍賭で七點だ！」

倍賭も打ち負かされた。

「もう、およしなさい！」だしぬけにカルガーノフがかういつた。

「倍賭だ！　倍賭だ」とミーチャはその度に賭を倍にして行つた、しかしその度ごとに彼は波蘭人に負かされた。そして、一留の方だけはいつも勝ちつづけた。

「倍賭だ！」ミーチャは殺氣を帶びて叫んだ。

「あなたは二百留負けたんですね。ぢや今度はもう二百賭けたらどうです？」と長椅子の波蘭人はたづねた。

「何ですつて？　もう二百留負けたんですつて？　ぢや、もう一度、二百留だ！　これだけ、みんな倍賭で行く！」と言ふなり、ミーチャはポケットから金を取り出して、二百留を女王の札へ賭けようとしたが、急にカルガーノフが手を出して、それをおさへつけてしまつた。

「いや、もう澤山です！」彼は持ち前の甲高い聲で叫んだ。

「どうしたの、君は？」ミーチャは彼を見つめた。

「澤山です！　厭やです！　もう勝負はやめなさい！」

「なぜ？」

「なぜつて、僕は厭やなんですから。唾でも引つかけて行つておしまひなさい。ね、分かつたでせう。僕はあなたに勝負をさせたくないんです。」

ミーチャはびつくりして彼を見つめた。

「およしなさい、ミーチャ！　多分この人の仰つしやる通りよ。そんなに澤山まけたぢやないの？」聲に奇妙な調子をつけて、グルーシェンカも口を出した。

波蘭人は二人とも、ひどく辱づかしめられたやうな樣子で席を立つた。

「冗談ですか、あなた？」小柄な波蘭人は嚴しくカルガーノフを見据ゑながらいつた。

「Yak sen povajash to robits, 失禮にも程がありますよ。あなた。」ヴルブレフスキイもまた、カルガーノフに向かつてどなりつけた。

「そんなに、そんなにどなるもんぢやありませんよ。」とグルーシェンカは叫んだ、「ああ、ほんとに、七面鳥みたいだわ。」

ミーチャは一同の樣子を次ぎ次ぎに見廻した。ところが、ふつとグルーシェンカの顏に眸を向けたとき、その顏の何ものかが彼の心を打つた。と同時に、何かしら全く新しいもの、——途方もない新しい考へが、彼の胸に閃いた！

「パーニイ・アグリッピナ！」小さい方の波蘭人は、赫と怒つて口を切つた、と思ふと、ミーチャが不意に、その方へ、つかつかと近づいて、ぽんと肩を叩いた。

「もし、大人（ヤスノヱリモージヌイ）、ちよつと一こと……」

＊　隅折り……四分の一多く賭ける、その際は歐留多の隅をほんの少し折る。

＊＊　素……隅を折らずに、普通に賭ける。（譯者註）

「何か御用ですか、あなた?」

「あちらの部屋へ參りませう、ちよつと一こと申し上げたいことがあるのです。結構な——本當に結構な話ですよ。あなたもきつと滿足なさるやうな話ですよ。」

小柄の方の波蘭人はびつくりして、不安さうな眼でミーチャを見つめた。さて、早速、承知をしたが、ヴルブレフスキイも同道するならといふ條件づきであつた。

「護衛なんですね? いや、一しよに連れて行かれるがいいでせう、その方が私にも好都合です! あの方も是非ゐなくちやならないくらゐです!」とミーチャはどなるやうにいつた、「さあ、行きませう。」

「一體、あなた方はどこへ行くんですの?」とグルーシェンカは心配さうに訊いた。

「すぐに歸つて來るよ。」とミーチャが答へた。

彼の眼には一種の勇氣と、思ひがけない活氣の色が閃いて來た。顏つきも、二時間まへに、ここに入つて來た時とはまるで變つてゐた。

彼が波蘭人を案內して行つた部屋は、娘たちの合唱隊が集まつて、テーブルが用意されてゐる大廣間ではなく、右手の方の寢室であつた。ここには箱や行李のほかに、小山のやうに更紗の枕を積み上げた二つの大きな寢臺が据ゑてあつた。片隅の小さな薄板づくりのテーブルの上には、蠟燭が點つてゐた。小さい方の紳士とミーチャとは、このテーブルを挾んで向き合ひに腰を下ろしたが、背の高いヴルブレフスキイは、兩手を後ろに組みながら、二人の橫に立つてゐた。彼らは二人とも嚴めしい顏をしてゐた

が、好奇心を動かしてゐることがありありと窺はれた。

「Chem mogen Slujits pany (どんな御用なんでせう?)」と小柄の波蘭人がぺらぺら言つた。

「ええ、ほかぢやありません。決して永くはお引きとめしませんから。ここにお金があります。」と彼は紙幣を取り出した、「どうです、三千留? さあ、これをもつてどこへでも行らつしやい。」

波蘭人は眼を丸くして、肚の中を探るかのやうに、瞬きもせずにミーチャを見つめた。

「Trji tisentsi, pane? (えい、三千留ですつて)」

「Trji です、Trji です! いいですか、いや、僕は君が物のよく分かつた人のやうな氣がするのです。この三千留の金を持つて、どこへなと勝手なところへ行つたらどうです? 但し、ヴルブレフスキイさんと御一しよですよ——いいですか? それも今すぐ、このまま出て行くんですよ。そして永久に行つてしまふんです。いいですか、永久にですよ、さあ、この戶口から出て行つて下さい。あちらの部屋に何かおいて來ましたか? 外套ですか、毛皮外套ですか? ぢや僕が取つて來てあげませう。すぐ馬車の用意をさせますから、そしたら、——いよいよお別れです!」

ミーチャは自信をもつて返事を待ちうけてゐた。少しも彼は疑はなかつた。波蘭人の顏には何かしら極度に斷乎たるものが窺はれた。

「ところで、そのお金は、あなた?」

「お金はね、かうしませう、今すぐ馬車代として五百留だけ、この場で手つけに差し上げます。それからあとの殘りの二千五百留は、明日、町でお渡しします、——僕は名譽にかけて、お約束します、僕

はどんな犠牲を拂つてでも、その金はこしらへます！」とミーチャは叫んだ。

二人の波蘭人は眼くばせした。脊の低い波蘭人の顏はだんだん險惡になつて來た。

「七百留です、七百留あげます。五百留ぢやありませんよ。さあ、たつた今この場でお渡しします。即時拂です！」ミーチャは何かよからぬことを感じて、かう附け加へた、「いかがです、あなた？　僕を信用できないんですか？　今すぐ三千留、耳を揃へてお渡しするわけには行かないんです。しかし、僕は必らず上げます。明日でもあれのところへ來て下さい……今ここには三千留の持ち合せがないんです。町の家にはあるんだけど。」ミーチャはしどろもどろにいつたが、一こと物を言ふごとに、彼の氣は沈んで行くのであつた。

「本當ですよ、お金は確かにあるんです、隱してありますよ……」

忽ちにして、ひどく尊大ぶつた色が、小柄な紳士の顏に現はれた。

「それから何か言ひ分がありますかね？」と彼は皮肉な調子で訊ねた、「Pfe！A Pfe！ちえつ　ちえつ」彼は床の上に唾を吐いた。

ヴルブレフスキイも同樣に唾を吐いた。

「まあ、そんなに唾なんか吐くのは、」ミーチャはもう萬事が終つたことを悟つて、絶望的に言ひ出した。「ぢや、グルーシェンカから、もつともつと、金を引き出させると思ふからなんだらう。本當に君たちは二人とも去勢された蹴合ひ鷄だ！　全くだ！」

「Estem do jivego dotkuentnuim！これはひどい侮辱だ！」と小柄な波蘭人は、不意に蝦のやうに眞つ赤になつて、

もう何も一言も聞きたくないといつた風に、恐ろしく憤慨して、ぐんぐん部屋を出て行つてしまつた。

あとから、ヴルブレフスキイも體をゆすぶりながら蹤いて行つた。最後にミーチャも途方に暮れたやうに、意氣悄然として部屋を出て行つた。彼はグルーシェンカが怖ろしくてたまらなかつた。波蘭人の早速わめき出されるのが怖ろしかつたのである。果してその通りであつた。波蘭人は部屋に入つて行くなり、芝居めいた身振りをして、グルーシェンカの前に立ちどまつた。

「アグリッピナさん！　Estem do jivego dotknentnuim！」と彼は喚き立てた。しかし、グルーシェンカは自分の最も痛いところを觸られでもしたかのやうに、辛抱ができなくなつたらしかつた。

「露西亞語でいひなさい、露西亞語で。」と彼女は叫んだ、「もう一ことも波蘭語を使つてはいけない！」と男にどなりつけた、「以前は露西亞語を使つたんぢやありませんか。一體、五年の間に忘れちやつたの？」

彼女は眞つ赤になつて、激昂してゐた。

「アグリッピナさん……」

「わたしはねえ、アグラフェーナですよ、グルーシェンカですよ。露西亞語で言ひなさいよ。それでないとわたし聞いてあげないから！」

波蘭人は體面を傷けられたので、息をはづませて、すぐに勿體ぶつた口調で、片言まじりの露西亞語を使つた。

「アグラフェーナさん、私は昔のことは忘れて、それ許すつもりで、ここへ來たのです。今日までの

ことはすつかり忘れるつもりで來たのです……」

「許すつて？　わたしを許しに來たんですつて？」グルーシェンカは遮つて、ひよいと席を立つた。

「ええ、さうですとも。わたし、そんな狹量な男ぢやありません。もつと寬大です。しかし、あなたの情人たちを見たときには驚いてしまひましたよ。ミーチャさんは別室でわたしに手を切らせるために、三千留を提供したです。わたしはあの男の顏に唾を吐きかけてやりましたよ。」

「何ですつて？　あの人が、私のために金を提供したんですつて？」とグルーシェンカはヒステリックに叫んだ、「本當なの？　ミーチャ？　よくもまあ、そんなことが？　……わたしを賣り物と思つてるのね？」

「皆さん、皆さん！」とミーチャは泣き聲で、「この女は純潔で、輝やいてゐるんだ。僕は一度もこの女の情人だつたことはないんだ！　あれは君の出鱈目だ……」

「この人に向かつて、私の辯護なんかよくできたもんだわ？」とグルーシェンカはヒステリッ純潔を保つたのは德の力ぢやないんですよ。またサムソノフを怖れてでもないんです。ただこの人に威張つてやりたかつたからなの。ただこの人に會つたとき、畜生と言つてやりたかつたからです。で、この人は一體、あんたからお金を取つたの？」

「ああ、取りかけたんだよ！　取りかけたんだよ！」とミーチャは叫んだ、「ただ三千留を一どきに欲しかつたところを、僕は手つけに七百留しか渡さなかつたんだ……」

「なるほどね。わたしがお金を持つてゐるのを嗅ぎつけたもんだから、のこのこ結婚しに來たんだわ！」

「いや、アグリッピナさん。」と小さい波蘭人は叫んだ、「私は——武士ですよ。——貴族ですよ。——平民ぢやないんですよ！　私はあなたと結婚するつもりでやつて來たのです。ところが會つて見ると、以前とはまるつきりちがつた、わがままな、恥知らずな女になつてしまひましたねえ。」

「ええ、もと來た方へお歸りなさい！　いま私が追ひ出してしまへといひつけたら、お前さんたちは出て行くより仕方がないんですよ！」グルーシェンカは前後を忘れて叫ぶのであつた、「私は馬鹿だつた、本當に馬鹿だつた。あんなに五年間も自分を苦しめるなんて！　でも、それはこの人のためぢやないんだ！　ただ、面あてのために苦しんだだけなんだわ！　それに、この人はあの人とはまるで違ふんだわ！　あの人はこんな人だつたかしら？　これはきつとあの人の親父さんかも知れないわ！　一體、あなたはその髮をどこで手に入れたの？　あの人は鷹だつたけれど、この人は雄鷄だわ。あの人はいつも私のためによく笑つたり、歌をうたつてくれたりしたのに、……それだのに、私は五年間も泣き通すなんて、ほんとにわたしは馬鹿な、淺はかな、恥知らずだつたわ！」

彼女は自分の安樂椅子にぐつたりと凭れて、兩手で顏をかくした。

ちやうどそのとき、左手の隣りの部屋に集まつてゐた、モークロエの娘たちの合唱の聲が聞こえて來た、——陽氣な踊りの歌であつた。

「まるでソドムだ！」不意にヴルブレフスキイが吼えるやうにいつた、「おい亭主、恥知らずのお轉婆連を追ひ出してしまへ！」

亭主はすぐに部屋へ入つて來た。彼は叫び聲を聞いて、きつと客人たちが喧嘩を始めたのだらうと想像しながら、かなり前から物好きにも戸口のところから覗いてゐたのであつた。

「何だつてそんなにどなるんだえ？　喉がやぶけてしまわあ？」彼はヴルブレフスキイに向かつて、何となく不可解な、亂暴な調子でかう言つた。

「畜生！」ヴルブレフスキイはどなりつけた。

「畜生だ？　ぢや、手めえは今さつき、一體どんな歌留多で勝負をしてたんだ？　おれの歌留多をかくしやがつて、手めえのいかさま札で勝負をしたんぢやねえか！　にせ歌留多の訴へをして、おれは貴様をシベリヤへ送ることもできるんだぞ。ええか？　なぜつて、それは、にせ紙幣と同じこんだから……」

彼は長椅子に近づいて、凭れるところと枕との間に指さきを突き入れて、封をしたままの一組の歌留多を取り出した。

「そら、これがおれのだ。まだ封をしたままだ！」彼はそれを高く差し上げて、部屋の中の一同に見せた、「向ふで立つて見てゐたら、こいつがおれのをかくしやがつて、自分のと摺り換へたんだ、――おまへなんか掏摸だ、紳士なものか！」

「僕もあつちの紳士が二度も抜き札したのを見ましたよ！」とカルガーノフが叫んだ。

「何て恥っさらしだらう！　ほんとに恥っさらしつたらありやしねえ！」グルーシェンカは手を拍ちながら叫んで、心から恥づかしくなつて顔を覆くした、「まあほんとに、こんな人間にならうとは！」

「僕もやはりさう思つたよ！」とミーチャがいつた。しかし、ミーチャが、この言葉を出すか出さないうちに、いきなりヴルブレフスキイはたまらなくなり、狂亂のやうになつて、グルーシェンカに向かつて、拳を固めて脅やかしながら、どなりつけた。

「この淫賣め！」

しかし彼が叫び終りもせぬうちに、ミーチャは矢庭に彼に跳びかかつて兩手でかかへて、宙に吊り上げたかと思ふと、さつさと右手の部屋にかつぎ込んだ。それはつい先きほど、彼が二人を連れ出した部屋であつた。

「僕はあいつを床の上へ拋り出して來ましたよ。」彼はすぐにまた引き返して來て、昂奮のあまり、息を切らし乍ら注進した、「惡黨め、手向ひなんかしやがつて！　でも、もう出ては來られまい！」

彼は開きになつてゐる扉を、片方だけ閉めて、もう一方の方を開け放しにしたまま、小柄の波蘭人に向かつて叫んだ。

「大人、いかがです。やはりあちらへいらつしたら？　切にお願ひ申し上げます！」

「旦那樣、ドミトリイさま。」とトリフォンは呼びかけた、「あなたが捲き上げられなすつたお金を、あいつから取り上げておしまひなさい。全く、あいつらが盜んだのも同然でございますから。」

「僕はあの五十留は取らうとは思はん。」とカルガーノフは不意に應へた。

「僕だつて、あの二百留は取りたくない。」とミーチャは叫んだ、「どんなことがあつてもそれは取りたくないんだ。まあ、せめてもの慰めに吳れてやるさ。」

「すてき、ミーチャ、出かしたわ、ミーチャ！」と、グルーシェンカは叫んだが、その叫び聲の中には、ひどく意地悪い調子がこもつてゐた。

小さい方の波蘭人は、眞つ赤になつて怒つてゐたが、それでも威嚴だけはいささかも失はずに、扉の方へ歩き出した。が、不意に立ちどまつて、グルーシェンカに向かつて言葉をかけた。

「若しあとから來る氣があつたら、一しよに行かう、いやだとあれば、おさらばだよ！」

かういつて、彼は憤りと野心とに燃えて息を切らしながら、勿體ぶつて扉の向ふへ入つて行つた。彼は氣骨のある男であつたから、あれだけの事があつた後なのに、なほまだ彼女が自分に從ふかも知れないといふ期待を失はなかつた、——それほどまでに己惚れが強かつたのである。ミーチャは彼の出て行つた後から、ドアをばたんと閉めてしまつた。

「鍵をかけて閉ぢこめちやいなさいよ、あいつらを。」とカルガーノフがいつた。

ところが、鍵が連中の方でかちりと鳴る音が聞こえて來た、彼らが自分で閉ぢこもつたのだ。

「うまく行つたわねえ！」と、グルーシェンカは、また憎らしさうに、無慈悲な調子で叫んだ、「ほんとに大出來だつたわね、まあ、當り前よ！」

VII

夢うつつ

つづいて、殆んど大亂痴氣とでもいふやうな、世界ぢゆうひつつくり返るやうな大盤振舞が、始まつた。グルーシェンカは大きな聲で誰よりも先きに酒を注文した。

「わたし、飲みたいのよこの前のときのやうに、ぐでんぐでんになるまで醉つ拂ひたいのよ。ねえ、ミーチャ、あなた覺えてるでせう、この前ここであなたと初めて知り合ひになつた時のことを覺えてるわねえ！」

ミーチャは『自分の幸福』がすぐ眼の前に來てゐることを知つて、まるで夢見心地であつた。尤も、グルーシェンカは休む間もなく彼を自分の側から追ひのけてゐた。

「あんた行つて愉快に遊びなさいよ。みんな踊つて騒ぐやうにいひつけたらいいわ、『煖爐も小屋も踊り出すくらゐ』、愉快に騒ぐやうにつてさ。丁度あの時のやうにね！」と彼女は叫びつづけてゐた。相手が、ひどく昂奮してゐた。そこで、ミーチャは言はれるままに命令を下さうと、あわてて駈け出し

合唱隊は次の部屋に控へてゐた。今までみんなの控へてゐた部屋は、それでなくとも少し狭かつた。そのうへに更紗のカーテンで二つに仕切られてゐて、そのカーテンの後ろに大きな寝臺が、ふつくらとした羽布團と、小山みたいに重なる、やはり更紗の枕を添へて、据ゑてあつた。この家の四つの『綺麗な』部屋にもそれぞれ寝臺が据ゑてあつた。グルーシェンカは戸口のすぐわきのところに席をかまへてゐた。ミーチャが彼女のために安樂椅子を持つて來てやつたからである。『あのとき』――初めて彼らがここで豪遊した時も、彼女は今とちやうど同じ位置に座を占めて、そこから踊りや歌を見たり聞いたりしたのであつた。集まつた娘たちも『あのとき』とすつかり同じであつた。猶太人の群も同じやうにヴァイオリンやチトラを持つてやつて來た。やがて待ちかねてゐた三頭馬車が、つひに酒や食料品を積み込んで乘り込んで來た。

ミーチャは忙しさうにあつちこつち走り廻つてゐた。何の緣故もない百姓や女房たちまで、とにかくいろんな種類の人が、見物するためにこの部屋に駈け込んで來た。彼らは眠つてゐたのをわざわざ起きて來て、一ケ月前に騒いだやうな素晴らしい饗宴を、もう一度見たいものと思つたのであつた。ミーチャは見覺えのある顔に出會ふと、一々挨拶したり、抱き合つたりしてゐた。彼はすぐに壜の口を抜いて、行きあたりばつたりに一々注いで廻つた。娘たちばかりはシャンパンをやたらに欲しがつたが、百姓たちはラム酒やコニャクや、特に熱くしたポンスをこの上なく好んだ。ミーチャは命令して、娘たちの全部に行き渡るやうにチョコレートを沸かし、更に、來た人が誰も彼もが、勝手に茶やポンスを飲むことができるやうに夜通しサモワルを三つ煮え立たせておくやうにといつた。

要するに、途方もない亂痴氣さわぎになつて來たのであるが、ミーチャは本來の面目を發揮するかのやうに、馬鹿さわぎになればなるほど、いよいよ元氣づいて來るのであつた。若しもそのとき百姓たちが彼に金の無心を言つたならば、彼はすぐに例の札束を引き出して、右左へそれを勘定もせずにばら撒いてやつたにちがひない。

恐らく、これを警戒するつもりだつたかも知れない、亭主のトリフォンは始終ミーチャにつきまとつて、彼のまはりをあつちこつちしてゐた。亭主はその晩、寢るなどといふ考へは念頭から捨ててしまつたらしく、酒もろくろく飲まずに、コップに一杯だけポンスを飲んだだけで、眼を皿のやうにしながら、彼獨特の恰好をして、ミーチャの利害を監視してゐた。彼は適當な時機を見はからつては、親切にやさしく、ミーチャを口說いて、『葉卷やライン葡萄酒』を與へないやうにさせたばかりではなく、特にこの前のときのやうに、飛んでもない金を百姓たちにやらせないやうにした。そのほか彼は、百姓の娘たちがリキュールを飲んだり、菓子を食つたりしてゐるのを見ては、非常に憤慨してゐた。

「あいつらは本當に虱の巢ですよ、ドミトリイさま、」と彼はついで、「一匹づつ片つぱしから蹴飛ばしてやつて、きつとあいつらに有りがたがらしてお目にかけますよ――まあ、それくらゐな値打ちのものですよ！」

ミーチャはまたアンドレイのことを思ひ出して、さつそくボンスを持つて行つてやるやうに命じた、『俺はさつきあの男に無禮なことをしたんだ。』彼は沈んだ元氣のないやうな聲で繰り返した。

＊ 形はギタアに似た樂器、線は金屬線。（譯者註）

カルガーノフは一向に飲まうともしないばかりか、初めのうちは娘たちの合唱もひどく氣に入らないらしかつた。ところが、シャンパンをたつた二杯しか飲まないうちに、急におそろしく元氣づいて來て、部屋中を歩き廻るやら、笑ふやら、歌や囃子を賞めちぎるやら、何もかも無上に賞めそやすのであつた。いささか聞こし召して上機嫌のマクシーモフは彼の傍をちよつとの間も離れようとしなかつた。グルーシェンカもだんだん醉ひがまはつて來たと見えて、カルガーノフの方を指さしながら、ミーチャに話しかけた。

「まあ、本當に可愛い子ね、わたし惚々としてよ！」

するとミーチャは有頂天になつて駈け出し、カルガーノフとマクシーモフに接吻するのであつた。おお、彼は多くのことを豫感したのであつた！　彼女はまだ何もそのことを言ひ出さなかつたし、寧ろわざと、話したいのを我慢してゐるらしかつたが、それでも時たま、優しさうな、情熱的な眼で彼を見ないでは居られなかつた。たうとう、彼女は辛抱し切れなくなつて、だしぬけに男の手をしつかりとつかまへて、自分の方へ強く引き寄せた。そのときは彼女は戸口のところの肘椅子に腰をかけてゐた。

「さつきの入り方つてあれは何です？　え？　あの入り方つたら！……わたし本當にびつくりしたわ。どうしてあんたはわたしをあの男に讓らうなんて氣になつたの？　本當にそんな氣になつたの？」

「僕はあなたの幸福を滅茶苦茶にしたくはなかつたのです！」ミーチャは滿足さうに、しどろもどろな調子で言つた。しかしグルーシェンカには彼の返答などは何の必要もなかつたのである。

「さあ、あつちへいらつしやい、……思ふ存分に騒ぎなさい。」彼女は又もや追ひのけた、「それに泣

くことはないわ、また呼んで上げますから。」

といはれて、彼はまた駈けて行つた。彼女はじつと歌に聞き入つたり、踊りを見てゐたが、その實、彼の動いて行く方へ視線をこらしてゐたのである。やがて、十五分もたつたかと思ふと、又もや彼女は彼を呼び寄せて、また彼女のところへ歸つて來させるのであつた。

「さあ、こつちへ來て、わたしの隣りへかけるといいわ。ねえ、一體わたしのことを昨日どうして聞いたの？　わたしがここへ來たつてことをどうして聞いたの？　眞つ先きに聞かしたのは誰なの？」

そこでミーチャはその一部始終を前後の連絡もなく、しどろもどろに話し始めた。その話しぶりが熱してはゐるものの、何だか妙でときどき苦い面をしたり、急に言葉をとぎらせたりした。

「何だつて、そんな苦い顏をするの？」と彼女は訊いた。

「別に何でもないんです、……あつちへ病人を一人のこして來たもんですから。若し、その病人が良くなるものなら、良くなつたと聞いたら、僕は自分の生命を十年だけその人にやつてもいいんです！」

「まあ、病人なんかどうだつていいわ！　ぢや、あんたは本當に明日にでも自殺するつもりだつたのね！　まあ、何て馬鹿な人でせう！　それもその理由つたらどうでせう？　わたし、あんたのやうな無分別な人が好きなのよ！」彼女は少し重くなつて來た舌をまはして言ふ、「ぢや、あんたはわたしのためだつたら、どんなことでもして下さるの？　えつ、本當に明日はピストル自殺をするつもりだつたの？　馬鹿ねえ！　でも、ちよつと待つてらつしやい。明日になつたら、わたしあんたにいいことを話して上げるかも知れないわ。……今日は駄目よ。明日よ。あんたは今日ききたいんでせう？　でも、わ

たし今日はいはない。……さあ、もういらつしやい。いらつしやい、陽氣に騒いでらつしやい。」

しかし、一度だけ彼女は何だか當惑したやうな、不安さうな樣子で彼を呼び寄せた。

「何だつてあんたはさう沈んでらつしやるの？　あんたの沈んでゐるのがよく分かるわ。……いいえ、ちやんと分かつてるのよ。」彼女は鋭く男の眼を見つめながら、附け加へた、「あなたは百姓たちに接吻したり、大きな聲を出したりしてゐるけれど、わたしにはちやんと分かつてるわ。さあ、陽氣になさいよ。わたしもこの通り陽氣にしてるんだから。あんたも陽氣でない譯は困るわ、……わたしの愛してる人がこの中に一人ゐるのよ、誰だかあてて御覽んなさい、……あら、まあ、御覽、わたしの可愛い坊ちやんが眠つてしまつたわ、可哀さうに、醉つ拂つたんだわ。」

彼女はカルガーノフのことをいつたのであつた。實際彼は醉つ拂つて、すぐに長椅子の上で眠り込んでしまつたのである。しかし、彼はただ酒のために寢込んでしまつたのではなくて、急に氣が何となく沈んで來たか、それとも彼のいつたやうに『退屈』になつたためであつた。彼は娘たちの歌のために、ひどく閉口させられた、といふのは、宴の酣になるとともに、歌そのものがだんだん淫りがましく、だらしなくなつて行つたからである。踊りもやはり同じことであつた。二人の娘が熊に扮裝すると、ステパニーダといふ元氣のいい娘が、手に棒をもつて、熊使ひの役を演じ、熊を一同に『御覽』に入れ始めた。

「もつと大きな眼をあいて、マリヤ。でないと棒でうつてやる！」

熊はひどく見苦しい恰好をして床の上に轉がつた。すると、そのぐるりのぎつしり押しつまつた男女

の群集から、笑ひ聲がどつとばかり起こつた。

「ええ、打つちやつとくといいわよ！　うつちやつとくといいわ！」グルーシェンカは幸福さうな表情を顏に浮かべて、勿體らしい調子で言ふ、「やつと、ああして一日の愉快な日を送らうといふんだもの。誰だつて嬉しいぢやないの？」

カルガーノフは汚いものに觸つたかのやうな顏をして見てゐた。

「これはみんな畜生わざだ、こんな國民性なんてありやしない！」彼は後退りしながら呟やいた、「こんな遊びは、夏の夜つぴて、お天道さまの番をするとかいふ、平民どもの春の遊びなんだ。」

中でも特に彼の氣に入らなかつたのは、踊に合はせて歌ふ、ある『新しい』陽氣な小唄であつた。それは一人の紳士が娘たちの中に入つて來て、娘たちが自分が好きかどうかと試したといふ筋のものであつた。

わしが好きかえ、どうぢやいな、
旦那は娘に訊きました。

しかし娘たちは旦那を好きになれないやうな氣がした。

旦那は散々たたくでしよ、
わたし旦那を好かないわ、

その後から一人のジプシイが通りかかる。彼もまた試して見る。

わしが好きかえどうぢやいな、
ジプシイが娘に訊きました。
しかしジプシイをも愛するわけにはゆかなかつた。
ジプシイは盗みをするでしよね、
そしたらわたしは悲しいわ。
引きつづいて大勢の人がやつて來て娘たちに訊いてみる、兵士までが試すのである。
わしが好きかえ、どうぢやいな、
兵隊さんが訊きました。
しかし兵士は冷笑を以て斥けられた。
兵隊さんは背嚢を、うんさこらさと背負ふのでしよ、
そしたらわたしは後ろから……
その次の一聯はひどく猥らなものであつた。ところが、それが全く傍若無人にうたはれて、聽衆はわつとばかりにはやし立てた。歌はたうとう商人で結末がついた。

わしが好きかえ、どうぢやろな、
娘に商人、きき ました。
ところが商人は娘たちからかなり惚れられてゐることが分かつた。といふのはかうである。
商人は儲けをするでしよね、
そしたらわたしは玉の輿。
カルガーノフは怒り出しさへもした。
「これはまるで昨日のと同じ歌だ。」彼は大聲でどなつた、「誰が一體こいつらにこんな歌を作つてやつたんだらう！　鐵道の奴か猶太人がやつて來て、娘たちに試して見りやいいんだ。きつと娘たちに口說き落されただらうに。」
かういつて彼は殆んど侮辱ともいふべきものを感じて、その場ですぐに、自分が退屈してしまつたと言ひ出したのであつた。そして長椅子の枕の上にごろりと横になると、そのまま眠りに落ちてしまつた。可愛らしい小さな顏はいささか蒼ざめて、長椅子の枕の上にぐつたりとなつてゐた。
「御覽なさい。何て可愛いんでせう。」グルーシェンカはミーチヤを傍へ引つぱつて行つて言つた、「さつきわたし、この人の髪を梳いてあげたの。ほんとに亞麻のやうに房々した毛……」
といつて、いかにもなつかしさうに身をかがめて、額に接吻するのであつた。カルガーノフは急に眼を見開いて、彼女の顏を見るとすぐに立ち上がつて、心配さうな樣子で訊ねた、「マクシーモフはどこ

にゐます?」

「まあ、あんな人に用事があるの?」とグルーシェンカは笑ひ出した、「まあ、ちよつとの間、わたしの傍にいらつしやいよミーチャ、走つて行つて、マクシーモフを探してやつて頂戴。」

聞いてみると、マシシーモフは時をりリキュールを注ぎに駈け出す位のもので、そのほか、娘たちのところから一歩も離れようともしなかつたとのことであつた。彼はチョコレートを二杯も飲み乾した。小さな顔は眞つ赤になり、鼻は紫いみになり、眼はうるみを帶びて、甘つたるくなつて來た。彼はかけつけて來て、これから『ちよいとした囃子に合せて』、木靴踊り(サボチョール)を踊るところだと告げた。

「わたくしは、こんな育ちのいい上つ方のなさるやうなダンスを、みんな子供の時分に教はつたのでございまして……」

「さあ、いらつしやい、この人と一しよにいらつしやい、ミーチャ、この人の踊り工合を、わたしここから見物してるわ。」

「ぢや、僕も、僕も見に行きますよ。」グルーシェンカが自分の傍に坐つてくれといふ乞ひを極めて無邪氣な態度で斥けながら、カルガーノフは叫んだ。そこで、彼らは一しよに見物に出かけた。マクシーモフは彼獨特の踊をやつて見せた。しかし、ミーチャのほかには誰一人として、それに感心するものはなかつた。その踊といふのは、ただ跳ねたり、飛んだり、足の先を蹴上げたりするだけのことであつた。そして蹴上げるときに、マクシーモフは、上向きになつた足の裏を掌で叩くのである。カルガーノフはまるつきりその踊が氣に入らなかつたが、ミーチャは踊り手に接吻までしてやつた。

「まあ、ありがたう、どうだ、疲れたらう、何だつて、こつちの方ばかり見てゐるんだえ? 菓子でもほしいのかえ? それとも、葉巻(シガー)でもほしいのか、え?」

「はい、紙巻を一本。」

「酒はどうだね?」

「わたしはあそこでリキュール……あなた、チョコレートのお菓子はございませんでせうか?」

「ああ、あるとも、そら、あのテーブルの上に山ほどある。好きなのを勝手に取るがいい。本當に可愛いらしい奴だなあ!」

「いいえ、わたしの申しますのはワニラ入りのでございまして……年寄りの口に合ひますのを……ひっひっ!」

「いや、ないよ、君。そんな變つたのは一つもないよ。」

「ちよつとお耳を!」不意に老人は身をかがめて、ミーチャの耳に囁やいた。

「それ、あの娘でございますがの。あの可愛らしいマリューシカ、ひ、ひ! いかがでございませうな。あなた樣に取りもつていただいて、あの娘と、何とかして心やすくさせて頂きたいもんで……」

「おや、おや、とんだ所望をしたもんだ。おい、出鱈目はいい加減にしろよ。」

「でも、私は誰にも惡いことはいたしません。」マクシーモフは悄然と呟やいた。

「ああ、よし、よし! でも、あの娘たちはここへ來て、ただ歌つたり、踊つたりしてるだけのことなんだ。いやまあ、どうだつていい! ちよつと待てよ……まあ、今しばらく飲んだり食つたりしてゐ

るがいい。時に、金はいらないか？」

「あとでまた、その……」マクシーモフは微笑んだ。

「ああ、よしよし……」

ミーチャの頭は燃えてゐるやうであつた。彼は玄關の方の木造の外廊下へ出て行つた。それは建物の内部を一まはりして、ちやうど中庭を見下すやうになつてゐた。清々しい空氣は彼を活々させた。彼はただ一人、暗い片隅に佇つてゐたが、何を思つたのか、急に兩手で自分の頭をつかんだ。散り散りになつてゐる考へが急に一つにまとまり、さまざまな感覺も一つに融け合ひ、あらゆるものが光りを帶びて來たのである。ああ、何といふ怖ろしい、身ぶるひするやうな光りであらう！

「さうだ、若しも自殺するのなら、今でなくていつだらう？」かうした考へが彼の胸を掠めた、「あの拳銃（ピストル）を取りに行つて、ここへ持つてくる。この暗闇の中で、この汚ない隅つこで、身の始末をつけてしまふのだ。」殆んど一分間も彼は迷ひながら佇つてゐた。さきほど、彼がここへ飛んでくる途中では、彼は自分の犯した竊盜のための見苦しさに追ひ立てられてゐたのだ。それにあの血だ！……あの血？……しかし、彼にとつては、あの時の方が氣が樂だつた。ああ、ずつと樂だつた！　あの時にはもう何もかも鳧がついてゐたのだ。彼は女を失つた、女を人に讓つてしまつたのだ、女は彼にとつてはこの世にゐないも同じであつた、すでに消えてしまつたのだ、――ああ、わが身を滅ぼさうとする宣告もあの時は樂だつた。むしろ、彼にとつては必要缺くべからざるものであつた。なぜならば、彼にはもはやこの世に生きのこる理由が一つもなかつたからである。ところが、今はどうなのか？　果して、あの時と今

と同じであらうか？　今は少くとも、一つの怖るべき妖怪の片はついてしまつてゐる。あの『元の男』、まぎれもない、あの宿命的な男はあとかたもなく消え失せてしまつたのだ。怖ろしい妖怪は急に何かしら小つちやな、滑稽なものと變つてしまつた。たわいもなく寢室へ手でさげこまれて、錠を下ろされてしまつたのだ。もう決して歸つて來ることはない。グルーシェンカは恥づかしがつてゐる。そして、彼には今、彼女が誰を愛してゐるのか、はつきりと察しがついてゐるのだ。ああ、今の今こそ、生きてゆく値打があるのだ……然るに、彼には生きて行くことができない。どうしてもできないのだ。ああ、何といふ忌々しいことであらう。

「ああ、神樣、どうか垣根のところで倒れてゐる男を蘇らせて下さいまし！　この怖ろしい杯を持つて、わたしの傍を通りぬけて下さいまし！　ああ、神樣、わたしと同じやうな罪人のために、あなたは奇蹟を行はせられたではありませんか！　でも、どうだらう、若しあの爺さんが生きてゐたら、どうだらう？　ああ、その時こそ私は別の見苦しい恥辱をそそぎます。盜んだ金を返します、是非とも返してお目にかけます。命にかけても手に入れます、……そしたら、恥辱の痕はわたしの心のほかには、永久に殘らないで濟むのです！　しかし、やつぱりいけない、とても出來ない相談だ、淺はかな空想なんだ？　おお、何と忌々しいことなんだらう！」

とはいへ、彼の闇に佇む心の中には、やはり何となく明るい希望の光りが閃くのであつた。彼は急にその場を離れて、もとの部屋へ引き返した。――彼女のところへ、永久に彼の女王である彼女のところへ！　『たとひ汚辱の苦痛の中に居る時でも、あれの愛の一時間、一分間が、今後の全生涯にも價しな

いと言へるだらうか！』この奇怪な疑問が、だしぬけに彼の心を捉へた、『あれのところへ、さうだ、あれのとこへ行きさへすればいいんだ。あれの顔を見て、あれの聲を聞き、何一つ考へずに、一切のことを忘れてしまひさへすればいいんだ。ただ今夜ひと晩だけでもいい、一時間でもいい、一瞬間でもいいんだ？』

ちやうど彼が廊下から、玄關へ入らうとしたとき、彼は亭主のトリフォンに行き會つた。亭主は、何となく沈んで心配さうにしてゐたが、どうやら、自分を探しに來たと思はれた。

「どうしたんだえ、トリフォン？　おれをさがしに來たのかえ？」

「いいえ、ちがひますよ。」と亭主は急にまごついたらしく、「わたしが旦那をさがすなんて、そんな筈がないぢやありませんか？　ところで、旦那……旦那はどこにゐらつしやいました？」

「何だつてそんな憂鬱な顔をしてるんだ？　怒つてるんぢやないのか？　ちつと待てよ、すぐ寢さしてやるから、……一體、何時だね？」

「もう、三時にはなるでせう。若しかしたら三時すぎかも知れません。」

「もうやめる、もうやめるよ。」

「とんでもない、少しもかまひませんよ。どうぞ、思ふ存分に……」

「時に、あの男はどうしたかしら？」ミーチャはふと氣がかりになつて、娘たちの踊つてゐる部屋へ駈け込んだ。しかし、グルーシェンカは、もうそこにはゐなかつた。空いろの部屋にも、もうゐなかつた。カルガーノフがただひとり長椅子のうへで眠つてゐるだけであつた。ミーチャがそつとカーテンの

かげから覗いて見ると、——そこに女のゐるのが見えた。彼女は片隅にある箱の上に腰をかけて、片隅にゐる。前の方に身をかがめて、頭も手もぴつたり寢臺にくつつけて、誰にも聞かれないやうにと、一生懸命に咽び泣きを押しこらへながら、悲しげに泣いてゐるのであつた。ミーチャの姿が眼にとまると、彼女は自分の方へ手招きして、やがて彼が傍へ近づくと、その手を取つて固く握りしめた。

「ミーチャ、ミーチャ、わたしあの男を愛してたのよ。分かつてるでせう。この五年間といふもの、しよつちゆう愛しつづけてゐたのよ！　一體、あの人かしら、わたしが愛してたのは？　それとも、自分の恨みを愛してたのかしら？、いいえ、あの人です！　ああ、あの人です！　わたしが愛してたのは、ただ自分の恨み心だけで、あの人ではなかつたといふのは嘘なのよ。ミーチャ、わたしあのときは、やつと十七になつたばかりだつたわ、あの人はそれあ、わたしに親切にしてくれて、ほんとに陽氣だつたのよ。よくいつも歌を唄つてくれたものだわ、……でも、わたしのやうな馬鹿娘にはさう思はれたのかも知れないわねえ。……それにまあ、今ぢや全く打つて變つた人になつてゐるぢやないの？　顏も違つてゐれば、何から何まで違つてゐるんですもの。ほんとに知らない人かと思つたわ。わたし、チモフェイと一しよにここへ來る途々、一體どんな風に顏を合はせたらよいかしら、何の話をしたらいいかしら、お互ひにどんな風に顏を眺め合つたものかしら、とそんなことばかり考へてゐたのよ。胸のしびれるやうな思ひをしながら考へてたのよ。ところが、驚ろかせるぢやないの、來て見ると、あの人は泥水を、桶一ぱい浴びせかけるやうなことをわたしにするぢやありませんか。まるで小學校の先生か何かのやうな口のきき方をして、學者ぶつて、勿體ぶつて、それあ鹿爪らしい顏をしてるぢやないの。だからわた

し、開いた口がふさがらなくなつちやつたわ。口のききやうもなかつたわ。たつた一と言も。初めのうちはね、これはてつきり、あの大柄な波蘭人の前で話をするのが恥づかしいんだらうと思つてゐたの。わたし、じつと坐つたまま、あの人を見据ゑながら考へてたの、どうしたわけで、自分はこの人に一ことも口がきけないんだらうつて。あの人を悪くしたのはね、あの人のお主婦さんに違ひないんだわ、ね。わたしを棄てて、あの人は別の女と結婚したのよ。その女があの人を別人のやうに仕込んだに違ひないわ。ねえ、ミーチャ、ほんとにわたし、恥づかしいわ！　ああ、恥づかしい、一生涯わたし、恥づかしいわ！　ああ、呪ひたい、呪ひたい、ほんとにこの五年間を呪ひたい！」

かういつたかと思ふと、彼女はまた、さめざめと泣きくづれた。しかも、固くミーチャの手を握りしめて、放さうとさへもしなかつたのである。

「ミーチャ、なつかしいミーチャ、ちよつと待つて頂戴、わたし、あんたに一言だけ聞いて頂きたいことがあるの。」と囁やいて、ふつと顔をあげて彼を見た、「ねえ、一體、わたし誰を愛してたのか、分かつてて？　わたしの可愛いい人がたつた一人ここにゐるのよ。誰のことだか分かつて？　さあ、いつて御覧なさい。」

泣きはらした彼女の顔には、微笑みがうかんで、ほの暗い中に眼はかがやいてゐた。

「さつき一羽の鷹が部屋へ飛び込んで來たとき、わたしの心は急にゆるんでしまつたのよ。『馬鹿だね、お前は！　お前の愛してゐる人はこの人ぢやないか！』——と、私の心が急にかう囁やいたのよ。すると、あんたが入つて來たんで、急に何もかもが明るくなつたの。けれど、この人は何をあんなに怖れてるんだらう？　と、かう考へてね。ええ、本當にあんたは怖れてたわ。まるでびくびくしちやつて、口もろくにきけなかつたわ。あれはこの一座の連中を怖れてるんぢやない、とかうわたし考へたの。だつて、あんたが人を怖れるなんて、そんな筈がないんですもの。きつとわたしを怖れてるにちがひない、わたし一人を怖れてるのだ、とかう察したのよ。だから、フョーニャもあんたに話したでせう。このお馬鹿さんに話したでせう。わたしが窓からアリョーシャを呼びとめて、たつた一時間だけミーチェンカを愛したことがあるけれど、今は……ほかの者に愛を捧げるために出かけるのだつて、さういふことを。ねえ、ミーチャ、ミーチャ、どうして、わたしあんなに馬鹿だつたんでせう？　あんたを棄てて、ほかの男を愛しようとしたりなんかして。わたしを許して頂戴ね、ミーチャ？　許してくれるでせう、いけないの？　わたしを愛してくれる？　ねえ、わたしを愛してくれて？」

彼女は跳び上がつて、兩手で彼の肩を押へた。ミーチャは歡びのあまり、口もきけなかつた。そして彼女の眼を、彼女の微笑みを、彼女の顔をぢつと見つめながら、いきなり、しつかりと兩腕で彼女を抱きしめて、向ふ見ずに女に接吻した。

「ね、今まであなたを苦しめてたのを許して下さるでせう？　あなたを苦しめたのは、みな面あてのつもりだつたのよ。それから例のお爺さんにも、わざと氣ちがひのやうに、恨みを晴らしてやつたのよ、……いつかわたしの家で、御酒を召しあがつたとき、あんたが杯をこはしたことがあるでせう？　覺えてて？　わたし今日そのことを、ふつと思ひ出して、杯をこはしてみたり、『よごれたわしの心のために』飲んだのよ。ミーチャ、どうしてわたしに接吻してくれないの？　接吻を一度してくれたか

と思ふと、すぐに身を退いてしまつて、じつと顔を見たり、話に聞き入つたりしてるぢやないの？　何だつてわたしの話なんか聞くんです？　接吻して頂戴よ、強く接吻して頂戴、ええ、さうよ。愛してくれるといふんでしたら、これからどこまでも本當に愛して頂戴な！　わたし今から、あなたの奴隷になりますわ、奴隷になるのは愉快だわ。接吻して頂戴！　さあ、なぐつて頂戴、いぢめて頂戴、どんなことでも好きな目に合はして頂戴。……わたしが苦しみを受けるのは當然なことなのよ。ちよつと待つて頂戴、また後でね、わたしそんな目に遭はされるのはいや……」彼女は不意に彼をつきのけた。「あちらへ行らつしやい、ミーチャ、わたしも行つて飲むわ。わたし醉つ拂つて見たくなつたの、今すぐ醉つぱらつて踊りに行くわ。踊つてよ、踊つてよ！」

彼女は自分から飛びのいて、カーテンのかげから駈け出した。ミーチャはまるで醉つ拂ひのやうに、その後ろからついて行つた。

『さうだ、どうにでもなれ、——今どんなことが起こらうとも、おれはこの一瞬間のために、全世界でもくれてやる。』と彼はふと考へた。グルーシェンカはその言葉のやうに、なみなみとついだシャンパンをぐつと一いきに飲み乾して、すぐにすつかり醉つ拂つてしまつた。彼女は幸福さうな微笑みを顔にたたへて、さつきの安樂椅子に腰を下ろした。頬は熱くなり、唇は燃え、光り輝やく眼はうるみ、熱情的な眼は、人を招くかのやうに見えた。カルガーノフでさへも胸を何かにちくりと刺されたやうな感じがして、すぐに彼女の傍へ近よつたほどであつた。

「さつき、あんたが眠つてたときに、わたし接吻したのを知つてて？」と彼女はしどろもどろな調子

で言つた、「わたし、今こんなに、醉つ拂つちやつたのつたの？　ミーチャはどうして飲まないの？　なぜ飲まないのさ、ミーチャ？　わたし、こんなに醉つ拂つてるのに、あんたはちつとも飲まないのねえ。……」

「醉つ拂つてるよ！……こんなに醉つぱらつてるぢやありませんか、……あなたといふ人に醉つ拂つてるんですよ。さあ今度は酒に醉ひませうかな。」

彼はまた一杯飲み乾したが、——自分ながら不思議な氣がしたが、この最後の一杯で、すつかり醉つてしまつた。この時までは、まだ氣がたしかだつたことは覺えてゐたが、急に醉が廻つてしまつた。この瞬間から、まるで熱に浮かされたかのやうに、すべてのものが彼のまはりを回轉し始めた。彼は歩きながらも、笑つたり、誰彼なしに話しかけたりしたが、その實、自分では何をしてゐるのか少しも分かつた、『まるで、胸の中に熱い炭火があるやうだつた。』と後になつて彼は述懐してゐる。彼は彼女のそばにいく度となしに寄り添つて、彼女の顔をみつめ、彼女の話に耳を傾けたりしてゐた。……彼女はおそろしくおしやべりになり、誰彼なしに自分の傍へ呼び寄せた。いきなり、誰か、合唱隊の中の娘を呼び出して娘を傍へ坐らせると、接吻して放してやつたり、片手をさしのべて、十字を切つてやつたりした。もう一分もたつたら、彼女は泣き出すかも知れなかつた。彼女を一方ならず喜ばせたのは、彼女が『おぢいちやん』と呼んでゐるマクシーモフであつた。マクシーモフは絶えず駈け寄つて來ては、グルーシェンカの手や『可愛らしい指一つ一つ』を接吻してゐたが、つひには自分でも古い歌を歌つて、それに

合はせてまた別な踊りを踊り出した。特に次の歌の疊句のところでは、一しほ熱心に踊るのであつた。

豚のこどもは、ぶるるんるん
牛のこどもは、むぅむぅむぅ
家鴨のこどもは、くわぁ、くわぁ、くわぁ
鷲鳥のこどもはがぁがぁがぁ
牝鶏さんは玄關を氣取つて歩いていひました。
こっこっこっ、いひました。
あい、あい、ほんとにいひました！

「この人に何かやつて頂戴よ、ミーチャ。」とグルーシェンカがいつた、「何か惠んでやつて頂戴、この人は可哀さうな身の上なんですもの。ああ、ほんとに可哀さうな、辱づかしめられた人なのよ。……ねえ、ミーチャ、わたし修院へ入らうと思ふのよ。いいえ、きつといつか入るわ。今日アリョーシャがね、一生涯、忘れられないやうなことをわたしにいつてくれたの、……本當よ、……でも、今日は踊りませう。明日は修院へ行く身のうへなの、だけど今は踊りませうね。みなさん、今日はわたし踊りたくて仕樣がないのよ。なあに、かまふもんですか？　神さまは私たちを許して下さるわ。わたしが若し神樣だつたら、人間をみんな許してやるわ。『いとしい罪びとたちよ、今日からお前たちをみんな許してやる。』つてね、わたしこれから許しを乞ひに行くわ。『皆さん、どうか許して下さい、この愚かな女を

許して下さい。』つて。わたし本當に獣ですわ。わたしお祈りがしたいのよ。わたしも人泣かせをしましたからね。こんな罪深い女ですけれど、祈りたくなるんですよ。ミーチャ、あの人たちを勝手に踊らしておくといいのよ。止めさせないで。この世の人たちは誰でもいい人なんだわ。一人のこらず善人なのよ。この世の中つて、いい所なの。わたしたちこそよくないけれど、この世の中の人はみんないい、すべて正しいのですわ。善くて惡くて、惡くて善いのがわたしたちですわ……さあ、どんなものでせうね。わたし、あなた方にお聞きしたいの。皆さん、ここへ集まつて頂戴、わたし、お聞きしたいことがあるのよ。なぜわたしがこんなにいい人間なんでせうね？　わたしは、いい人間ぢやないかしら、とてもいい……さあ、一體なぜわたしこんなにいい人間なんでせうね、さあ。」

グルーシェンカはだんだん醉ひがまはつて、しどろもどろに言ふのであつた。そして、つひには、これから自分で踊るのだといひ出した。彼女は安樂椅子から立ち上がつてよろよろとよろめいた。

「ミーチャ、もうわたしに酒をすすめないで頂戴！——後生だから、もう注がないで頂戴！　お酒を頂くと、氣が落ちつかないんです。何もかもが、くるくるくるくるまはるんです。嫂嬸も何もかもぐるぐる廻はるんです。わたし踊りたくなつたわ。皆さんにわたしの踊りを見るやうに言つて頂戴、……わたし、立派にうまく踊つて見せるわ……」

彼女は本當に踊るつもりであつた。ポケットから白いバチスト麻のハンカチを取り出して、踊りの最中にそれを振るために、右手の指さきでその端をそつとつまんだ。ミーチャはやきもきし出した。娘たちは鳴りをしづめて、最初の合圖があつたら、すぐに踊り歌をうたひ出さうと待ちかまへてゐた。マク

シーモフはグルーシェンカが踊りたいといひ出したのを聞くと、金切り聲を立てて喜んで、歌をうたひながら、彼女の前を飛びまはり始めてゐた。

あんよは細いが、お腹はぽこぽん、
尻尾はくるりと曲がつてる。

しかし、グルーシェンカはハンカチを振つて彼を追ひのけてしまつた。

「しっ！　ね、なぜみんな來ないの、ミーチャ。みんなに來るやうに言つて頂戴よ、……見物に來るやうにね。閉めだしたあの人たちにも來るやうに言つて頂戴、……何だつてあの人たちを閉め出しちやつたの？　わたしがこれから踊るんだつて言つて頂戴よ。あの人たちにも見せてやるといいわ、わたしの踊るところを……」

ミーチャは醉つた元氣で、威勢よく、錠の下りてゐる戸口に近づき、二人の波蘭人に向かつて、こつこつと拳固でドアをたたき始めた。

「おい、おい。君、……ボドヴィソツキイ連中。出て來ないかえ、あのひとが踊るんだよ、君たちにも來いとさ。」

「Laidak!（ライダーク）馬鹿」と返事の代りに、一方の誰かがどなつた。

「そんなら手めえは Polladak（ポールドライダーク）大馬鹿だ！　けちな惡黨さ、まあさうだ。」

「波蘭の惡口はやめた方がいいでせう。」と、カルガーノフは鹿爪らしい調子で言つたが、彼もまた自分でも始末にならないほど醉つてゐた。

「默つてろよ、坊や！　僕があいつに惡黨といつたからつて、何もそれは波蘭全體をさしていつたわけぢやないんだから。あの馬鹿（ライダーク）一人で、波蘭ができてるわけぢやないんだからな。まあ、默つて、菓子でも食べておいでよ、可愛らしい坊や！」

「ああ、何といふ人たちだらう！　まるで、あの人たちが人間でないみたいに。どうして仲直りしようとしないんだらうねえ？」とグルーシェンカは言ひながら、前へ出て踊り出した。

すると合唱隊が一せいに聲を張りあげた。『ああ、そなたよ、わが玄關（セーニ）、ああ、わが玄關（セーニ）！」グルーシェンカは首をそらして、唇を半ば開けて、微笑みながらハンカチを振らうとしたが、急にひどくよろめいたかと思ふと、そのまま部屋の眞ん中に突つ立つたまま、何だか途方に暮れたやうな顏をした。

「弱つて、……」と彼女は苦しさうな聲でいつた、「許して頂戴ね、……力が拔けちやつて、とても踊れないわ、……すみませんわねえ……」

彼女は合唱隊の方を向いて頭を下げたのち、四方へ眼をくばりながら同じく挨拶をし始めた。

「どうもすみませんわ、……御免なさいね……」

「お酒が過ぎたのね、奥さま。お酒がすぎたのね、やさしい奥さま。」口々にかういふのが聞こえた。

「奥さまはたんと召し上がつたんでございますよ。」とマクシーモフは娘たちに說明しながら、くすくす笑つてゐた。

「ミーチャ、わたしを連れてつて頂戴、……あちらへ連れてつて頂戴、ミーチャ。」とグルーシェンカ

は力なく言つた。

ミーチャは飛びつくやうに駈け寄つて、兩腕で抱き上げ、この大切な獲物を捧げて、カーテンのかげへ駈け込んだ。

『さあ、もう僕は歸らう。』とカルガーノフは考へて、空いろの部屋を出て行きしなに、開きになつてゐるドアを兩方とも閉めてしまつた。が、大廣間の方の騷ぎはなかなか止みさうもなく、なほ一そう烈しくなつて行つた。ミーチャは寢臺のうへに、グルーシェンカを寢かせて、その唇に口づけした。

「わたしにさはるのはよして頂戴、……」と彼女は哀願するやうに囁やいて、「わたしあなたのものになるまで、どうか觸らないで頂戴な、……さつきは、あなたのものだと言ふには言ひましたけれど、まだ觸つちやいや、……ね、許して頂戴、……駄目よ、あの人たちのゐるところでは、あの人たちの傍では、いやよ。あの男がゐるんだもの。ここは穢らはしい……」

「僕、あんたのいふ通りにする！　そのことはもう考へない、……あんたを神さまのやうに崇める！」とミーチャは囁やいた、「うん、ここは全く穢らはしい、いやなところだ！」

かうはいつたが、彼は依然として彼女を抱擁したまま、寢臺の側の床に跪いた。

「わたし、ちやんと分かつてるわ。あなたは猥らな方だけれど、心の中は綺麗な人ね。」とグルーシェンカは重い舌をまはしながら、やつとのことで言つた、「何でもこのことは、さつぱりさせなければならないのよ。……今後はきつと後ろ暗いことのないやうにしませうね、……わたしたちは潔白な人間になつて、善人になりませうね。……わたしを連れてつて頂

戴、遠いところへ連れてつて頂戴。よくつて、……わたしここにゐるのは厭やなの。どこか遠い、遠いところに連れてつて頂戴……」

「ああ、いいとも、いいとも、きつと連れて行くよ、前を連れて高飛びしよう、……ああ、あの血のことが分かりさへしなかつたら、自分の一生をこのたつた一年と取りかへしてもいいんだからなあ！」

「血つて何のこと？」グルーシェンカは狐につままれたやうになつて訊き返した。

「何でもないよ！」とミーチャは齒ぎしりした、「グルーシェンカ、あんたは潔白になりたいといつたけれど、僕は泥棒なんだよ。おれはカーチカの金を盜んだんだ、……何て恥さらしだらう。ああ、見つともない！」

「カーチカの金つて、あのお嬢さんの？　いいえ、あんたは盜つたりなんかはしないわ。わたしのお金を持つて行つて返したらいいわ、……何だつてそんなに大仰にいふの？　もうわたしのものは全部あんたのものよ。お金なんか何でもないぢやないの？　どつちみち、みんな使つてしまふんぢやないの？……わたしたちみたいな者は、金を使ふやうにできてるんだわ、……でも、どつかへ行つて畑でも作る方がましかも知れないわ。わたし土にこの手で十字が切りたいの。働かなくてはならないわ、ね、さうでせう？　アリョーシャもさうしろつて言つたわ。わたしね、あなたの戀人になりたくないの。わたしあんたの貞淑なおかみさんになりたいの。あんたのために働きたいの。さあ、これからお嬢さんのところへ、一しよに出かけて行つて、頭を下げてあやまりませう、その上で出發し

ようぢやないの。若し許してくれなかつたら、それならそれで、かまはずに、やはり立ちませう。さあ、お嬢さんのところへお金を持つて行らつしやい。そしてわたしを可愛がつて頂戴、……あの女を可愛がつちや厭やよ、——もうあの女を愛したりなんかしないで頂戴。若しあの女を愛したりするやうなことがあると、わたしあの女の兩方の眼を針で潰してやるわ。」

「君を、君ひとりだけを可愛がるよ、たとひシベリヤへ行つてでも可愛がるよ……」

「何だつてシベリヤへ？　まあ、かまはないわ。あんたが好きなら、どこだつて同じことだわ、……働きませうね、……シベリヤへ行くと雪があるのね、……わたし雪のうへを乘りまはすのが好きなの、……鈴のついてる橇に限るけど、……あら、鈴が鳴つてるわ、……どこであんな鈴が鳴つてるのかしら、……誰か來るのかしら、……あれ、もう鳴らなくなつた。」

彼女は力がなくなつて眼をとぢた。するとほんの一分間ほどうとうとしたらしかつた。鈴はたしかに遠いどこかで鳴つてゐたが、急にやんでしまつた。ミーチャは女の胸に頭をもたせてゐた。彼は鈴の音がやんだことにも氣がつかず、それに、急に歌の聲もやんで、歌の聲や醉ひどれの聲の代りに、いつの間にか死のやうな靜寂が家ぢゆうに漲つてゐたことにも氣がつかなかつた。グルーシェンカは眼をあけた。

「あら、わたし眠つてたのかしら？　さう……鈴が鳴つてゐたのね、わたし眠つて、夢を見てゐたんだわ、わたし橇に乘つて、雪の中を走つてゐたのよ、……鈴が鳴つて、わたし、うとうとしてゐるとこ ろなの。好きな人と、あんたと一しよだつたわ。どこか、遠い、遠いところを……、そして、あんたを

抱きしめて接吻してゐたの、あんたにぴつたりと寄り添つてゐたの。何だか、わたし寒かつたわ、そして、雪は光つてゐるし……ねえ、夜中に雪が光つてゐたとすると、月が出てゐたのね、何だか、わたしのゐたのはこの世の中ぢやなかつたらしいわ、眼がさめて見ると、いい人がそばにゐるぢやないの、まあ、何ていいでせう……」

「そばにゐるよ、」と、ミーチャは彼女の着物や胸や兩手に接吻しながらや呟いた。

ところが、不意に何だか妙な氣がして來た。彼女は眞つ直ぐに前の方を見据ゑてゐる、しかも、自分の方を、——自分の顏を見てゐるのではなく、彼の頭のむかふの方を、しげしげと、不思議なほど、瞬きもせずに、じつと見つめてゐる——といふやうな氣がしたのである。彼女の顏に不意に、愕ろき、といふよりも恐怖に近いものが現はれてゐた。

「ミーチャ、誰なの、あれは、あそこからこつちを覗いてゐるのは？」いきなり彼女は囁やいた。

ミーチャはひよいと振り向いた。見ると、たしかに誰かがカーテンを押しわけて、こちらを覗いてゐるらしい、しかも、一人ではないらしかつた。彼は跳びあがつて、覗いてゐる者の方へつかつかと歩いて行つた。

「こちらへ、どうぞこちらへ。」あまり高くはないが、しつかりした、押しつけがましい口調で、誰かが聲をかけた。

ミーチャはカーテンのかげから出たかと思ふと、その場にじつと立ちすくんでしまつた。部屋ぢゆう人で一ぱいになつてゐたが、それはさつきの人たちではなく、まるで新顏であつた。さつと背筋に寒け

がした。彼は身ぶるひした。一瞬の間に、これらの人たちをすつかり見分けてしまつたからである。あの、外套を着て、徽章のついた帽子をかぶつてゐる背の高い、むつちり肥つた老人は――あれは郡警察署長のミハイル・マカールイッチではないか。それに、あの『肺病やみのやうな』、『いつもあんなにびかぴかに磨いた靴をはいた』、小綺麗な風をした粋な男は――あれは副検事。『この男は四百留もする測時器を持つてゐて、よく見せびらかしたものだ。』それにあの、眼鏡をかけた、小柄な若造はミーチャは苗字だけは忘れてゐたが、人間はよく知つてゐる。會つたことがある。あれは『法律學校を』ついこのごろ出たばかりの判事だ、豫審判事。また、あれなるは、警部マヴリキイ・マヴリキッチ、これはもうよく知つてゐて、知合ひの仲。さて、また、あの、紋章をつけた人たち、あれは一體、何しに來たんだ？　それにまたどこかの百姓風情が二人。またあの戸口のところにはカルガーノフと、トリフォンと……。

「皆さん、何ですね、皆さん？」とミーチャは言ひかけたが、急に夢中になつて、我を忘れたかのやうに、大音聲をはりあげて、あらんかぎりの聲を出して叫ぶのであつた。

「分かり、ました！」

眼鏡をかけた青年はいきなり前へ進み出して、ミーチャのそばへ近づくと、押し出しはよかつたが、いくらかあわててゐるらしく、口を切つた。

「わたしたちはあなたに……つまり、こちらへおいでを願ひたいのです、まあ、こちらへ、この長椅子のところへ……。是非ともお話せねばならん緊急の用事がありますので。」

「老人だね！」とミーチャはのぼせあがつて叫んだ、「老人とその血でせう！……分かり、ました！」といつて、力が盡きたらしく、まるで倒れるやうに、わきにあつた椅子にどつかと腰をおろした。

「分かるか！　分かつたか！　父親殺しの兇漢、年老いた貴様の父親の血潮が、貴様のうしろで喚いて居るではないか！」老署長はミーチャの方へ接近しながら、いきなり怒號し出した。

彼は夢中になり、顔を眞つ赤にして、からだ中、ぶるぶる慄はしてゐた。

「それぢや駄目ですよ！」と小柄な青年が叫んだ、「ミハイルさん、ミハイルさん！　それぢやあんまりですよ、ちがひますでございますよ！……どうか、わたし一人に話さして下さいまし。あなたがそんな亂暴なことをなさらうとは、夢にも思ひませんでした……」

「しかし、これは夢中ぢやありませんか、皆さん、まるで夢中ですよ！」と署長は叫んだ、「まあ、この男を御覽なさい、夜ふけに、醉つ拂つて、蓮つ葉な女と一しよに、自分の父親の血を洗ひもせんで……正氣ぢやない、正氣の沙汰ぢやあない！」

「一生のお願ひですから、このたびは、ねえ、ミハイルさんあなたの感情を抑へて下さいませんか。」と副檢事は老人に向かつて早口に囁やいた、「さもないと、私はやむを得ず非常手段を……」

が、小柄な判事は最後まで言ひ切らせなかつた。彼はミーチャの方を向いて、しつかりした大きな聲で、重々しく述べるのであつた。

「豫備中尉カラマゾフ殿、わたくしはあなたが、今晩おこつたあなたの御親父フョードル・パーヴロキッチ・カラマゾフ氏殺害事件の加害者として告發されてゐる事實を、職責上、申し上げなければなり

ません。」

彼はもつと何か言つたが、副檢事も何か口を出したらしかつた。しかし、ミーチャは相手の言葉を聞いたとはいへ、もう何が何やら呑み込めなかつた。彼は猛々しい眼つきで、一同を見まはしてゐるばかりであつた……。

第九篇

豫審

I

官吏ペルホーチン出世のいとぐち

モローゾワの家の固くとざされた門を、力まかせにたたいてゐるところで、一先づ打ち切りにしておいたピヨートル・ペルホーチンは、勿論、つひに目的を達したのである。二時間まへにすつかり膽を冷やさせられて、今なほ昂奮し、『物思ひ』に沈んで、床について寢まうともしないでゐたフョーニャは、今また猛烈に門を敲く音を聞きつけると、殆んどヒステリイを起こさんばかりに度膽を抜かれてしまつた。彼女には、またドミトリイが門を敲いてゐるのだなといふ氣がした。（そのくせ彼が馬車に乘つてゆくところを、自分の眼で見てゐたのであるが）、といふのは、あの男をおいては、誰にもあんなに亂暴な敲き方は、ようしないからである。彼女は——すでに眼をさまして戸を敲く人の方へ出かけようと

してゐた門番のところへまつしぐらに駈けつけて、どうか入れないでくれと哀願しにかかつた。ところが、門番は早くも敵いてゐる人に聲をかけて、相手の名と、相手が極めて重大な問題について、フェドーシャ・マルコヴナ（フョードーニャ）に會ひたがつてゐる由を聞きつけると、つひに門をあけてやることにした。彼はまた例の臺所へ通されたが、その際、フェドーシャ・マルコヴナは、『何だか胡散くさい』と思つたので、ペルホーチンに對して、門番をも中へ入れてやつてくれと頼んだ。ペルホーチンはいろんなことを根掘り葉掘り訊き出したが、すぐに話は最も肝腎なところへ落ちて行つた。すなはち、ミーチャがグルーシェンカをさがしに駈け出したとき、臼から杵を引つ摑んで行つたが、また戻つて來たときには、もう杵を持つてゐなくて、血だらけの手をしてゐたといふことであつた。

「そして、血がまだぽたぽた垂れてゐましてね、血が兩手からぽたぽた垂れてゐるぢやありませんか、それはそれは、垂れてゐるんですよ！」とフョーニャは叫んだが、どうやらこの怖ろしい事實を、自分の入り亂れた想像の中で作り上げたものらしかつた。ところが、ぽたぽた垂れてゐるところしか見なかつたが、ペルホーチンも血みどろな手は親しく見たばかりではなく、自分からその手を洗ふ手傳ひをしたくらゐであつた。ところで問題は、血まみれな手が乾いたといふことではなく、ミーチャは杵を持つてフョードルのところへ行つた、つまり、確かにフョードルのところへ行つたに相違ないのではあるまいか、ところで、どういふところから、そんな確かな結論を、下すことが出來るか？　といふことにかかつてゐた。この點については、ペルホーチンもあくまでも追究して行つた。結局は何もはつきりしたことを突きとめることが出來なかつたが、それにしても、ミーチャは親父のところへ行くよりほか、どこ

へも駈けて行く筈がない、從つて、そこで必らず何ごとか起こつたに相違ないといふ、殆んど確信に近いものを獲たのである。

「そしてあの人が戻つて來たとき、」と、フョーニャは昂奮しながら附け足した、「私も何から何まで白狀してしまひました。そして私は訊いたんでございますよ、どうして旦那樣、あなたのお手は兩方とも血まみれなんですのつて。すると、何でもこんな御返事でしたよ、これは人間の血だ、おれはたつたいま、人を殺して來たところだと、——すつかり私に白狀なすつたんでございますよ、すつかり私の前で後悔しましてね。かと思ふと、いきなり氣ちがひのやうになつて駈け出してしまひましたの。やがて私はじつと坐つたまま、考へ出しましたのですよ、一體、あの方は今、氣ちがひのやうになつて、どこへ駈けて行つたんだらう？　きつとモークロエへ行つて、あちらで奥さんを殺すつもりなのだと、かう考へました。そこで、奥さんをどうぞ殺さないで下さいとお願ひしようと思つて、わたしはさつそく家を出て、あの人の下宿へ駈けつけましてね、すると、ふつと眼にとまりました。プロトニコフの店さきにあの方がいよいよ出かけるところなんですよ、見ると、手にはもう血がついてゐないぢやありませんか。」（フョーニャはこれによく眼をとめて、後々までも覺えてゐた）。フョーニャの祖母にあたる老婆も、出來るだけ孫娘の供述を裏書した。ペルホーチンはそれからなほ何かのことを訊ねてから、入つて來た時よりも、なほ一そう昂奮して、不安の念に驅られながら家を出た。

今は眞つすぐにフョードルのところへ行つて、何か變つたことは起らなかつたか、若し起こつたとすれば、果してどんなことかを訊ねて動かすべからざる信念を獲たうへで、初めて郡警察署長のところへ

行くのが最も手近な、正しい順序のやうに思はれるであらう。ペルホーチンも、もうしつかりとさうすることに覺悟を決めてゐたのであつた。

しかし、夜は暗く、フョードルの家の門は固く閉されてゐる。またどんどん敲かなければならぬ。そのフョードルとは遠い知合ひである、——して見るとしたことは起こるまい。尤も、あの皮肉屋のフョードルは、明日になつたら、町へ出て、夜更けに知り合ひでもない官吏のペルホーチンがお前は誰かに殺されはしなかつたと訊くために、闖入して來たと、とんでもないことを觸れまはるに相違ない。醜態だ！　當のペルホーチンはこの世の中で何よりも醜態といふことを怖れてゐるのである。それにしても、彼をどんどん引きずつてゆく感情は力強く、彼は恨めしげに地團太ふんで、又しても自分を罵倒しながら、直ちに向ふも見ずに駈け出したが、目ざすところは新しい方向であり、もはやフョードルの家ではなく、ホフラーコワ夫人の家であつた。

彼は考へるのであつた。若しも夫人が『さつき、これこれの時刻に、ドミトリイに三千留といふ金をやつたか』といふ自分の質問に對して、否定的な答へをした場合には、早速、フョードルの家へは寄らずに、署長の家に出かけることにし、若し、さうでない場合には、何もかも明日まで一旦さしおいて、自宅へ歸ることにしよう。ここで、勿論、彼のやうな青年が、夜ふけの、殆んど十一時近くに、まるで知りもしない上流の婦人を起こし、——それも事によると床に就いて居るところを——今の狀況から見て驚ろくべき質問を發しようと決心したのは、おそらくフョードルのところへ行くよりも、もつともつと醜態を演ずるおそれがあると、直ちに誰にも考へられるであらう。しかも、極めて几帳面で、冷靜な

人でも、今と同じやうな場合に立ち至ると、時にはかやうな決心をとつたりするものである。ところで、當のペルホーチンはこの場合、もはや決して冷靜な人ではなくなつてゐたのである！　彼はその後、一生涯わすれもしなかつたが、いよいよ烈しく彼の心にみなぎる不安の念は、つひには苦痛の域に達して、意志に逆つてまでも彼を深みへ連れ込むのであつた。もとより、彼はなほ、この婦人のところをさして歩いてゐる自分を、途々、たえず罵つてはゐたが、『しまひまで、しまひまで、やり遂げて見せる』と齒ぎしりながら十度も繰り返し、遂に自分の意圖を實行し、——まさしく、やり遂げたのであつた。

彼がホフラーコワ夫人の家へ入つたのは、かつきり十一時であつた。庭へは實に早く通して貰へたが、『奥さまはもうお寢みか、それとも未だ起きておいでか?』といふ問ひに對しては、門番も『いつも大抵の時刻にはお寢みになります。』といふだけのことしか、正確な答へは出來なかつた。

「あちらの、上へおあがりになつて、取り次ぎを賴んで御覽なさいまし。お會ひになる氣がおありなら、お會ひになりませうし、その氣がなければ、——お會ひになりますまい。」

ペルホーチンは上へあがつたが、ここでちよつと厄介なことになつた。ボーイが取り次がうとせずに、つひには小間使を呼び出したりしたのである。ペルホーチンは懇ろに、しかも、しつこく、當地の官吏ペルホーチンが特別な事情があつて參つたが、若しそれほど重大な用事でもなかつたら、わざわざお伺ひするやうなことはしなかつたと、奥樣に取り次いでくれと小間使に賴んだ。「はつきりと、はつきりと、この通りの言葉で取り次いで下さい。」と彼は小間使に言ひ含めた。

小間使は立ち去つた。彼は玄關の部屋に殘つて待つてゐた。當のホフラーコワ夫人は未だ寢んでこそゐなかつたが、もう寢室へ入つてゐた。彼女は先ほどのミーチャの來訪によつて、すつかり頭の調子が狂つてしまひ、すでに、かういふ場合によく起る頭痛を、今夜も免かれることはできないと覺悟をきめてゐた。小間使の取り次ぎを聞いて、彼女は驚ろいて自分にとつては全く面識もない『土地の官吏』がかういふ時刻に思ひがけなく訊ねて來たといふことが一方ならず彼女の女らしい好奇心を刺戟したにも拘はらず、ひどくいらいらして、斷つてしまへと言ひつけた。

しかし、今度はペルホーチンも驛馬のやうに言ふことを肯かなかつた。面會謝絶だと聞くと、彼は並ならず執拗に、もう一度、取り次いでくれといひ、『私は非常に重大な用件でお伺ひしたのですから、若し今お會ひして下さらなかつたなら、御自分があとで殘念がるかも知れません。』といひ、『これをこのままの言葉で』傳へてくれるやうにと賴んだ。

『僕はもうあの時は、まるで山から身投げするやうな氣持であつた。』と、彼はあとで自ら物語つてゐる。

小間使はびつくりして、彼をまじまじと見つめてゐたが、もう一度、彼の言葉を取り次ぎに行つた。ホフラーコワ夫人は心を打たれて、ちよつと考へて、その人の見かけはどんな風であつたかと訊ねたところ、『とても、きちんとした身なりの、お若い大へん丁寧なお方でございましたよ』とのことであつた。ここで序でにちよつと斷つておくが、ペルホーチンは若いなかなかの美男子で、自分でもこのことをよく承知してゐた。ホフラーコワ夫人は彼に面會しようと決心した。夫人はもう部屋着を着て、ス

リッパを穿いてゐたが、その上に肩から黒いショールを羽織つた。『官吏』はつい今しがたミーチャが通されたと同じ客間へ通された。夫人は嚴しい、物問ひたげな風で、客のところへ出て來たが、お掛け下さいともいはずに、いきなり質問を始めた、「なに御用で?」

「奥さん、わたしがあなたの御迷惑も顧みずに、お伺ひしましたのは、お互ひに共通な知人、ドミトリイ・カラマゾフのことについてでございます。」と、ペルホーチンはいひかけたが、彼がこの言葉を口に出すか出さないうちに、不意に夫人の顔にはかなり強い焦躁の色があらはれた。夫人は殆んど金切り聲を出さんばかりに、憤然として彼の言葉を遮つた。

「一體、いつまで、いつまでわたしはあの怖ろしい男のために惱まされなければならないのでせう。」と夫人は激昂して叫んだ、「あなたに何の緣故もない婦人の家へ、こんな時刻に迷惑をかけに來るなんて、あんまりひどいぢやございませんか、あなた、……それにお話になることといへば、ここの、この客間へ、つい三時間ばかり前に、わたしを殺しにやつて來て、地團太を踏みながら出て行つた人のことぢやありませんか。相當の家へ來て、あんな出て行き方をする人はありませんからね、あなた、あなたをわたしは訴へますよ、決してこのままでは濟ませませんよ。さあ、すぐに出て行つて下さい。……わたしは母親ですし、……わたしは、わたしは、……」

「殺しにですつて! ぢや、あの男はあなたまでも殺さうとしたんですか?」

＊ この小說には度々「黒いショール」が出てゐますが、これは千八百六十年代には大流行だつたものです。ドストイエフスキイはドレスデンで是非とも黒いショールを買ふやうにと私にしつこく言ひまして、店で私がショールを見せて貰ひましたところ、自ら黒いのを選び出してくれました。(夫人の註)

「ぢや、あの人はもう誰かを殺してしまつたんですか?」とホフラーコワ夫人は躍起になつて訊ねた。
「どうか、奥さん、お願ひですから、たつた三十秒だけわたしのいふことを聞いて下さいまし。あつさりと、一部始終説明いたしますから。」とペルホーチンはきつぱりと答へた、「今日の午後五時ごろ、ドミトリイ君は心易く、私から十留の金を借りてゆきました。あの人が一文の金を持つてゐなかつたことは、たしかに私もよく知つてゐます。ところが、あの人は、さやう、かれこれ二千留か三千留ぐらゐはありましたらうか、百留の札束をこれ見よがしに、手に握つて、わたしの處へやつて來たのです。おまけに、兩手も顏も一面に血だらけになつて、まるで狂人のやうな恰好をしてるぢやありませんか。一體、どこからそんなに大金を手に入れて來たのかと、わたしが訊きますと、あの人の答へるには、つい今しがたあなたのところから貰つて來たのだ、あなたが三千留の金を、金鑛へ行くといふ條件つきで呉れたのだ、といふんです……」
ホフラーコワ夫人の顏には、不意に唯ごとならぬ病的な昂奮の色が浮かんで來た。
「大變だ! あの人は自分の父親を殺したに違ひありません!」彼女は兩手を拍ちながら叫んだ、「わたしはあの男に決してお金なんぞやりはしません、決して! ああ、走つてらつしやい! 走つて!……もう一ことも言はないで下さい! あの老人を助けておやんなさい……あの人の父親のところへ走つてらつしやい、走つて!」
「失禮ですが、奥さん、それでは、あなたはあの男に金はおやりにならなかつたのですね? しつかり覺えてらつしやいますね、少しもお金をおやりにならなかつたのですね?」

「ええ、やりません、やりませんとも! わたしきつぱりと斷つてしまひました。だつて、あの人にはお金の値打が分からないのですもの。すると、あの人は氣ちがひのやうになつて、地團太を踏みながら走つて出て行きました。あの人はわたしに食つてかかりましたけれど、わたしびつくりして飛びのきましたの……そしてね、あなた、わたしはもう今更あなたに隱し立ていたしたくはございませんから申しますが、あの人はわたしに唾まで吐きかけたのでございますよ。本當に想像もつかないことぢやござ いませんか? それにしても、何だつてわたしたちはかうぼんやりして突つ立つてるんでせうね? あ あ、おかけ下さい、……御免なさいましね、わたしうございますわ、走つてらつしやい。あなたは今すぐ駈け出して、あの可哀さうな年寄りを怖ろしい死から救はなくてはなりません!」
「ですが、若しあの男がもう殺してしまつた後でしたら?」
「ああ、まあ、どうしませう、ほんとに! では、わたしたちはこれからどうすればよろしいのでせう? あなたはどうお思ひになりまして? わたしたちどうすればいいのでせう?」
こんなことをいひながらも、彼女はペルホーチンに腰をかけさせて、自分も向き合つて腰を下ろした。ペルホーチンは簡單に、しかも、かなりに明瞭に、事件のいきさつを、少くとも今日、彼自身が親しく目擊したことの一部分を夫人に話して聞かせ、更にまた、さきほどフョーニャを訪づれたことを物語り、杵の一件についても報告した。かうした詳細の物語は、昂奮した夫人を、少からず怖れさせたので、夫人は始終、叫び聲を立てたり、兩手で眼をかくしたりした……

「ね、あなた、わたしはかういふことをすつかり前から感じて居りましたの！　わたしは生れつき勘が早いんでございますよ。わたしの想像したことは、どんなことでもみんな事實となつて現はれてまゐります。わたしはあの怖ろしい男を見るたびに、この男はしまひにはわたしを殺さずにはおかないだらうと、心の中で何度かんがへたか分かりませんわ。ところが、果してこの通りの始末ぢやございませんか、……つまり、あの男がわたしを殺さないで、自分の父親を殺したのは、それこそほんとに神様の御手がわたしをお守り下すつたからに相違ありません。おまけにあの男もわたしを殺すことを恥ぢたわけがございます。それは現にこの客間で、大殉教者ワルワーラの舍利の入つてゐる聖像を、あの男の頸に自分でかけてやつたんですから……。まあ、わたしはあのとき、死といふもののすぐ近くまで寄つてゐたのですわねえ。だつて、わたしはあの人の傍へぴつたりと寄り添つて、あの男はわたしの方に頸を突き出したんですものね！　ねえ、ペルホーチンさん（失禮ですが、あなたはたしかペルホーチンさんと仰つしやいましたわね）、わたし、實は奇蹟といふものを信じて居りませんが、しかしね、あの聖像と、あのまぎれもない奇蹟とは今、——わたしの心をすつかり感動さしてしまひましたわ、わたし、もうどんなものでも、また信じられますわ。あなたはゾシマ長老のことをお聞きになりまして？……ですが、わたし自分で何を言つてるのか分かりませんわ、……でもまあどうでせう、あの男は聖像を頸にかけたまま、唾を吐きかけただけで、殺しはしませんでしたけれど、……そして、途轍もない方へ駈け出して行つてしまつたんですの！　けれど、わたしたちはどこへ行つたらよろしいでせう？　これから一體、どこへ行つたもんでせうかしら？　あなた、どうお考へに

なりまして？」

ペルホーチンは立ち上がつて、自分はこれから眞つすぐに警察署長のところへ行つて、一切の事情を殘らず話してしまふ、それから先は、向ふの勝手次第だと明言した。

「ああ、あの人は立派な、とても立派なお方です。あのミハイル・マカーロヰッチさんとはお近づきになつて居ります。必らず、ほんたうに、あの方のところへ行かなければなりません。まあ、あなたは何て機轉の利く方なんでせうね、ペルホーチンさん。それに、よくまあ、いろんなことをよくお考へになりましたわね。御承知のやうに、わたしなぞ、あなたの立場にゐたにしても、とてもそんなことは考へもつきませんわ！」

「それに、わたしも自分が署長とは實によく知り合つてゐる間柄ですから。」とペルホーチンは依然として、立つたままでいつたが、明らかに彼はどうかして一刻も早く、このひたむきな婦人から遁れたいと願つてゐたらしかつた。ところが、夫人はどうしても、暇を告げて、歸らせようとはしないのである。

「それに、あのね、あのね、」と彼女は口の中で呟やいた、「あなた、もう一度かへつてらしつて、聞かして下さいませんか、あそこで御覽になつたことや、お聞きになつたことや……どんなことが暴露されるか、……どんな風に裁判されるか、……どんな宣告を受けるか教へて下さいましね。ねえ、あなた、露西亞には死刑といふものは無いのでせうね？　とにかく、きつといらして下さいませんか、たとひ夜中の三時であつても、かまひませんから、四時でも、四時半でも、……わたしを起こすやうに言ひつ

けて下さいね、若し起きなかつたら、揺り起こすやうにも眠られさうにもありませんわ。でもね、わたし御一緒に出かけてよろしいでせうかしら?」

「い、いえ、どういたしまして。尤も、若しあなたが御自分でたつた三行だけ、あなたがドミトリイ君にお金を一文もおやりにならなかつたといふことをすぐ書いて下されば、ひよつとするとそれが役に立つかも知れません。……萬一の用意に……」

「きつと書きますわ!」ホフラーコワ夫人は大喜びで、事務卓の方へ飛んで行つた、「それにね、あなた、わたしはあなたがかういふ事件について、よく機轉がおききになつて、智慧が廻りなさるので、すつかり驚ろいてしまひましたわ。感心してしまひましたわ。あなたはこちらでお勤めになつてらつしやいますの?」あなたがこちらでお勤めだとはまあ、何より嬉しいことですわ……」

こんなことをいひながら、夫人はもう半切の書簡箋に、大きく次のやうに認めた。

『私は今まで一度たりとも、あの不仕合せなドミトリイ・カラマゾフ氏にお金を貸したこともなく、ただの一度たりとも、そのほかに金錢を貸したることもありませぬ、決して! この世にありとあらゆる聖きものにかけて、このことの誠を誓ひ申し上げます。

ホフラーコワ』

「さあ、出來ました!」と夫人はひよいとペルホーチンの方を振り向いた、「さあ、行つて、助けてやつて下さい。それはあなたとして、大きな手柄になりますわ!」

といつて、夫人は彼に三たび十字を切つてやつた。夫人は駈け出して、彼を玄關の部屋のところまで見送つた。

「わたし、ほんとにあなたにお禮を申して居りますわ! あなたが第一番にわたしのところへ來て下すつたといふことを、わたしが今、どんなに有難がつてゐるか、あなたは、よもやとお思ひになるでせうね。どうして今までにもつと早くお目にかからなかつたのかしら? これからも宅に遊びにいらつしやて下すつたら、わたしどんなに嬉しいでせう。それにあなたがこちらに勤めてゐらつしやると伺つて、どんなにわたし嬉しいか分りませんわ、……それにほんとに几帳面で、機轉のきくお方なんですものね……誰だつてあなたを尊敬する筈ですわ、誰だつてあなたを理解するに相違ありませんわ。若しわたしにできることがありましたら、何でもあなたのためにいたしますから、どうぞ……ああ、わたしはお若い方が大好きなんですわ! わたし、お若い方にすつかり惚れ込んでゐますのよ! 若い人たちは……今の苦難の露西亞の礎でございますわ、希望を全く背負つてゐる人たちですわ……おお、いらつして下さい、いらつして下さい!……」

しかし、ペルホーチンはもう駈け出してしまつてゐた。さもなくば、夫人はこんなに早く彼を手放しはしなかつたであらう。尤も、ホフラーコワ夫人は彼に極めて好ましい印象を與へ、むしろ、かうした穢らはしい事件に巻き込まれたといふ不安を、いくらか、やはらげてくれたほどであつた。分かりきつたことではあるが、人間の趣味といふものは、極めて種々雜多なものである。『それにあの人はちつとも婆さんじみてはゐない。』と彼はいい氣になつて考へた、『それどころか、僕はあの人をあそこの娘さ

んかと間違つたくらゐだ。』

當のホフラーコワ夫人の方にしても、わけもなくこの青年に魅了されてしまつてゐた、『何といふ如才のない几帳面な人だらう！　今どきの青年には珍らしい、しかも物ごしが立派で、押し出しもなかなかいい！　今どきの若い者は何一つできないつて、よく人がいふけれど、あの人を見せてやりたいものだ。』等々。こんな風で彼女はもうすつかりこの『怖ろしい出來事』をあつさりと忘れてしまつてさへゐた。やがて、やうやく床に入らうといふ時になつて、初めて、『自分がどんなに死といふものに接近してゐたか』といふことを思ひ出して、『ああ、怖ろしいことだ、怖ろしいことだ！』と言つた。

しかし、夫人はすぐにぐつすりと、快い眠りに落ちてしまつた。

それにしても、わたしは、こんな些末な細々したエピソードを若し今わたしが書いたやうな、この若い官吏と、まだそれほどに年をとつてゐない未亡人との風變りな奇遇が、後になつて、この精密で几帳面な青年の出世の緒となつたのでなければ、長々と物語る必要は更になかつた筈である。ところで、この話は今に至るまで、この町の人々が、驚異の念をいだいて思ひ出話にしてゐるのである。わたしも恐らくは、カラマゾフ兄弟についての長い物語を終つた曉には、これについて特に一言するかも知れない。

II

恐　惶

當地の郡警察署長ミハイル・マカーロヰッチ・マカーロフは、七等文官に轉じた休職の中佐で、やもめ暮らしの、立派な人物であつた。彼はこの町へやつと三年前に赴任して來たのであるが、主として、『社交界をまとめてゆく腕前がある』といふ理由で、今ではもう一般の人たちから好意をもつて迎へられてゐた。彼のところには來客の絶えたことがなく、また彼もお客なしでは過ごされないらしかつた。毎日々々、必らず誰かしらやつて來て、彼のところで食事をしてゐた。たとひ一人でも、また、ただ一人でも、お客がゐないと、彼は食卓にはつかなかつた。いろんな名目をつけて、時には、思ひもよらない名目さへも立てて、正式に招待して食事をすることも度々あつた。御馳走は、風雅な趣向はこらしてないまでも、分量を豊富に出された。パイもなかなか立派なものであり、酒の質においてはそれほど賞められたものではなかつたが、その代り、量においては實にふんだんに出された。應接室には球突臺があつて、その調度は實に見事なものであつた。つまり、周圍の壁には黒縁の額に入つた、英吉利産の駿馬の繪までかけてあつたのである。これは、知つての通り、獨身の人の撞球室には、どこにもなくては

ならない裝飾となつてゐる。彼の家では、たとひ人數は少くとも、毎晩のやうに歌留多の勝負が行はれた。しかも、この町の上流の連中が一せいに、夫人や若い令嬢たちを連れて、彼の家へ舞踏（ダンス）をするために集まつて來たことも、實に度々のことであつた。

ミハイルはやもめにはなつてゐたとはいふものの、やはり家庭生活をしてゐた。すでに大分まへに、後家になつた彼の娘が來てゐた。彼女は今はミハイルにとつて孫娘にあたる二人の令嬢の母であつた。令嬢たちはもう年頃で、學校の方も卒つてゐた。見かけも悪いといふ方ではなし、陽氣な性質でもあつたから、持參金などといふものが一文もないことを誰も彼もよくよく承知の上で、なほ且つ、この町の社交界のあらゆる青年たちは令嬢たちの祖父の家に引きつけられてゐた。ミハイルは事務にかけてはあまり手際がよくなかつたが、責任を果す點では、人にひけはとらなかつた。あけすけに言へば、彼はあまりにも無教育といへるほどの男で、自分の行政上の權限をもはつきり分かつてゐないくらゐの呑氣者であつた。彼は現代の政治的改革について、まるで意味を理解することができなかつたといふ程でもなかつたが、時にはずゐぶん見當はづれな解釋を下してゐた。これは何も特に無能だからといふのではなく、單に呑氣な性質から來ることであつた。即ち、つねに物事を篤と考へる餘裕がなかつたからである。

『わたしの性質はね、皆さん、文官向きといふよりは、むしろ軍隊向きなんです。』と彼は自分で自分のことをよくさういつてゐた。彼は農奴制度改革のはつきりした根本原則についてさへも、やはりこれといふ決定的な、確固たる概念をつかんでなかつたらしく、いはば、一年々々と、實際的に、心ならず

も、自分の知識を殖やして行きながら、やつと改革の根本問題を悟つたやうな譯であつた。それにしても、彼は地主なのであつた。

ペルホーチンは、きつと今夜もミハイルのところで、誰か來客に出會ふだらうと思つた。がそれが果して誰であるかといふことは分からなかつた。

ところが、この時、ミハイルのところには、折よく、檢事と、ペテルブルグの醫科大學を優等の成績で卒業した秀才で、このほどペテルブルグからこの町に來たばかりの若い地方廳づきの醫師ワルギンスキイとがゐて、『まぜ歌留多』をやつてゐた。檢事（實は副檢事）のイッポリット・キリーロヰッチは、少し風變りな人間で、まだ三十五といふ男盛りで、肺病にかかりかけてゐたが、一方では、實に肥つた、子供のない妻君を持つてゐた。彼は己惚れの強い、氣短かな性分であつたが、分別もあり、眞底は氣だてのよい男であつた。どうやら、彼の性格の缺點なるものは、眞價以上に自分を評價するところにあつたらしく見える。そのために、いつも落ちつきがないやうに見えるのであつた。そればかりではなく彼のうちには、或る高尚な藝術的ともいふべきあこがれがあり、たとへば心理を觀る眼とか、人間精神についての特別な知識とか、犯人とその犯罪とを見拔く特別な才能とか、そんなものを少からず自負してゐた。この意味で、彼は自分は職務の上で、いささか冷遇され、除け者にされてゐるのだと思ひ込んで、いつも上司が自分の價値を認め得ないのだ、そんなことを根にもつてゐた。氣の晴れやらぬ時には、いつそのこと、自分の椅子を棄てて、刑事訴訟專門の辯護士にでもなつてしまふと脅し文句を並べたりした。この思ひがけないカラマゾフの父親殺し事件は、彼の身をも心を

も奮ひ起たせたものであつた。彼はこれこそ『露西亞中に當然、知れわたるべき大事件だ』と考へたのである。しかし、これまた先きのことを言ふことになる。

さて隣りの部屋では、つい二箇月まへにペテルブルグからここへ赴任して來た町の若い豫審判事で、ニコライ・パルフェノヰッチ・ネリユードフといふ男が、二人の令嬢を相手に腰をかけて話をしてゐた。世間ではちやうど『犯罪』の行はれた夜に、かういふ人たちが申し合はせたやうに、行政官の家に集まつてゐたといふので、町の人たちは後で噂をしたり、怪しみさへもした、とはいへ、これは極めて單純な、全く自然に起つたことなのである。

イッポリットは前の日から妻君が齒を病んでゐたので、その呻き聲のきこえないところに逃げ出さなければならなかつた。醫者は性分として、晩になると、歌留多をしないではゐられなかつた。ニコライはもう三日も前から意を決して、この晩だしぬけにミハイルのところへ行かうとしてゐた。これは、ミハイルの長女のオリガにいきなり、『あなたの秘密を知つてゐますよ。今日はあなたの誕生日でせう。だけどわざとかくしてゐるんでせう。でないと舞踏會を開かなければならないから。』といつて、うまく驚ろかしてやらうと企んでゐた。そのほか彼女の年齢のことや、それを知られるのを怖れてゐることや、彼女の秘密を知つてゐて、みんなに吹聽してやるといふことや、いろいろまだ澤山の面白いことや、數々のふざけた冗談などをしようとも考へてゐた。まだ若々しくつて愛らしい彼は、かういふことにかけると、大へんな惡戲者であつた。この町の貴婦人たちは、彼を『惡戲者』と呼んでゐたが、彼はその名稱がひどく氣に入つてゐるらしかつた。しかも、彼は非常に立派な善い家柄に育つて、立派な教

育もあり、立派な感情も有つてゐた。尤も、相當の放蕩者ではあつたが、それも極めて無邪氣なもので、いつも禮儀だけは心得てゐた。見たところでは、背が低く、弱々しく、華奢な體格をしてゐた。彼のかぼそい、蒼白い指には、いつも並はづれに大きな指環がいくつか光つてゐた。彼が自分の職務を遂行するときには、彼は自分の地位、自分の義務を神聖視してゐるかのやうに、いつも並々ならず鹿爪らしい樣子になるのであつた。わけても彼は平民出の殺人犯人や、その他の犯人どもを訊問するときは、言ひくるめて呆然とさせ、彼らの胸には畏敬とまでは行かないまでも、とにかく一種の驚異の念を惹き起こさせる特殊な力量をもつてゐる。

ペルホーチンは署長の家に入ると、忽ち呆然自失してしまつた。彼は、そこに居る人々がみんな、よく承知してゐることを見てとつたのである。事實、彼らは歌留多を抛り出して、總立ちになつて評議してゐた。ニコライまでが、令嬢たちのところから飛んで來て、闘ふ時のやうな緊張した風をしてゐた。ペルホーチンがそこで耳にしたことは、フョードル老人がたしかに今晩自宅で殺され、おまけに金まで盜られたといふ怖るべきニュースであつた。これはたつた今、次のやうな事情で分かつて來たのである。

塀の傍で倒されたグリゴリイの妻マルファは、床にぐつすり寢込んでゐたので、そのまま朝まで眠る筈であつた。ところが、彼女は急に眼をさましたのである。それは疑ひもなく隣りの部屋に人事不省のまま横たはつてゐるスメルヂャコフの、怖ろしい癇癪の叫び聲に覺まされたのであつた。——いつも、その叫び聲のすぐあとにつづいて、癲癇の發作が起こるので、その度に、いつもマルファはその呻きごゑに脅や

かされて、病氣になるほど、おどおどするのであつた。どうしてもその呻き聲に慣れることはできなかつた。夢見心地で飛び起きると、殆んど夢中になつて、彼女はスメルヂャコフの小さな部屋にまつすぐに駈けつけた。ところが、そこは眞つ暗だ、ただ病人がおそろしく呻きながら、もがき始める音だけが聞こえるのだ。そこで、マルファは聲を立てて、自分の亭主を呼び始めたが、ふと自分が起きて來ると き、グリゴリイは寢臺の上に居なかつたんぢやなかつたかしらと考へた。彼女は寢臺の傍に駈け寄つて、又もや、その上を探つて見たが、果せるかな、寢床は空になつてゐた。して見ると、一體どこへ行つたんだらう？　彼女は入口の階段の方へ駈け出して行つて、階段のところから、びくびくしながら亭主を呼んで見た。返事は勿論なかつたが、その代り、彼女は夜の靜寂の中に、どこからか、遠く庭の方からであらうか、呻き聲のやうな聲がするのを耳にした。彼女は聽き耳を立てた。呻き聲はまたもや繰り返されたが、庭から聞こえて來たことだけは、はつきり分かつて來た。『ああ、まるでリザヴェータの時そつくりだ。』といふ考へが、彼女の調子の狂つた腦裡にちらついた。おづおづと階段を下りて、闇を透かして見ると、庭へ通ずる木戸が開け放しになつてゐた。『たしかに、うちの人があそこにゐる。』と考へて、木戸口の方へ近づいて行つた。といきなり、グリゴリイが弱々しい、怖ろしい呻き聲で、『マルファ、マルファ！』と自分の名を呼んでゐるのがはつきりと聞える。『神様！　間違ひのありません やうに！』とマルファは呟やいて、聲のする方へ走つて行つた。かうして彼女はグリゴリイを見つけ出したのであつた。しかし、見つけた場所は、彼が打ち倒された塀の傍ではなく、凡そ二十歩ほど離れたところであつた。これは後で分かつたことであるが、彼は氣がつくと、這つて行つたのである。恐らく

幾度となく、意識を失つたり、人事不省に陷つたりしながら、長いこと這ひ廻つてゐたのであらう。彼女はすぐにグリゴリイが、すつかり血まみれになつてゐるのに氣がついて、聲を限りに叫んだ。グリゴリイは聲低く、しどろもどろに呟やいた。

「殺したんだ、……親父を殺したんだ、……何をわめいてゐるんだ、馬鹿め、……走つてつて……誰か連れて來い……」

しかし、マルファは聞き分けようともせずに、叫びつづけてゐたが、ふつと見ると、主人の居間の窓が開け放しになつて、そこから明りがさしてゐるので、急にその方へ駈け寄つて、フョードルを呼び始めた。ところが、窓のところへ行つて中を覗いて見ると、怖ろしい光景が眼に入つたのである。主人は床の上に仰向けになつたまま、身じろぎもせずに倒れてゐる。薄いろの部屋着と、眞つ白いシャツは血まみれだ。テーブルの上の蠟燭は、フョードルの血と、動きもしない死顏を、鮮かに照らしてゐた。すでに、極度の恐怖に襲はれてゐたマルファは、窓の傍から飛びのいて、庭の外へと駈け出した。門の閂を外づす。一目散に裏口から隣りのマリヤのところへ駈けつける。母親も娘もそのときはもう眠つてゐたが、けたたましく、力まかせに鎧扉を敲く音と、マルファの叫び聲とに眼をさまして、窓のそばへと駈けつける。

マルファは金切聲で、とりとめもなく叫びながら、やつとのことで、要點だけを話して、加勢に來てくれと賴んだ。ちやうど、その晩は二人のところにルンペンのフォマーが泊つてゐた。

二人は忽ち彼を叩き起こして、合はせて三人の者が犯罪の現場へと駈けつけた。途中でマリヤは、さ

つき九時ごろ、隣りの庭から怖ろしい、絶え入るやうな近所となりへ響きわたるやうな聲が聞こえたのを想ひ出すことが出來た。――それは、もとより、まぎれもなくグリゴリイが、もう塀のうへに馬乘りになつてゐるドミトリイの足にしがみついて、『父親殺し!』と叫んだときの、その聲であつた。『誰か一人、わつと喚く人がありましたけれど、もうそれつきり、聞こえませんでした。』とマリアは走りながらいつた。

グリゴリイの倒れてゐるところに駈けつけると、二人の女はフォマーに手傳つてもらつて、老人を離れへ運び入れた。灯りをつけて見ると、スメルヂャコフはまだ落ちつかないで、自分の部屋の中でもがいてゐた。眼は斜に吊つて、口からは泡が流れてゐた。一同は酢をまぜた水でグリゴリイの頭を洗つてやつた。すると、その水のおかげで、彼はすつかり正氣づいて、すぐに『旦那は殺されたかね、どうかね?』と訊ねた。

それから二人の女とフォマーとは、主人のところへ出かけて行つたが、庭へ入つて見ると、今度は窓だけでなしに、フョードルがこの一週間といふもの、毎晩固く自分で扉を閉めて、グリゴリイでさへも、たとひいかなる理由があつても入れてくれなかつたのに、庭へ通ずる扉までがすつかり開け放されてゐるのであつた。その扉が今あいてゐるのを見ると、彼らは『後で何か厄介なことでも起こつては』と思つて、フョードルの方へ行くのを怖れ出した。やがて、彼らがグリゴリイのところへ戻つて來たとき、老人はすぐに署長のところへ走つて行くやうにと言ひつけた。そこでマリヤは走つて行つて、署長の家に集まつてゐる人たちを驚ろかせたのである。

それはペルホーチンの來訪に先だつことわづか五分であつた。ペルホーチンは今はただ自分一人の思ひつきや、推察をもつて出頭したばかりではなく、目撃者として、更に事實を物語つて、犯人があるかといふ一同の推察を、裏書きしたのである。(尤も、彼はこの瞬間まで、やはり心の底では、犯人についての推察を信ずることを拒んでゐた。)

全力をつくして活動することとなつた。副署長に直ちに四箇の證據物件を集めるやうにと委任して、一定の手續に從ひ、――ここにその規則を一々しるすことはやめておく――フョードルの家に入りこんで、現場の檢證にとりかかつた。まだ新米で、熱心な男である地方廳の醫師は殆んど自薦するやうにして、署長や檢事や豫審判事に同行することとなつた。

わたしは簡單に話すこととしよう。フョードルは頭を打ちくだかれて、全くこと切れてゐた。が、兇器は果して何であつたか? てつきり、それはグリゴリイが後でやられたものと同一の兇器に相違ない。彼らは應急手當を加へられたグリゴリイから、弱い途切れ途切れの聲ではあるが、丁度、前述の遭難事件に關するかなりまとまりのある話を聞きとつたので、すぐにその兇器をもさがし出すことができた。彼らはカンテラを持つて、塀の近くを探して、庭の小徑の最も眼につき易いところに落ちてゐる青銅の杵を發見した。フョードルが倒れてゐる部屋の中には、特にこれといふ亂れたところもなかつたが、彼らは衝立の蔭にある寢臺に近い床の上に、大きな厚ぼつたい紙の、役所型の大きな封筒の落ちてゐるのを拾ひ上げた。表には『金三千留、わが天使グルーシェンカへの手土産、若しわが許に來る心あらば。』と書いて、その少し下には、『わが小さき雛鳥へ』と附け加へてあつた。これは大方フョードル

が後で自分で書き添へたのであらう。封筒には赤い封蠟で三つの大きな封印が捺してあつた。しかも、その封筒は引き破られて、中は空になつてゐる。金は持つて行かれてゐる。彼らはまた、その封筒をしばつてあつた幅の狭い桃いろのリボンをも床のうへに發見した。

ペルホーチンの供述のうちに一つの事實は、檢事と豫審判事とに並々ならぬ印象を與へた。すなはち、ドミトリイは夜明け前に自殺するであらうといふ推察であつた。彼は自らさうすることに決心してゐて、ペルホーチンにもそのことを話し、相手の眼の前で拳銃を裝填して見せたり、遺書を書いて、ポケットにしまつたりしたといふ彼の意見である。ペルホーチンはそれでもやはり彼の言葉を信ずる氣になれなかつたので、誰かに話をして、その自殺を妨害するとおどかしたとき、ミーチャはせせら笑ひながら、『間に合はないだらう。』と答へたといふ。して見ると、さつそくモークロエへ行つて、犯人が實際に自殺を企てないとも限らないから、その前に捕縛してしまはなければならない。

「それは明瞭です、それは明瞭です！」と檢事はひどく昂奮して繰り返した、「それは、ああいふ兇漢たちがよくやることです。明日は自殺するんだからと、死ぬ前にうんと面白い目をして置かうといふ氣持ですよ。」彼が酒や食料を持つて行つたといふ話は、檢事を一しほ昂奮させた。

「ねえ、皆さん、商人オルスフィーエフを殺した、あの青年を覺えておいでですね。あれは千五百留を強奪すると、すぐ床屋へ行つて頭を分けた後、ろくに大事な金をかくさうともせずに、まるで前と同じやうに素手につかまないばかりの有樣で、女を買ひに行つたぢやありませんか。」

とはいへ、フョードルの家の家宅捜索や、その他の手續等々が一同を手間どらせた。かうしたことに

時間がかかつたので、まづ田舍に駐在してゐる巡査のマヴリーキイ・シメルツォフを一同より二時間ばかり前にモークロエへ遣はすことにした。彼は折よく、その前の朝、自分の俸給を受け取りに町へ來たのであつた。それはモークロエへ着いたら、少しも騒ぎを起こさないで、當局者の到着まで、怠らずに『犯人』を監視すると共に、證人や村の名主などを呼び集めておけといふのであつた。マヴリーキイは言はれた通りにした。彼は自分の昔の知り合ひであるトリフォン一人に事件の秘密を少しく話しただけで、何もかも incognito（密）にしておいた。ミーチャが自分をさがしてゐる宿の亭主に、暗い廊下で行き合つて、その顏つきにも言葉つきにも、一種の變化が生じたのに感づいたのは、ちやうどこの時刻に相當してゐた。かうして、ミーチャもまたほかの者も、誰一人として自分たちが監視されてゐるとは知らなかつたのである。ピストルの入つてゐる函は、もう疾うにトリフォンに盜まれて、安全な場所にかくされてゐた。

かくて、やつと朝の四時すぎになつて、夜が白みかけたころ、當路者たる郡警察署長と檢事と豫審判事とが、二臺の箱馬車と二臺のトロイカに分乘してやつて來た。醫師はフョードルの家に殘つてゐた。それは翌くる朝、殺された人の死體を解剖に附するためであつた。が、おもなる理由は、病氣にかかつてゐる下男スメルヂャコフの容體に興味を覺えたからである。『二日二晩もつづけさまに繰り返される發作は珍らしいですよ。これは研究の餘地があります。』彼はいま出やうなこんな猛烈な、長い癲癇の發作は珍らしいですよ。これは研究の餘地があります。』彼はいま出發しようとしてゐる仲間の人たちに、昂奮しながら言つたのだ。こちらは笑ひながら、その發見を祝した。このとき、醫師が極めて斷乎たる口調で、スメルヂャコフは朝までは壽命があるまいと附け加へた

ことを、檢事と豫審判事とはよく後々までも記憶してゐた。

今、長々と、しかも必要と思はれる説明を終つたから、私はいよいよ前篇でとめてゐた物語のつづきに歸らうと思ふ。

魂の試練の路　第一の試練

さて、ミーチャは腰をおろして、荒々しい眸で、居合はせた人たちを眺めてゐたが、自分に向かつてどんなことが言はれてゐるのかも分からなかつた。ふと、彼は立ち上がつて兩手を差し上げながら、聲高らかに叫んだ。

「わたしは罪がありません！　この血に對してわたしに罪はありません！　わたしの親父の血にたいしてわたしに罪はありません！……殺すつもりではゐましたけれど、しかし罪はありません。わたしではありません！」

ところが、ミーチャがこれだけのことを言ひ終るか終らないうちに、カーテンのかげからグルーシェンカが駈け出して、いきなり署長の足もとに身を投げ出した。

「それはわたしです、わたしです。この罰あたりです！　わたしが惡いんです！　わたしが惡いんです！」と、兩手を皆の方に伸ばしながら、涙を一ぱいにうかべて、人の心をかきむしるやうな聲で彼女は叫んだ。

「あの人が人殺しをしたのも、もとはわたしです。わたしがあの人を苦しめて殺させたのです！　わたしは死んだ可哀想な爺さんをも、つらあてに苦しめました。そしてこんなことになつてしまつたのです！　わたしの罪です。わたしが惡いんです。わたしがもとです。わたしが誰よりも先きに罪をつくつたのです。罪はわたしです！」

「さうだ、お前が惡いんだ！　お前が犯人の元兇だ！　お前は始末にならない墮落者だ！」と、兩手を皆の方よりも惡いんだ！」署長は片手でおどすやうな恰好をしながら喚き立てた、が、署長はすぐに手强く制せられた。檢事は兩手で彼に抱きつきさへもした。

「そんなことはまるで無鐵砲ですよ、ミハイルさん。」と彼は叫んだ、「あなたはまるで審理の邪魔をしてゐらつしやるのです、事件をぶちこはしていらつしやるのですよ……」と、彼は殆んど喘がんばかりであつた。

「非常、非常、非常手段をとるのです！」とニコライもやはりひどく昂奮して叫んだ、「さもないと、絶對的に不可能です……」

「わたしも一しよに裁判して下さい！」とグルーシェンカはやはり跪づいたまま、狂人のやうになつて叫びつづけた、「わたしたちを一しよに罰して下さい。わたしはもう今は、あの人と一しよなら、死刑でも喜んで受けます！」

「グルーシェンカ、お前はおれの命だ、おれの血だ、おれの神様だ！」ミーチャはいきなり彼女の傍に跪づいて、腕の中にしつかりと彼女を抱きしめた、「皆さん、この女のいふことを眞にうけないで下さい。」と彼は叫んだ、「この女には何の罪もありません、どんな血にも關係はないのです。何も罪はないのです！」

彼は、自分が五六人の人によつて、無理に彼女から引き離され、引きずられて行つたことや、彼女も急に連れ出されたことや、ふと我にかへつたとき、自分はもうテーブルに向かつて腰かけてゐたことなどを、後になつて思ひ出した。彼の後ろにも兩側にも、紋章をつけた人たちが立つてゐた。彼の眞向ひには、豫審判事のニコライが、テーブルを隔てて腰を下ろしてゐた。彼はテーブルの上に載つてゐるコップの水を少し飲むやうにと、しきりに彼にすすめて、「それを飲むと氣分がさつぱりしますよ。氣が落ちつきますよ。びくびくしないで下さい。御心配なさることはありません。」と、非常に丁寧につけ加へるのであつた。

ミーチャは（あとになつて思ひ出したことであるが）、不意に判事の大きな指輪に深い興味を感じた。一つは紫水晶で、もう一つは鮮黃色の透明な石で、實に美しい光澤を帶びてゐた。彼はこの指輪が、かういふ怖ろしい審問の時にさへ、たまらなくなるほど、彼の眼を惹いてゐたことを後々までも驚異の念をもつて思ひ浮かべるのであつた。彼は自分の境遇に何の關係もない指輪から、どういふわけか、一寸の間も眼を放すことも、忘れることもできなかつたのである。

ミーチャの左側、昨夜はマクシーモフが坐つてゐたところには、今は檢事が坐り、ミーチャの右側、

あのときグルーシェンカのゐたところには、紅い頬をした青年が、ぼろぼろになつた獵服のやうな背廣を着て、前にインク壺と紙をおいて控へてゐる。見ると、これは判事が連れて來た書記であつた。署長はそのとき、室の向ふ側の窓ちかく、カルガーノフの脇に立つてゐた。カルガーノフはやはりその窓に近い椅子に腰かけてゐた。

「水をお飲みなさい！」と判事はやさしい調子で十度目をいつた。

「飲みました、皆さん、飲みました、……しかし、……どうです、皆さん、わたしを壓しつぶして下さい、罰して下さい、わたしの運命を決めて下さい！」ミーチャはひどく据わつた、見開いた眼で、判事をみつめながら、叫んだ。

「それで、あなたはあなたの御親父のフョードル・パーヴロヴィッチの死に對しては罪はないと、たしかに斷言なさるのですね？」と判事は優しいながらも、押しつよく訊づねた。

「ありません！　ほかの血に對しては、ほかの老人の血に對しては罪はありますが、しかし、わたしはその親父の血にたいしては罪はありません。それどころか、わたしはそのために泣いてゐるのです！　わたしは殺しました、……けれど、その血のために、もう一つの、わたしに罪のない怖ろしい血の責任をもたなければならないのは、たまらないことです、……それは怖ろしい言ひがかりです。皆さん、わたしはまるで額を打ちのめされて、氣が遠くなつたやうです。しかし、誰が私の父親を殺してしまつたのでせう、誰が殺したんでせう？　若しわたしが殺さなかつたとしたら、一體、誰に殺すことができたのでせう？　不思議なことです、馬鹿々々しいことです、

あり得べからざることです？……」

「さうです、一體、誰に殺すことができたのでせう？」と判事はいひかけたが、檢事（實は副檢事であるが、わたしは簡單に檢事と呼ぶことにしよう）のイッポリットは判事と眼を見合はせて、ミーチャに向かつていひ出した。

「あなたは、あの年よりの下男のグリゴリイについては、そんなに心配なさることはありませんよ。ここでお知らせしますが、あの男は生きてゐます。正氣づいたのです。そして、あなたによつて加へられた傷は（彼自身並びにあなたの申立によると）、おそろしく重かつたにもかかはらず、少くとも醫師の報告によると、たしかに命を取りとめるさうです。」

「生きてる？　ぢや、あの男は生きてるんですね？」ミーチャは手を拍つて、いきなり叫んだ。彼の顏は輝やいた、「神樣、よくも罪人であり、惡黨であるわたしのために偉大な奇蹟を現はして下さいました。感謝いたします。さうです、さうです、それはわたしの祈りを聞いて下すつたのです。わたしは一晩ぢゆう祈つて居りました！……」

かういつて彼は三たび十字を切つた。彼は殆んど息もつまらんばかりであつた。

「ところで、そのグリゴリイから、われわれはあなたのことについて、非常に重大な申し立てを聞いたのです。それは……」と檢事がつづけようとした。が、ミーチャは不意に椅子から立ち上がつた。

「ちよつと、待つて下さい、皆さん、お願ひですから、たつた一分間だけ待つて下さい。わたしは彼女のところへ一走り行つて來ます！……」

「とんでもないことを！　今はどうしてもそんなことはできません！」ニコライは殆んど叫ばないばかりにいつて、やはり自分も席から跳び上がつた。胸に紋章をつけた人たちは、四方からミーチャをつかまへた。しかも、彼は自分から椅子に腰をかけた。

「ああ、實に殘念だ！　わたしはたつた一分間あれに會ひたかつたのです、……わたしはあれに知らしてやりたかつたのです！　夜つぴて、私の心の上に重く垂れ下がつて苦しめてゐたあの血が、もうきれいに洗ひおとされて、失くなつてしまつたと、そして私はもう人殺しではなくなつたのだと、あれに知らしてやりたかつたのです！」皆さん、あれは私の許嫁なのです！」彼は一同を見まはしながら、歡喜と敬虔の念に驅られて、いきなりかういつた、「ああ、皆さん、わたしはあなた方にお禮を申し上げます！　ああ、一瞬にして、あなた方はわたしを生き返らせて下さいました。新しい生命と、新しい心とを與へて下さいました！……あの老人は、……あの男はわたしを抱いて歩いてくれたのです。皆さん、わたしは三歳の赤ん坊のとき、あの男はいつもわたしを盥の中で洗つてくれたものです。みんなに見すてられたわたしにとつて、あの男は現在の父親のやうでございました……」

「それで、あなたは……」と判事はいひかかつてゐた。

「どうか、皆さん、どうか、もう一分間だけ許して下さい。」とミーチャはテーブルの上に兩肱をついて、手で顏をかくしながら遮つた、「ちよつと考へさせて下さい、皆さんちよつと息をつかせて下さい。あの一件がおそろしく私を戰慄させたのです、おそろしく、……人間といふものはそんなに面の皮の厚いものぢやありませんからね、皆さん！」

「もう少し水を飲んだらいいでせう……」ニコライは口の中で呟やいてゐた。

ミーチャは顔から兩手を離して、聲を立てて笑つた。彼の眸は物怖ぢしなかつた。彼はまるで一瞬間のうちに、すつかり人が變つたかのやうであつた。彼は又して も一座の誰彼と、——みんな前からの知り合ひであつたがまた同時に彼のすべての態度が變つた。彼は又してうであつた。たとひ前の日、何も起らなかつたときに、彼ら一同が交際場裡のどこかで、落ち合つたとしても、今の樣子と少しも變はりはなかつたであらう。序でに言つておくが、ミーチャもこの町へ來た頃は、署長の家で大へんに歡迎されたものであつたが、その後、殊に最近一ケ月ばかり、ミーチャは殆んど彼のところへ寄りつかなかつた。また署長の方でも、例へば、往來などでミーチャに出會つたときには、ひどく苦い顏をして、ただほんの儀禮のために會釋する位のものであつた。ミーチャはそれに充分に氣がついてゐた。檢事との交際はもつともつと疎遠であつた。尤も彼は、神經質で、空想的なその夫人のところへは禮儀正しく訪問した。が、一體、何のいはれがあつて訪問するのかといふことに至つては、自分でもてんで分からなかつた。夫人はいつも愛想よく彼を迎へ、どうしたわけか、つい近ごろまで彼に興味を寄せてゐたのである。彼は判事とはまだ知合になる折もなかつたが、一二度會つて話をしたことはあつた。しかも二度とも女の話であつた。

「ねえ、ニコライさん、あなたは實に敏腕な判事さんですね。どうもさう見えますよ、私には、」と不意にミーチャは愉快さうに笑ひ出した、「しかし、わたしは今あなたに加勢して上げませう。おお、皆さん、わたしは生きかへりました……わたしが皆さんにたいして、こんな單純に無遠慮な態度をとつて

も、どうか氣を惡くしないで下さい。正直に打ち明けて申しますと、わたしは少し醉つ拂つてゐるんです。ニコライさん、たしか、わたしは、……わたしの親戚のミウーソフの家で、あなたにお目にかかつたやうな氣がしますが……。皆さん、皆さん、わたしは何もあなた方と同等扱ひにしていただかうとは思ひません。もちろん、わたしはあなた方の前に、どういふ人間としておかれてをるかといふことは、よくよく承知をして居ります。ああ、無論、怖ろしい嫌疑が、……わたしの上にかかつてゐます、……若しも、グリゴリイがわたしに言ひがかりをつけたとすれば、……怖ろしい嫌疑です！　怖ろしいことだ、怖ろしいことだ！　わたしはよく分かつてゐます！　けれども、皆さん、わたしはこの事件については、ちやんと覺悟をきめてありますから、こんなことは直きに片づいてしまひませう。何しろ、皆さん、まあ聞いて下さい、聞いて下さい。わたしが無罪だと分かつたからには、すぐに鳧がつく筈です！　さうでせう！　さうぢやないでせうか？」

ミーチャは相手を全く自分の親しい友人とでも思ひ込んでゐるらしく、早口に、口數多く、神經質に、激情的な調子で立てつづけに、しやべり立てた。

「では、とにかくそのやうに一應書き留めませう、——あなたが御自分にかけられた嫌疑を絶對に否定なさるといふことをね。」とニコライは相手の心に徹するやうな調子でいつた。そして書記の方を振りかへつて、書き留めるべきことを聲低く口述した。

「書き留めるんですつて？　あなた方はそんなことを書き留めたいんですか？　よろしい、書き留めて下さい。充分に同意します。同意しませう、……ただ、……皆さん、……よござんすか、待つて下さ

い、待つて下さい、かう書き留めて下さい。『暴行についての有罪、哀れなる老人に重傷を負はせたる件については有罪。』とね。それから、わたしの内心に、自分の心の奥底に、もう一つのあるものがあつて、それについても、わたしは罪があります、――しかし、これはもう書き留める必要はありません（彼は不意に書記の方を振り向いた）、皆さん、これはすでに私の私生活です、従つて、これはあなた方には關係のないことです。つまり、これはわたしの哀心からの叫びです。……しかし、老父の殺害については、私に罪はありません。それは無暴な考へです！……全く無暴な考へです！……わたしは今、あなた方に證據をあげて、あなた方がすぐに得心なさるやうにして見せます、……あなた方はお笑ひになるでせう、……ねえ、皆さん、あなた方は御自分たちの嫌疑をお笑ひになるでせう！……」

「まあ、落ちついておいでなさい、ドミトリイさん。」と判事は自分の落ちついた態度によつて、ミーチャの昂奮を鎭めようとでもするかのやうに注意して、「わたしは審問をつづけるに先立つて、若しあなたが同意して返答して下さるならば、次の事實を……すなはちあなたは亡くなつた御親父のフョードルさんを愛してゐられなかつたといふこと、そしてあなたはあの方としじゆう喧嘩ばかりしておいでになつたといふこと、……それを承認なさるかどうか、お伺ひしたいのです。少くとも、ここで、十五分ばかり前に、殺すつもりでゐた、とまで仰つしやつたやうに記憶してゐます。『殺しはしなかつたが、殺すつもりではゐた。』と大きな聲であなたは仰しやいましたね。」

「大きな聲で、わたしがそんなことをいひましたか？　ああ、皆さん！　さうです、不幸にもわたしは父親を殺さうと思ひました、……

不幸にして、不幸にして！」

「さう思つた。なるほど。では、一體どういふ理由であなたは自分の親にたいして、そんな憎惡を感じたのです、それを說明して下さらないでせうか？」

「皆さん、何を說明するんです？」とミーチャは眼を伏せたまま、不機嫌に肩をそびやかした、「わたしは自分の感情をかくしたことはありません、このことは町ぢゆうの人がみんな知つてゐることです、――居酒屋の者もみんな承知のことです、――つい先だつても修院の、ゾシマ長老の庵室で申しました、……その日の晩には、私は父をなぐりつけて、殆んど殺しかけました。そしてそのうちまた來て殺してやると誓つたのです、皆の眼の前で。……ああ、さういふ證人ならいくらでもゐます！……わたしは、まる一ケ月間といふもの、大聲で、それを喚きつづけてゐましたから、誰だつてみんな承知のことです！……事實がちやんと眼の前にあるのですから、事實が言ふことをききません、事實が口をききます。けれども、皆さん、感情は……感情は全く別なものです。ねえ、皆さん（ミーチャは苦い顏をした）感情にまで立ち入つて、皆さんはわたしに訊問なさる權利はないやうに思ひます。また、假りに、あなた方が、さうした權利をお持ちになつてゐられたとしても、これはわたしのことなんです。わたしの內心の秘密なんです。しかも、私は以前にも自分の感情をかくしたことはありませんでした、……例へば、居酒屋などでも、誰であらうとも、わたしは相手かまはずに話してゐたことです。ですから、今も、……今もそれを秘密にしようなどとは思ひません。ねえ、皆さん、この事件において、私にたいして怖ろしい證據が存在してゐることは、わたしにもよく分かつてゐます。わたしは、あいつを殺すとは

みんなに言ひました。ところが、突然あいつは殺されました。して見れば、わたしに嫌疑がかかるのは當然ですよ！　は、は！　わたしはあなた方を責めませんよ、皆さん、決して責めやしません。わたし自身でさへ、すつかり驚ろいてゐるのです。何しろ、若しわたしが殺したのでないとしたら、一體、誰が殺したか？　といふことになりますからね？　さうぢやありませんか？　若し、わたしでなければ、一體誰でせう、誰なんでせう、一體？　皆さん」と彼は不意に叫んだ、「わたしは知りたいのです、どうしても知りたい。いや、わたしはあなた方に說明を要求します。皆さん、一體、親父はどこで殺されてゐたのですか？　どんな風にして殺されたのでせう？　どういふ工合に、そして何で？　わたしにそれを教へて下さい。」彼は檢事と判事とを見まはしながら、早口に訊ねるのであつた。

「わたしたちが現場へ行つて見た時には、あの方は御自分の書齋の中で、頭を打ち割られて、床の上に仰向けに倒れてゐたのです。」と檢事はいつた。

「それは怖ろしいことです、皆さん。」と忽ちミーチャは身慄ひしたかと思ふと、テーブルの上に兩肱をついて、右手で顏をかくした。

「では訊問をつづけませう。」とニコライは遮つた、「それで、あなたにそんなに憎惡の念を起こさせたのは、一體どんな原因だつたのです？　それは嫉妬に起因してゐたのだと、あなたは公然と仰つしやいましたね、たしか。」

「ええ、さうです、嫉妬です。ですが、嫉妬だけではないのです。」

「金錢上の爭ですか？」

「まあ、さうです、金錢上のことからも。」

「あなたの遺産の一部として、あなたが要求なすつた三千留について爭があつたやうですが？」

「三千留？　さうです。もつともつとです。」とミーチャは熱心に叫んだ、「六千留以上です、事によつたら、一萬留以上かも知れません。わたしはみんなにさういひました。一萬留だといつて叫びました。しかし、まあ、よからう、三千留で我慢をしてやらうと決心したのです。わたしにはその三千留がせつぱつまつて入り用だつたのです。……それで、その三千留の包みですが、それを親父は枕の下にしまつておいたのです（わたしはよく知つてゐます）、ところが、それはグルーシェンカにやらうとして用意しておいたものです、この包みを私は、親父が全くわたしの手から盜み取つたやうなものだと考へてゐたのです。皆さん、全くわたしはそれを自分のもの、自分の財産と考へてゐました。實際、自分のものと同じことなんですからね……」

檢事は仔細ありげに判事と眼を見交はして、氣づかれないやうにちよつと瞬いた。

「その問題には、またもう一度立ちかへるとして、」と判事はすぐに口を出した、「つまり、そのお金をあなたが自分の財産だとお思ひになつたといふことを、どうか書き留めさせて下さい。」

「さあ、どうかお書き留め下さい。わたしはそれが自分にとつて、また一つの不利益になる證據物件となることを知つてゐますが、しかしわたしは證據物件を怖れません。わたしは自分で自分にとつて不利益なことを申します。まあ、お聞き下さい、ねえ、皆さん、あなた方はわたしを、實際のわたしとはまるで違つた種類の人間のやうに解釋してゐられるやうですね。」と彼は急に沈んだやうな、落膽した

やうな調子で附け加へた、「今あなた方と話をしてゐるのは、氣高い人間です、この上もなく氣高い人間です。何よりも、——數かぎりもなく墮劣なことはしたけれどもいつもこの上もなく氣高い心を失はない人間でした、一個の人間として、內心は、心の底において、まあその、要するに、どうもうまく言ひあらはせませんが……。わたしは高潔を慕ひ求めて、今日まで、絕えず苦しんで來たのです。わたしはいはば、高潔そのものの殉難者でした。提灯を持つて、——ディオゲネスの提灯をもつて、それを探し求めたのでした。そのくせ、わたしはすべての人間と同じやうに、一生涯卑劣なことをしつづけて來ました。……いや、わたし一人きりです、すべての人間ではありません、一人きりです、私は言ひ間違ひました、皆さん。わたしは頭が痛みます。」と彼は苦しさうに顏をしかめた、「ねえ、皆さん、わたしはあいつの顏が氣に食はなかつたのです。あいつには何かしら破廉恥と高慢と、すべての神聖なものを足蹴りにしたやうな表情と、皮肉と不信とを一しよにしたやうな表情がありました。見つともない、實に見つともない顏です！　しかし、もう死んでしまつたとすると、わたしの考へも變つて來てゐます。」

「變つたとはどういふ風に？」

「いや、變つたといふんぢやありませんが、あんなに憎まなければよかつたと思ふのです。」

「後悔してゐるのですか？」

「いいえ、後悔といふ譯ぢやありません。それは書き留めないで下さい。わたし自身そんなに立派な人間ぢやないんですからね、皆さん、またわたし自身そんなに美男子ぢやないのですから、それですから、あれを見つともないなんていふ資格はないのです、實際！　まあ、よければ、これは書き留め下さい。」

かういひながら、ミーチャは急に怖ろしく沈んだ顏になつた。もう前から彼は判事の審問に答へながら、いよいよ陰鬱になつてゐたのである。

ところが、その瞬間、もう一つの思ひがけない場面が生じた。グルーシェンカはさつき向ふの方へ連れて行かれたが、そんなに遠いところではなかつた。いま審問の行はれてゐる空いろの部屋から、わづか三つ目の部屋であつた。それは窓の一つある小さな部屋で、昨夜ダンスをしたり、世の中が引つくりかへるやうな大騷ぎをした大廣間の、すぐうしろにつづいてゐた。彼女はそこに腰をかけてゐた。わきにはマクシーモフの外には誰もゐなかつた。マクシーモフはすつかり愕ろいてしまつて、ひどく、怖づ怖づしながら、まるで助けを求めるもののやうに、ぴつたりと彼女に寄り添つてゐた。戸口のところには、胸に紋章をつけた一人の百姓が立つてゐた。グルーシェンカは泣いてゐた。と、ふつと悲しみが胸にこみあげて來て、彼女は起ち上がると、兩手を拍つて、甲高い聲で悲しさうに『ああ、悲しい、悲しい』と叫んだかと思ふと、いきなり部屋を飛び出して彼の方へ、いとしいミーチャの方へと走つて行つた。それがあまりに突然だつたので、誰も彼女を引きとめる餘裕もなかつた。ミーチャは彼女の悲鳴を聞きつけると、身慄ひして跳びあがり、前後を忘れて、叫び聲を立てながら、まつしぐらに彼女の方へ駈け出した。が、二人は互ひに顏を見合はせたばかりで、今度も相抱くことは許されなかつた。ミーチャはしつかりと兩手を抑へつけられた。彼があまり激しくもがき狂ふので、抑へるのに三人も四人もか

からなければならなかつた。彼女も同じやうにつかまへられた。ミーチャは彼女が引き立てられながら、大聲に泣き叫んで自分の方へ手を伸ばすのを見た。この騒ぎが收まつたときふと氣がつくと、彼はまた以前の席に、判事と相對してテーブルについてゐるのであつた。彼は一同に向かつて、喚き立てた。

「一體、あれをどうなさらうといふんです？　あなた方はなぜあれをいぢめなさるんです？　あれには罪はありません、罪はありません！……」

彼は檢事と判事とに戒められてゐた。かうして凡そ十分ばかりすぎた。ところが今まで外へ出てゐたミハイルが、急ぎ足に部屋へ入つて來て、昂奮のあまり大音聲を張りあげて檢事にいつた。

「あの女はずつと向うへ連れて行きました。いま下にゐます。ところで、皆さん、この不幸な男にたつた一ことだけ口をきかせて下さらんかの？　あなた方の前で、皆さん、あなた方の前で！」

「さあ、どうぞ、ミハイルさん。」と判事は言つた、「こんな場合ですから、決してわたしたちはお止めはしません。」

「おい、ドミトリイ君、まあ聞くがいい。」とミハイルはミーチャの方に振り向きながら言ひ出した。彼の昂奮した顏には、不幸な男に對する熱烈な、まるで肉身の親のやうな同情ともいふべきものが表はれてゐた、「わしはアグラフェーナさんを下に連れて行つて、この家の娘さんたちに渡して來たんだ。あのマクシーモフ老人がずつとあの女の傍に少しも離れないやうにしてついてゐる。それでわしはあの女によく言ひきかせておいた。いいかの？　わしは言ひきかせたり、なだめたり、諭したりした。あの

人はすつかり諒解しなければならないんだから、邪魔をしたり、あの人の氣を滅入らせたりしてはならないつて。いいかの？　さうでないと、あの男の頭が混亂して、間違つた申し立てをするんだから。つまり、要するに、あの女によく言ひ聞かしてやつたといふ譯さ。そしたら、よく呑み込んだんだよ。ねえ、あの女は利口者だよ。氣だてのいい女だ。あれは君を救つてやつてくれろといつて、わしのやうな爺の手に接吻しかねないやうにしたよ。それからわしをここへよこして、君があの人のことを心配しないやうにと、かう言つてくれと賴むぢやないかよ。だから、これからわしはあの人のところへ行つて、君が落ちついてゐることや、あの女のことについてはもう安心してゐる、といふやうなことを言つてやらなけりやならん。ねえ、君、そんな譯だから君は落ちつくがいいよ。ようくこのことを考へてな。わしはあの女にたいして惡いことをした。あの女はクリスチャンの心を持つてゐる。いや、皆さんあれは實際に素直な女ですよ。少くも罪なんかありません。時に、カラマゾフ君、わしはあの人に何といつたもんだらう、君はじつと落ちついて腰かけてゐられるかえ？」好人物のミハイルは餘計なことを何のかんのと喋つてゐたが、グルーシェンカの悲しみ、同じ人間の悲しみが、彼の善良な心に浸みて、眼には涙さへも浮べてゐた。ミーチャはふつと立ちあがつて、ミハイルに飛びついた。

「失禮ですが、皆さん、許して下さい、ああ、どうぞ許して下さい！」と彼は叫んだ、「あなたは天使のやうな、全く天使のやうな心を持つてゐらつしやいます。ミハイルさん、あれに代つてわたしは厚くお禮を申し上げます！　きつと、きつと私は落ち着きます、靜かにします、愉快になります。どうか、あれに言つてやつて下さい、どうかあなたの限りない御親切をもつて、かうおつしやつて下さい。わた